



大  
省  
7.2  
本  
御  
心



始





持116  
327



目次

|                           |       |   |
|---------------------------|-------|---|
| 序文                        | ..... | 一 |
| 題字                        | ..... | 一 |
| 明治神宮寶物殿に於ける明治天皇並に昭憲皇太后の御物 | ..... | 一 |
| 一、吾等は日本人である               | ..... | 六 |
| 二、若き日本國                   | ..... | 六 |
| 三、天皇のしるしめす國               | ..... | 六 |
| 四、世界の列強と日本國               | ..... | 六 |
| 五、興亡の分岐點                  | ..... | 六 |
| 六、愛國心といふこと                | ..... | 六 |
| 七、民か本か君か本か                | ..... | 六 |
| 八、大國民の自覺                  | ..... | 六 |
| 九、生きがひのある一生               | ..... | 六 |
| 一〇、世界の平和                  | ..... | 六 |
| 跋                         | ..... | 六 |

1086152



## 序

日本國民の凡てが奮起しなければならぬ時が來た。今日に於ける吾等日本國民の覺悟次第で、此國の運命が定まるのである。此國は永く世界の國々の師表と仰がれて、世界の國々を指導する地位に立つであらうか。但しは世界の強國たる價値を失つて、東亞の片隅に屏息してしまはなければならぬか。これを決定するものは吾等自身である。

千萬の民よ心をあはせつゝ國に力を盡せとぞおもふ  
とは明治天皇の御製である。吾等は皆此の御製の御心を以て吾等の心としなければならぬ。

吾等は貴い祖先をもつて居る。此の日本國に二千數百年の光輝ある歴史のあるのは決して偶然でない。吾等の祖先は尊い皇室の大御心を身に體し、力を協せ心を一にし



二  
て此國を護つて來たのである。しかし今までに今日の如く大切なる時機はなかつた。今日に至つて吾が日本國民は初めて東亞諸國民を代表して世界列國の間に立ち、吾等が二千數百年來養ひ來つた所の力を試すべき時機に際會したのである。此時に當つて吾等が失脚してしまふならば、光輝ある此國の歴史は泥に塗れてしまひ、此國の前途は極めて悲惨なる状態となるであらう。今こそ吾等の凡てが奮起しなければならぬ時が來たのである。

吾等の眼前の世間を見ると、いかにも不祥の出來事のみが多い。しかし吾等は失望してはならぬ。これは畢竟國民の多數が尊い大御心を忘れ、貴い日本の國民性を忘れ、重大なる吾等各自の任務を忘れて居るための結果に外ならぬのである。

白玉を光りなしとも思ふかな磨き足らざることとは忘れて

といふ明治天皇の御製は、眞に吾等の爲に最も痛切なる御訓戒である。

今の世間は各方面ともに行き詰りである。此の行き詰りを切り開いて、此の國の健

全なる發展の途を求め、尊い大御心を發揚すべきために力を盡すことは、お互ひに最も愉快なる、また最も光榮ある業ではないか。此の志を同うする人が多く出れば、國の前途はもはや憂ふるに足らぬ。此の一篇の小著が斯る同志の士を作るために少しなりとも役立つなれば、著者の本懐は之に過ぎぬ次第である。

大正十五年六月

小林 一郎



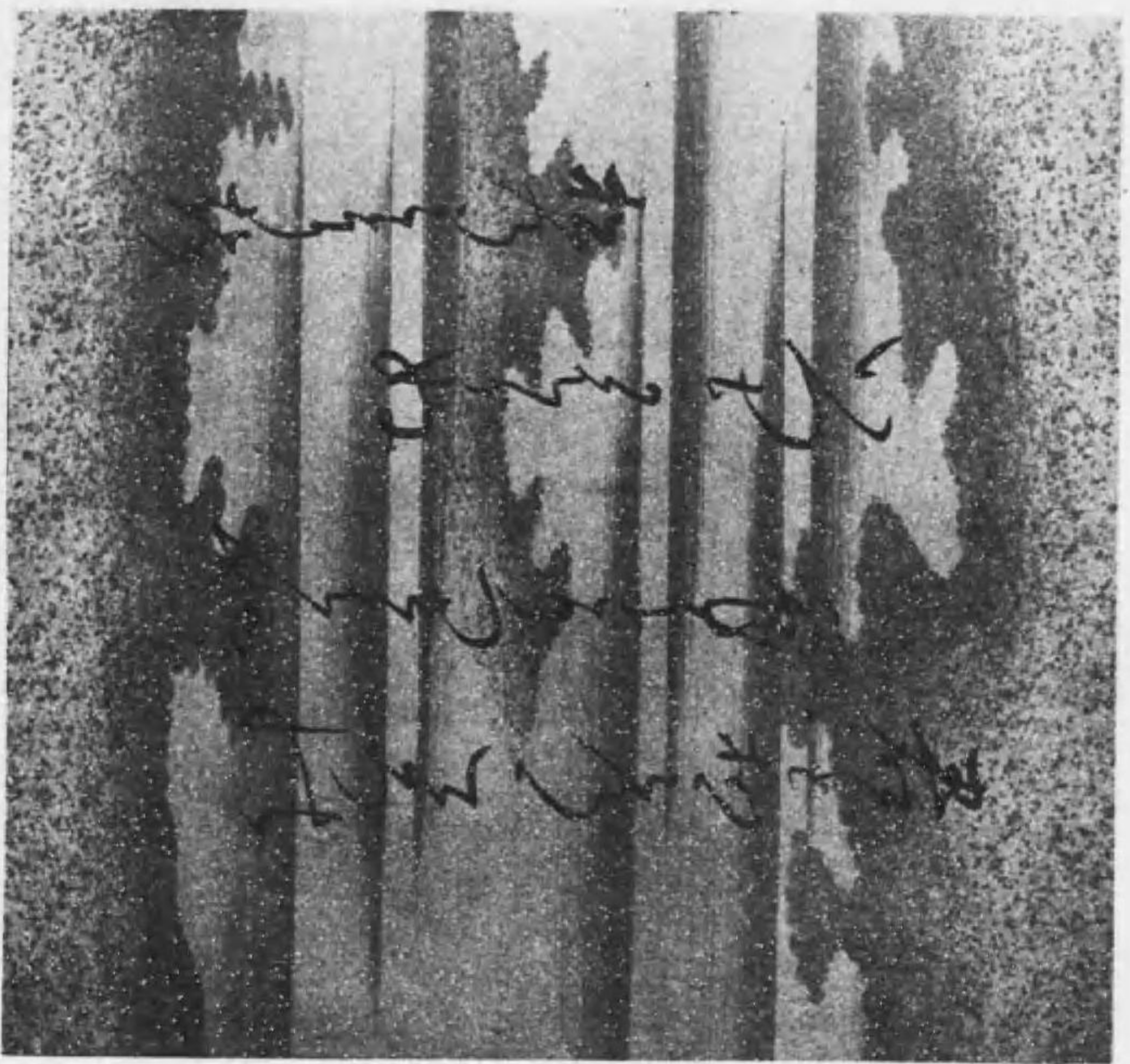
明治天皇 御製

照るにほけくともつけて思ふが  
わか民草乃うへいかに

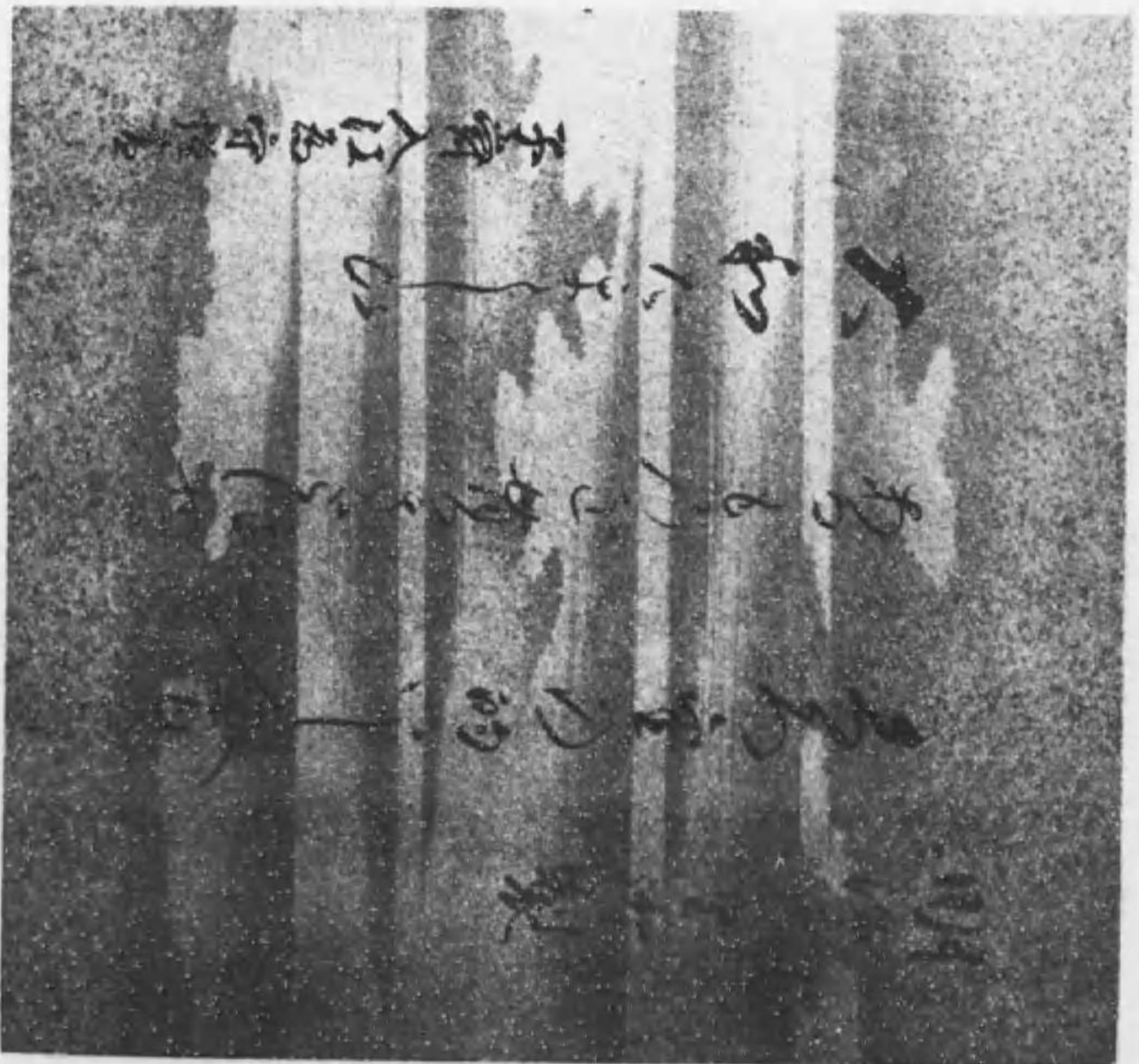
伯爵東郷平八郎

元帥海軍大將 伯爵 東郷平八郎閣下





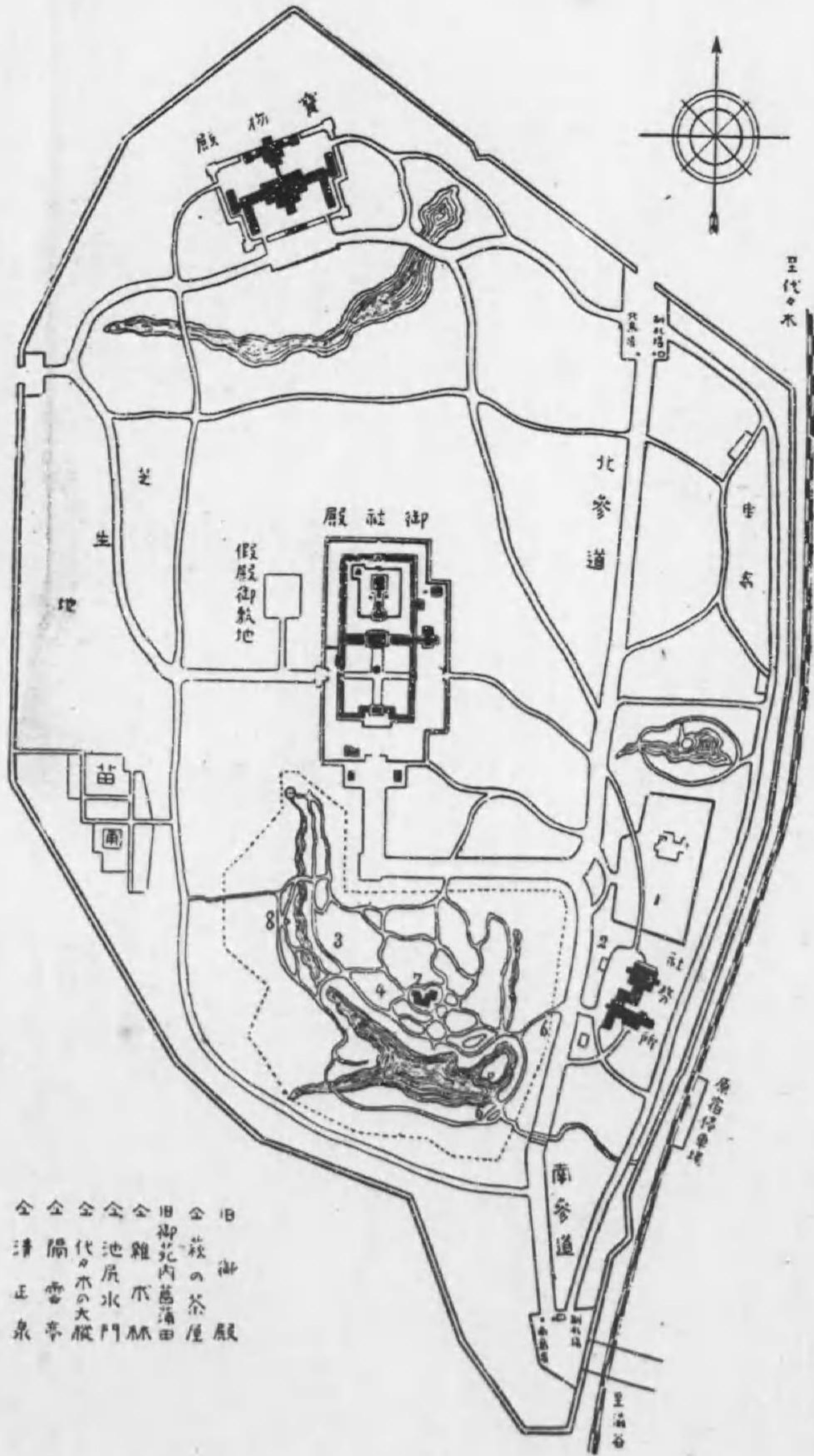
典侍 正三位 高倉壽子



東宮侍從長 御歌所長 子爵 入江爲守閣下



明治神宮



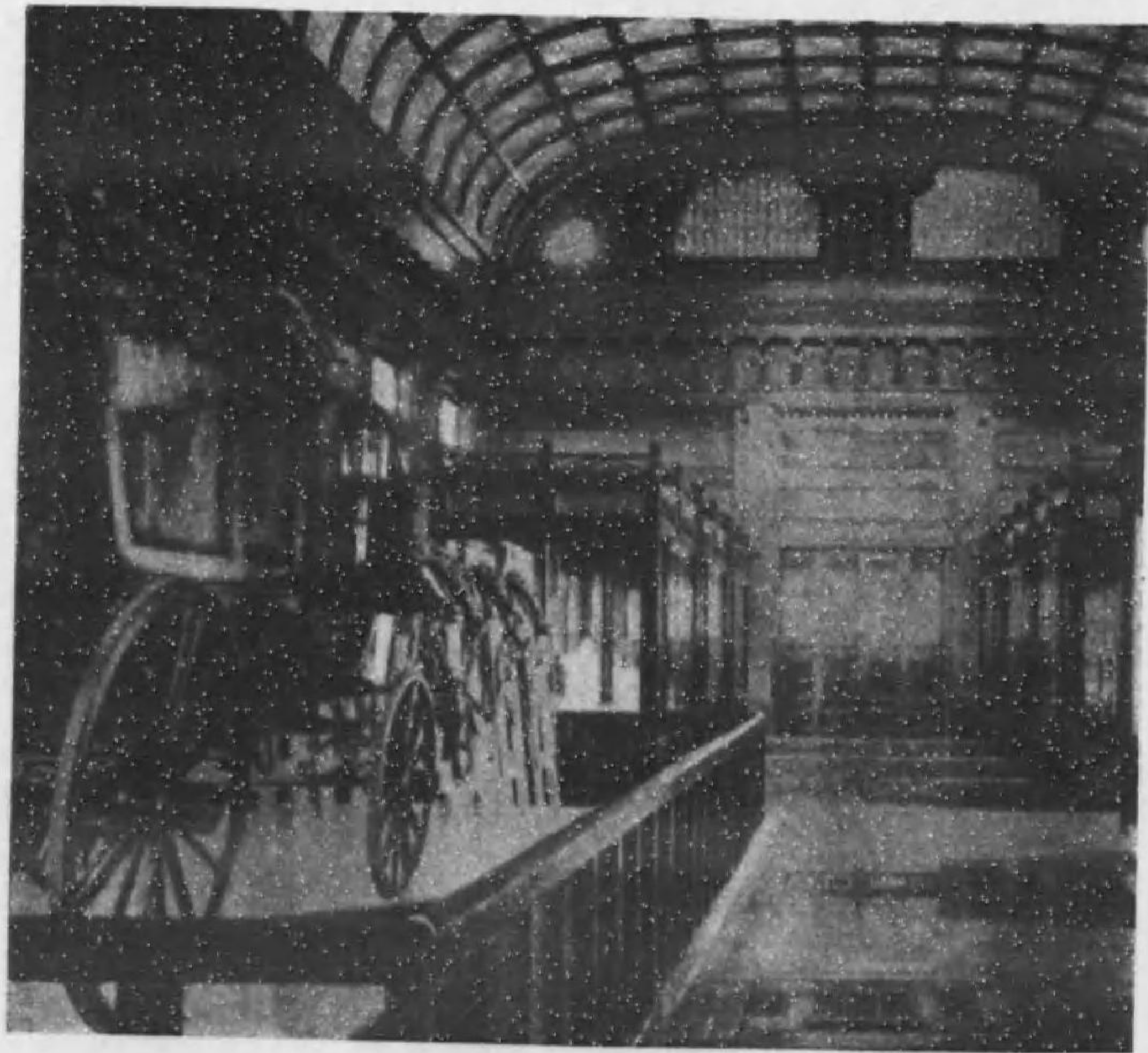
七

- 旧 御 殿
- 全 校 の 茶 屋
- 旧 御 北 内 基 礎 田
- 全 雜 木 林
- 全 池 原 水 門
- 全 代 木 の 大 殿
- 全 隔 雲 亭
- 全 津 正 泉





明治神宮寶物殿外觀



同內部



明治天皇御常用御机

御机覆

梨子地御紋散御簀箱

銀製御紋付御マツチ入大小

銀製御紋付御灰切

御文鎮

腕銀製源氏夕顔之意御香爐

竹製御硯箱

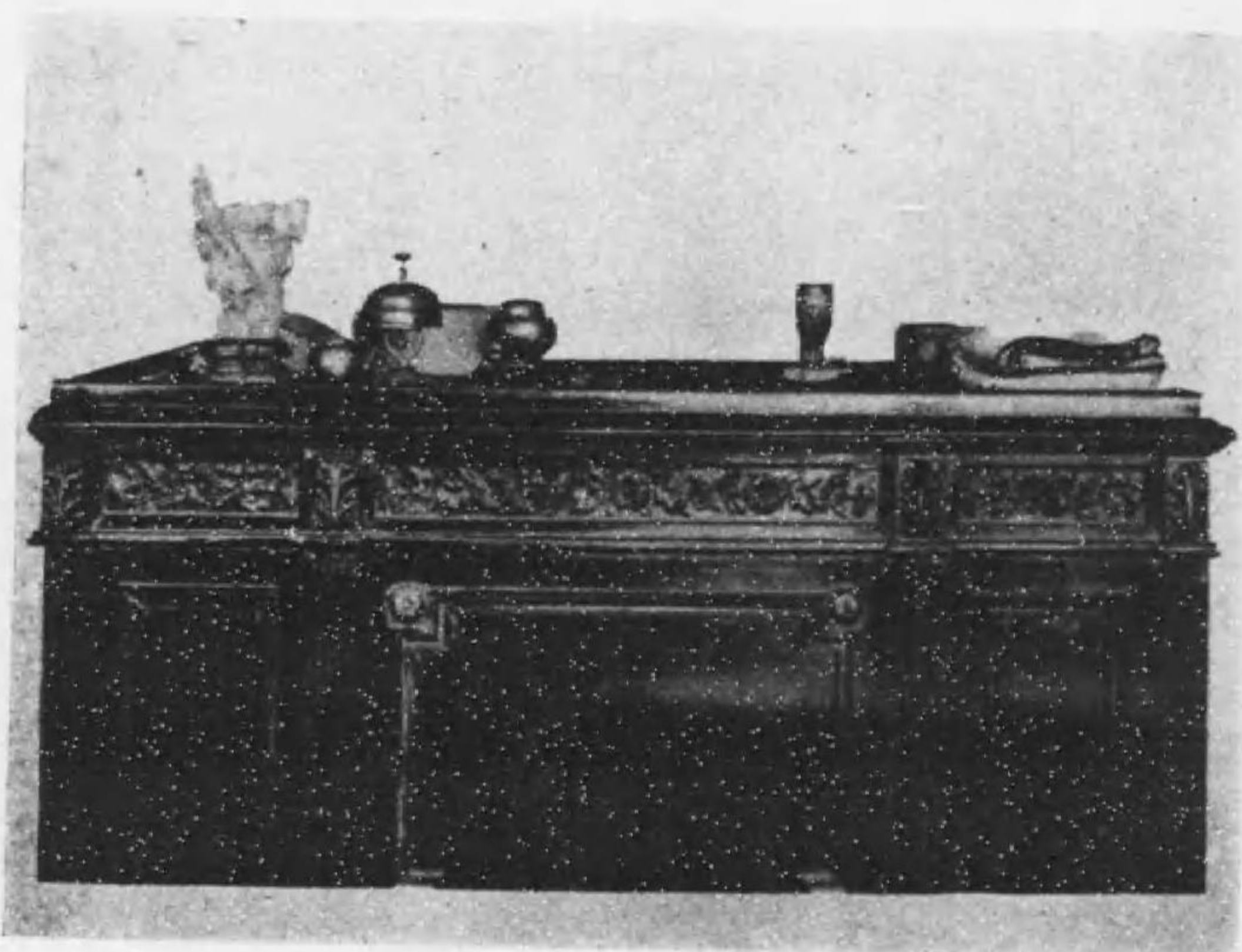
明治十九年鹿兒島産ノ大竹ヲ以テ

御調製ニ相成タルモノナリ

御呼鈴

銀製御水入

尾長鳥及葡萄彫玉花瓶



御椅子 (樺製)

北海道産ノ木材ニテ御製作ヲ命ゼラレ常ニ表  
御座所ニ於テ御使用遊バサレタルモノノ一ナ  
リ





明治天皇御製 孔明

たつのふす岡のらしゆきふみわけて  
草のいほりをとふ人やたれ

同 御製 逢友述志

きのふけふなかきはる日に我と臣と  
むかしのふみのものかたりて

皇朝史略

明治六七年ノ頃侍講福羽美静  
時々進講セシモノナリ

五 經

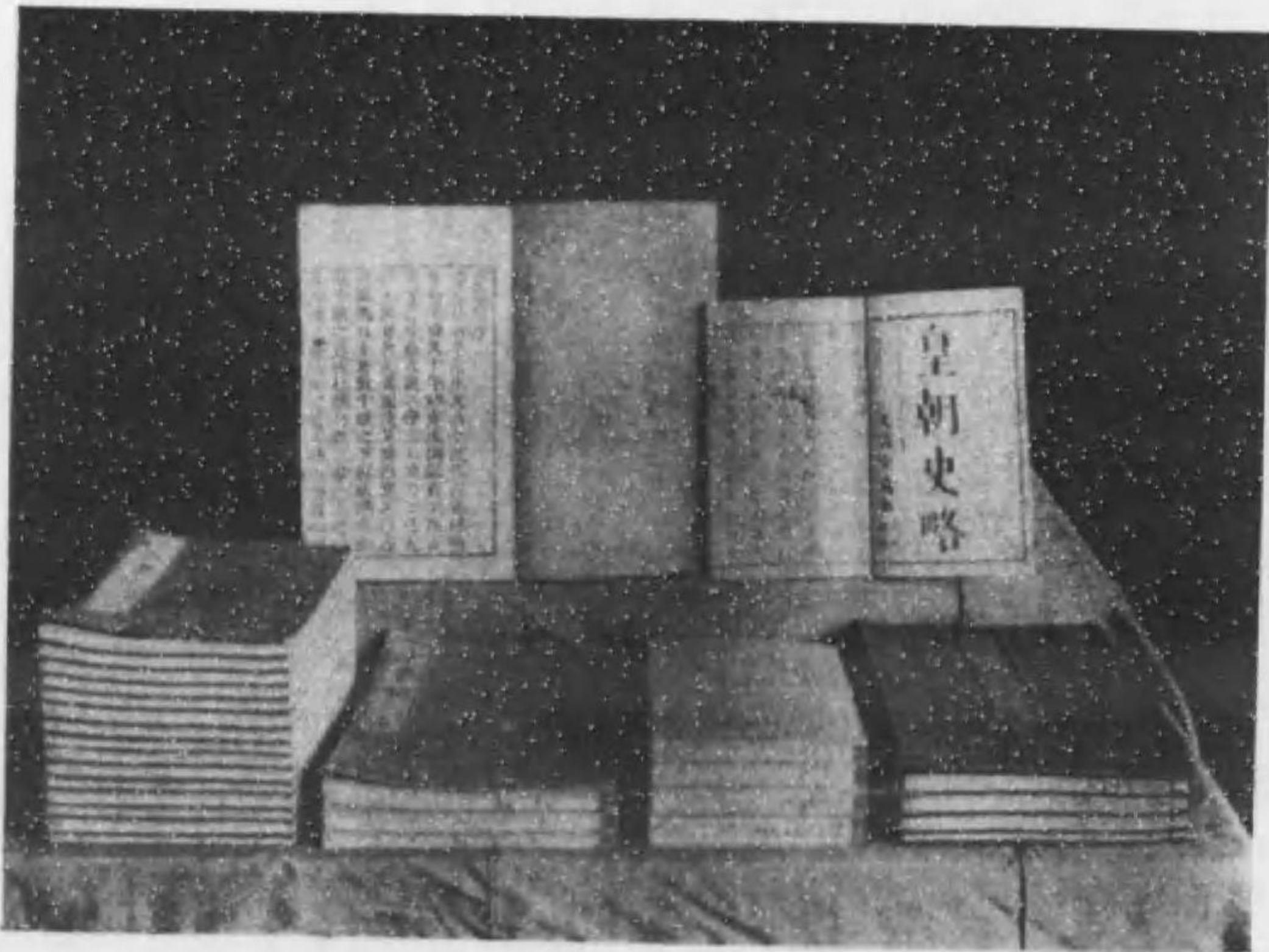
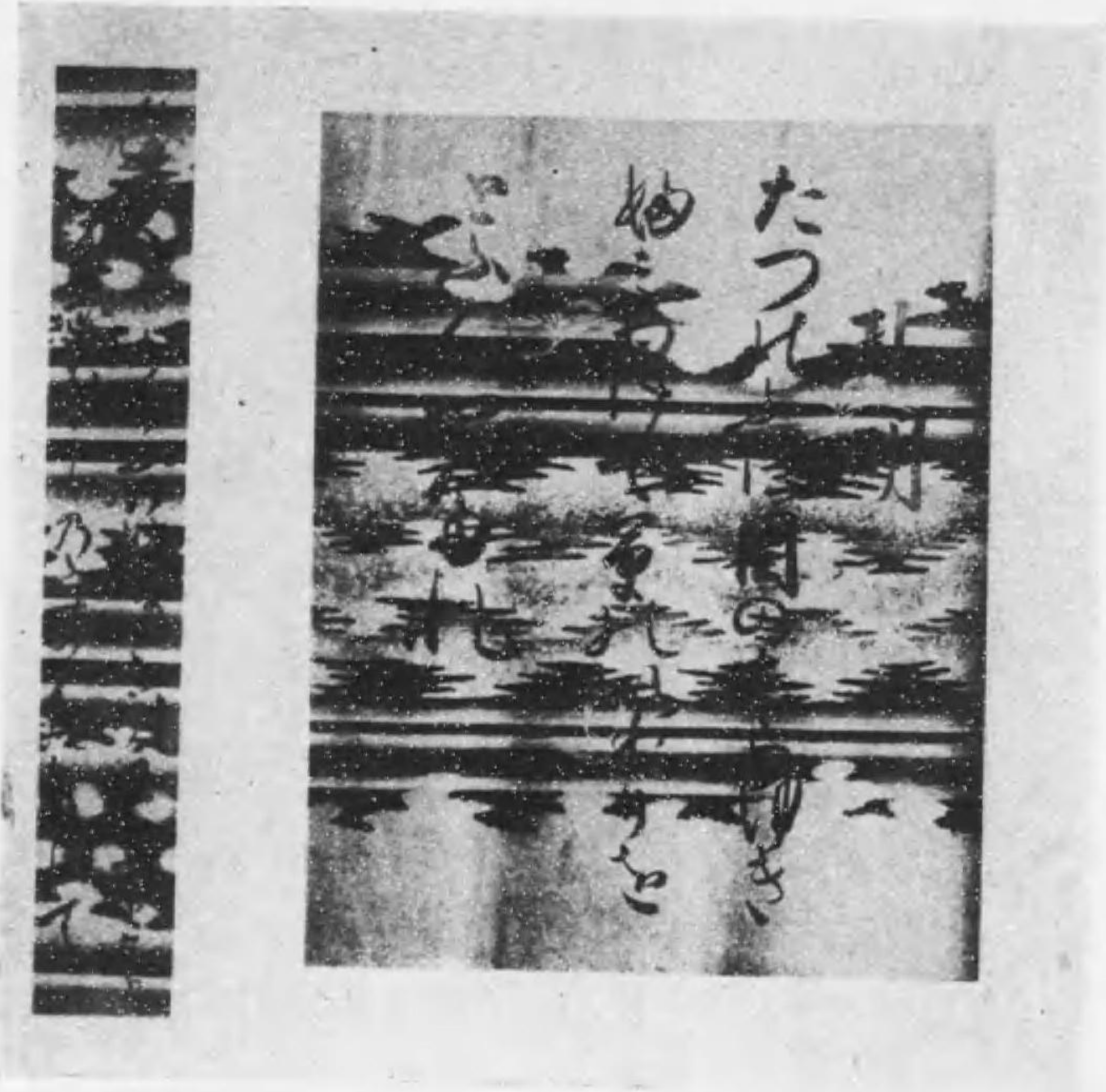
右ノ中詩經ハ明治二年  
正月侍講中沼了三始メ  
テ進講セシモノナリ

古事記

明治元年四月大坂行幸  
御駐驛中東本願寺掛所  
ニ於テ福羽美静始メテ  
進講セシモノナリ

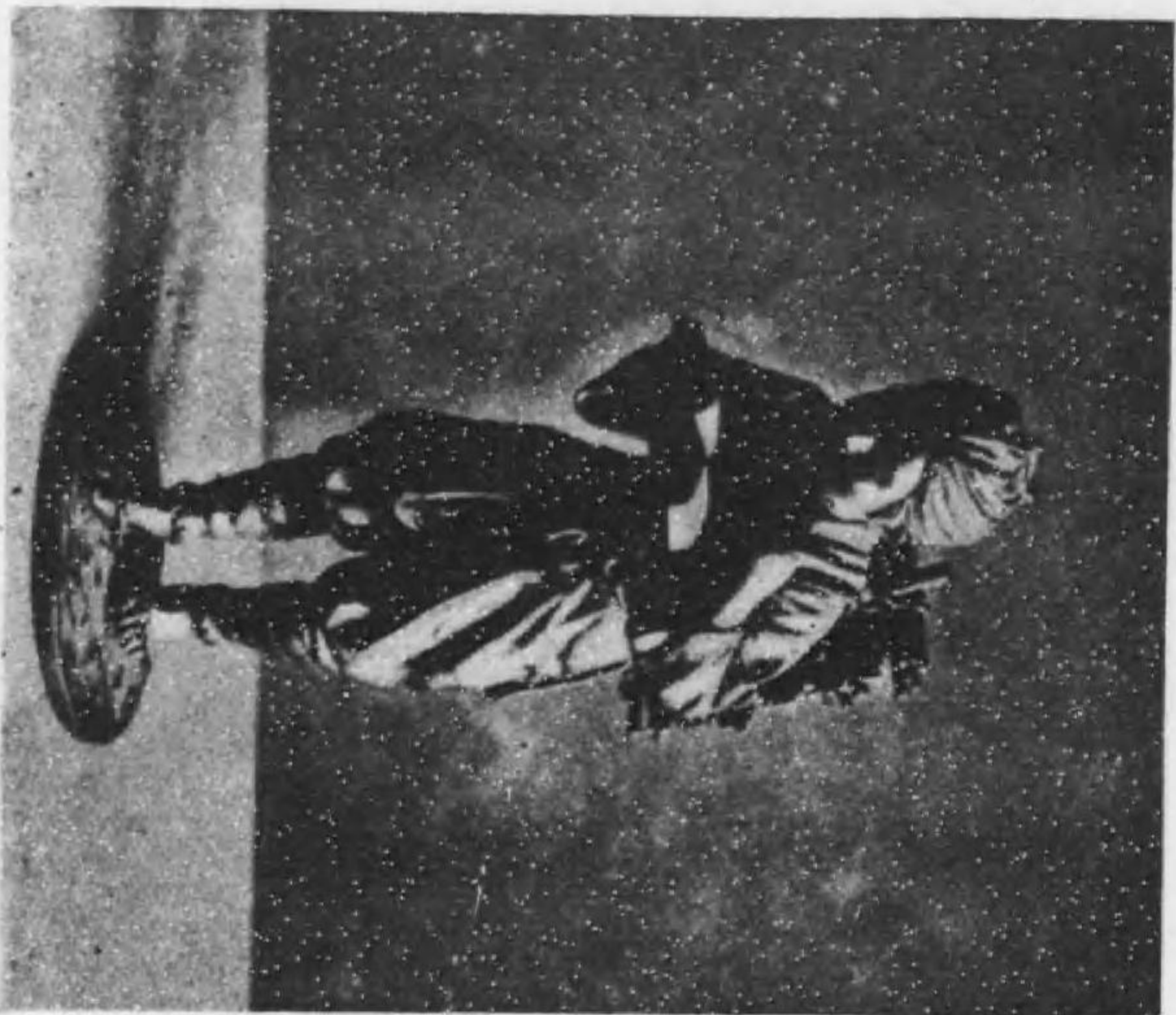
日本書記

明治二年四月侍講福羽  
美静始メテ進講セシモ  
ノナリ

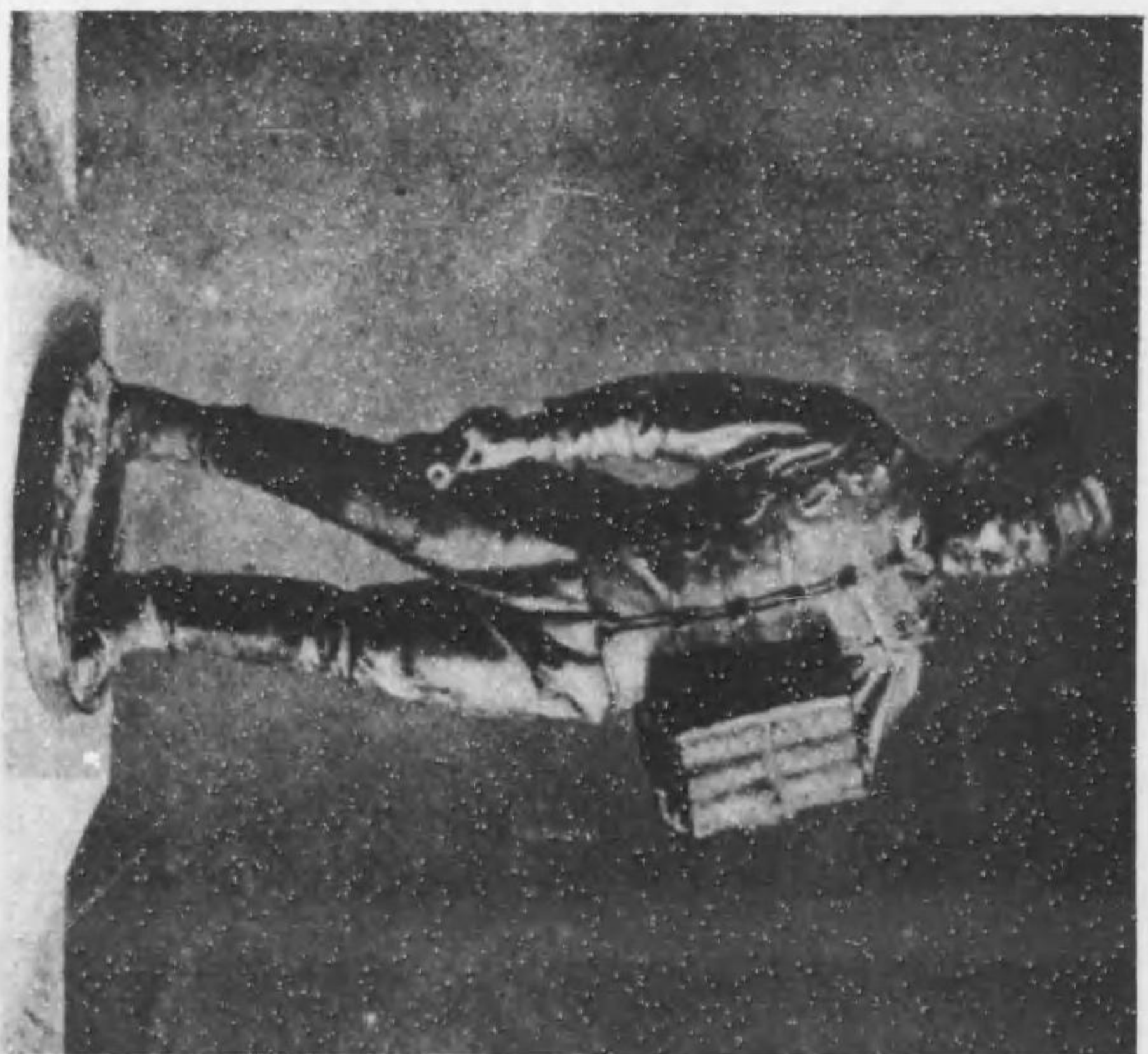




銅製二宮金次郎像御置物  
時々表御座所ニ御飾リ遊バサレタルモノナリ

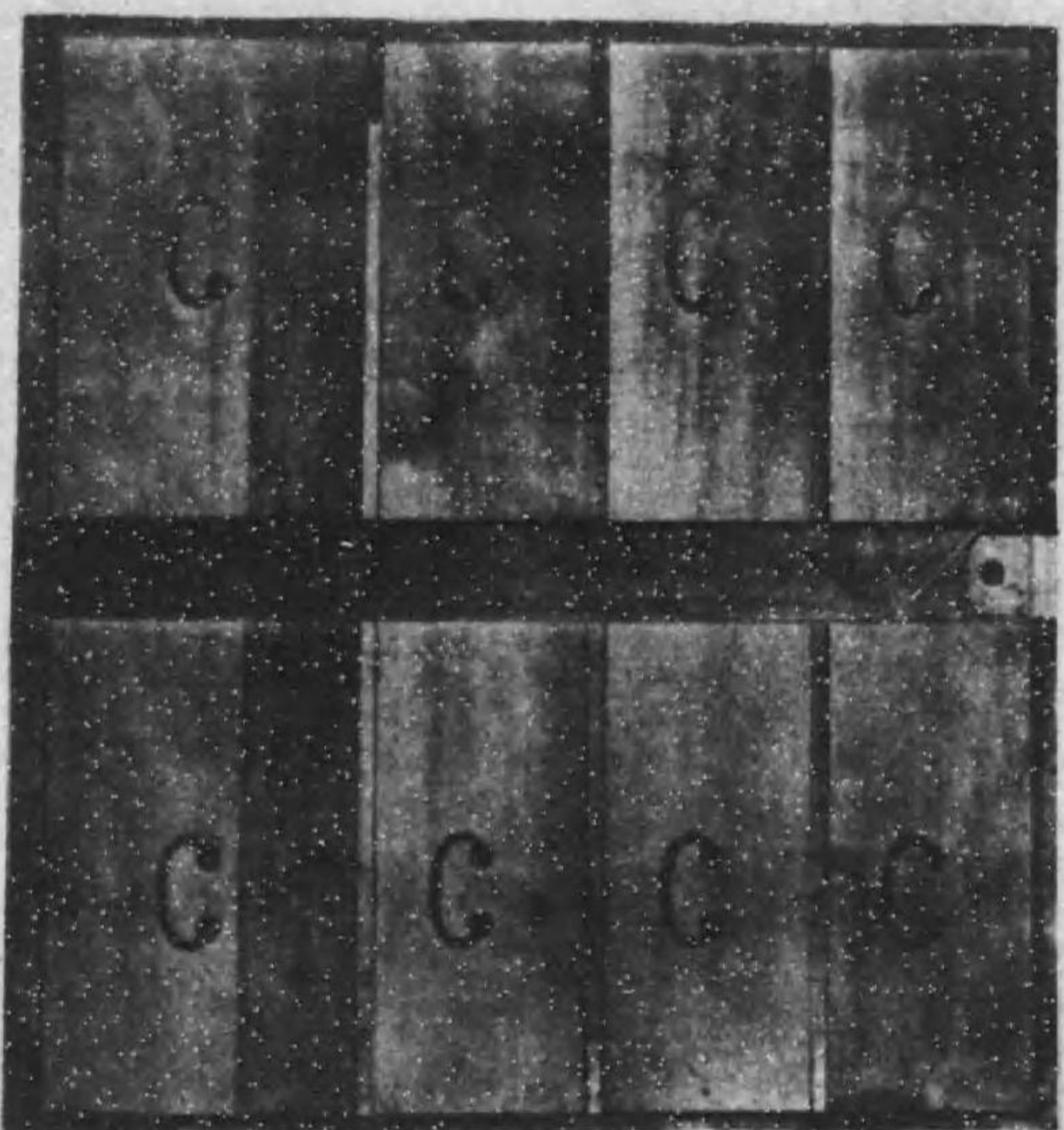


銅製除隊兵像御置物  
時々御飾リニ相成リ御愛玩遊バサレタルモノナリ

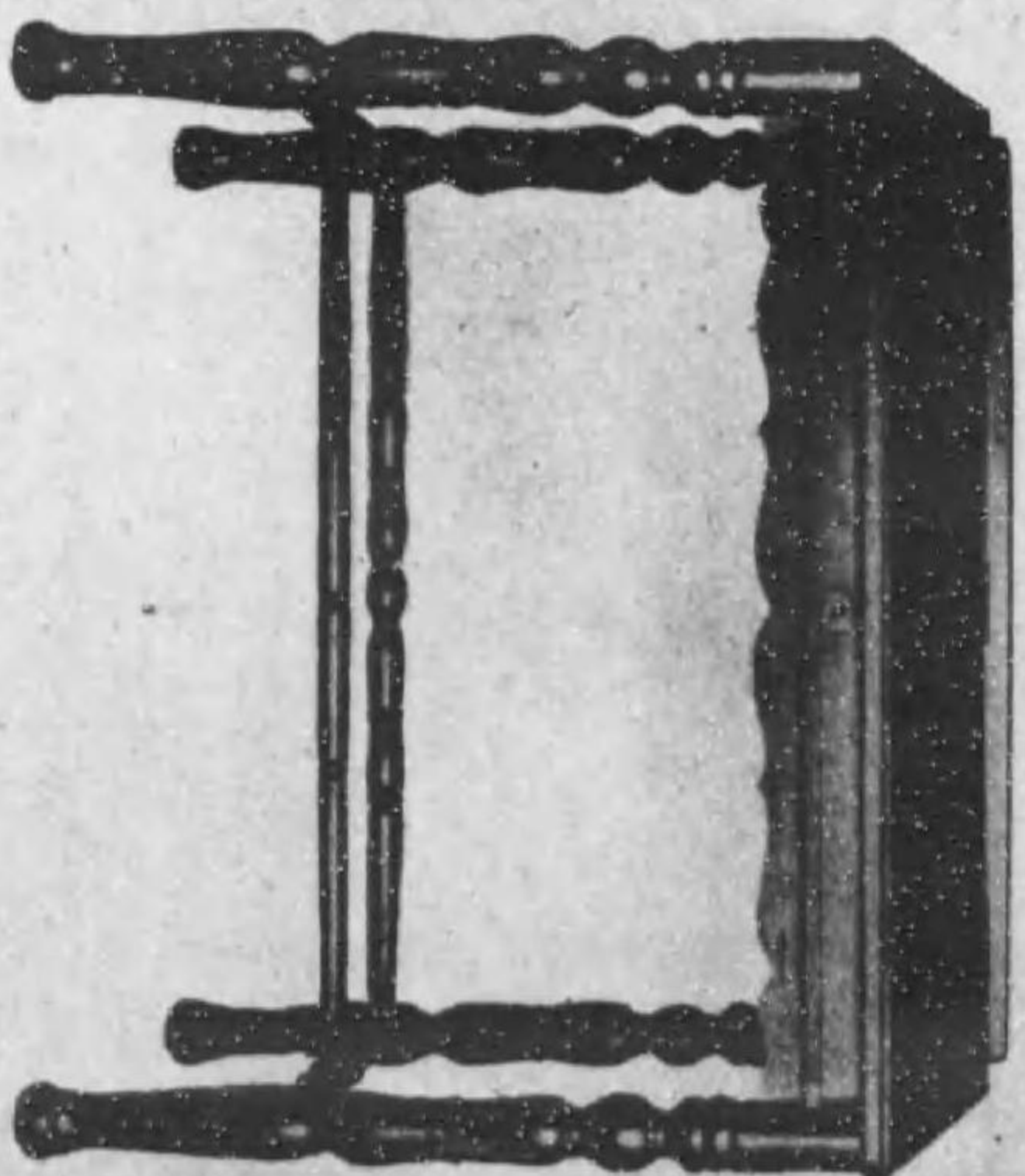




樅製御筆筒  
二十七八年三十七八年戰役報告及外務省報告  
等ヲ御保存ノ爲寸法御示命ノ上作製セシメラ  
レタルモノナリ



桑製西洋御机  
赤坂假皇居西洋御學問所ニ御備付  
御使用アラセラレシモノナリ





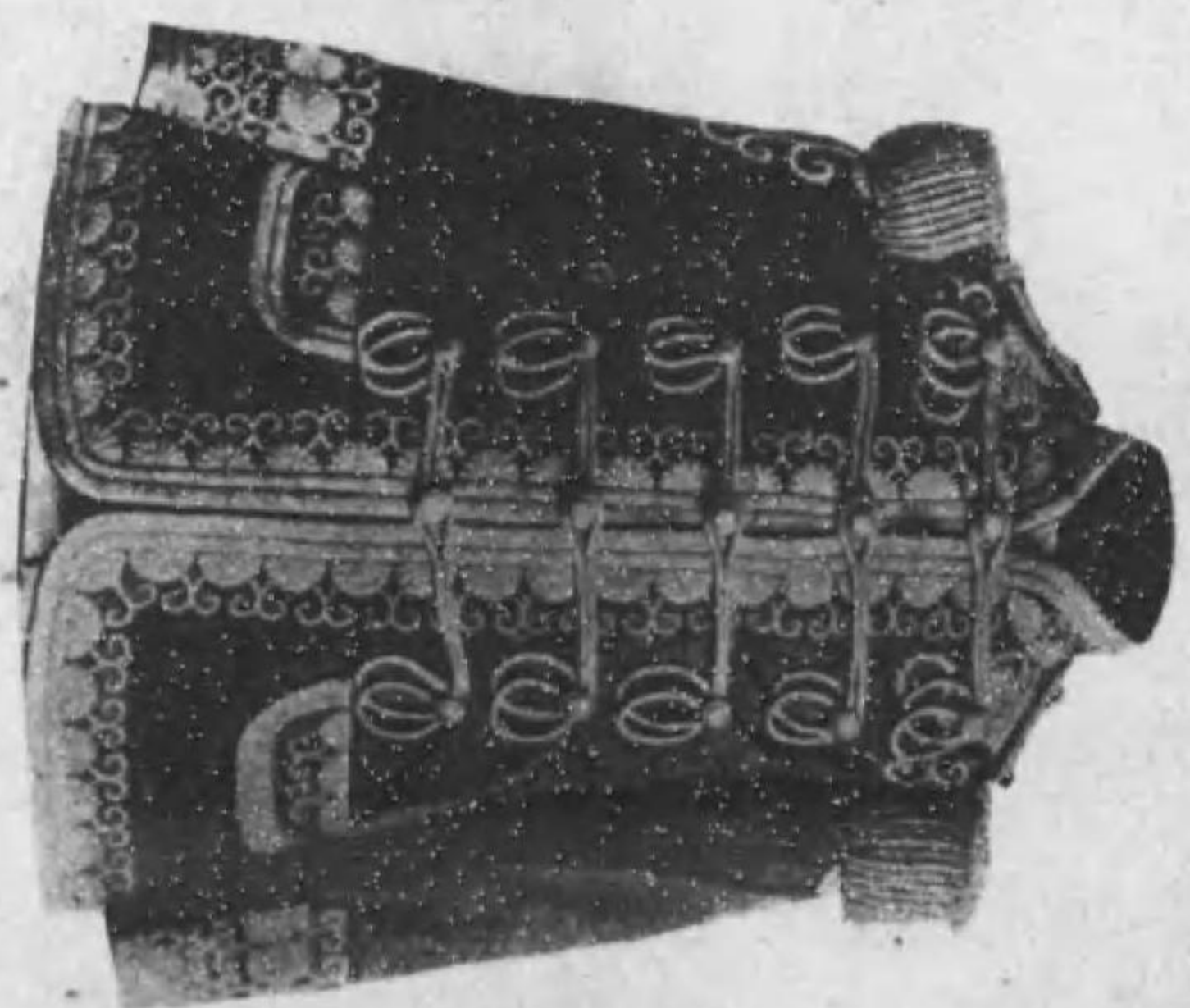
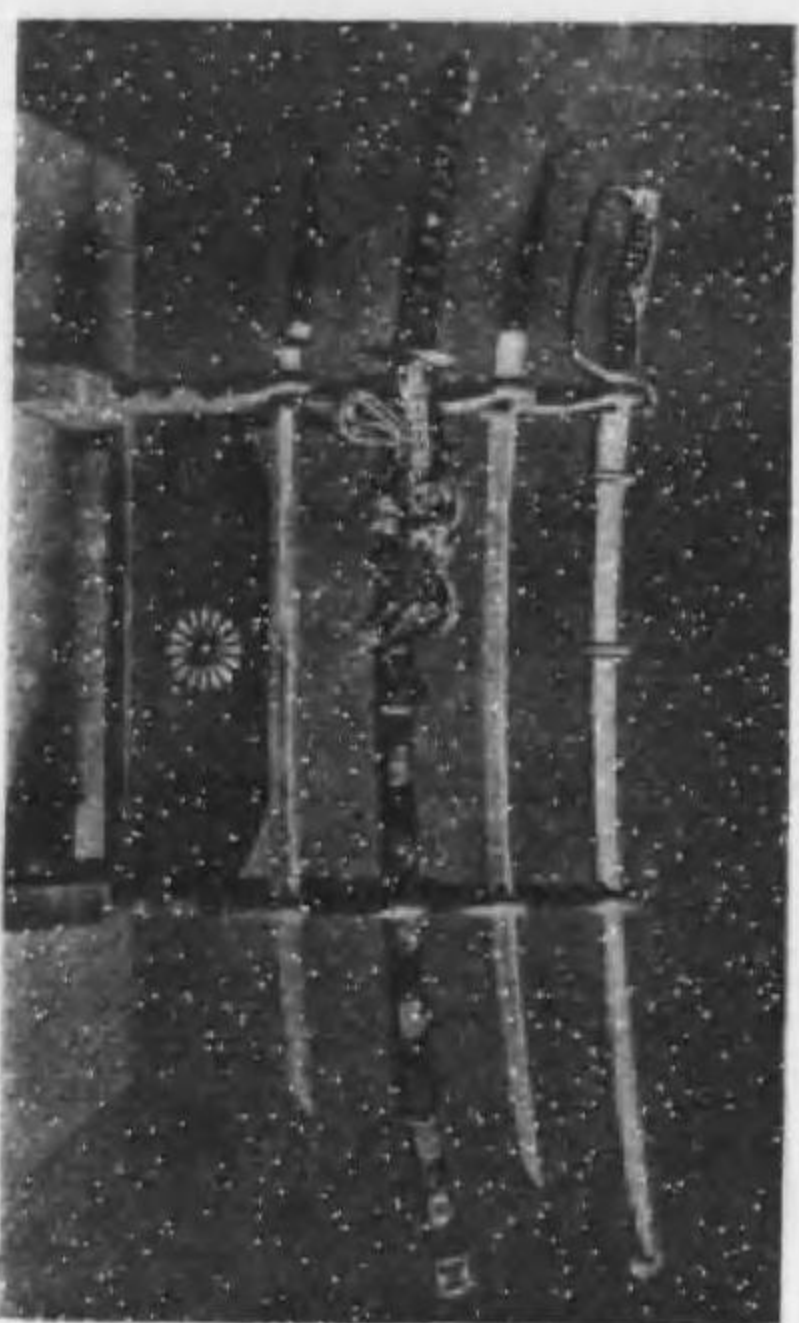
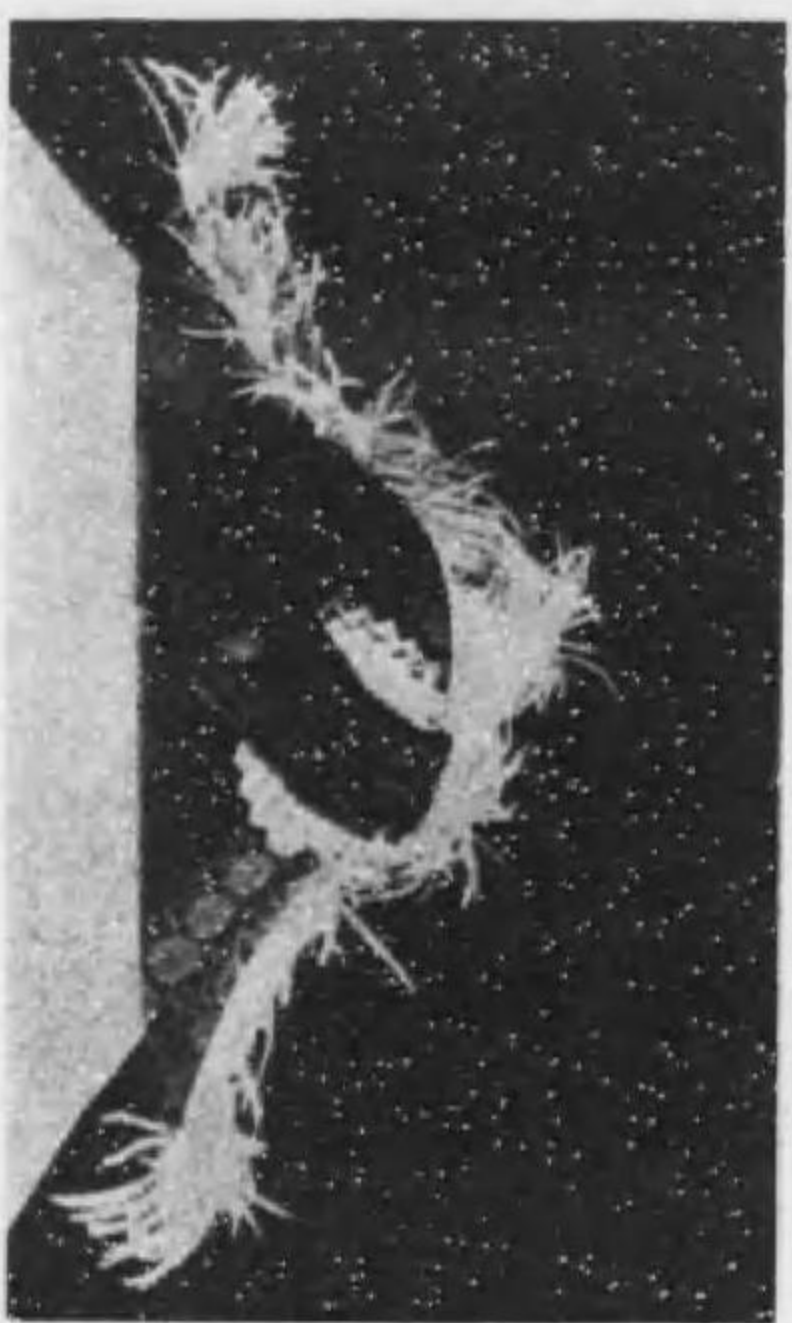
御正帽

御綴 助茂作  
 殊ニ思召ニ適ヒ  
 御軍刀ニ御製作  
 ニ相成リ時々御  
 佩用遊バサレタ  
 ルモノナリ  
 御綴 吉房作  
 時々御座所ニ御飾付ニ  
 相成リ御覽遊バサレタ  
 ルモノナリ

御袴

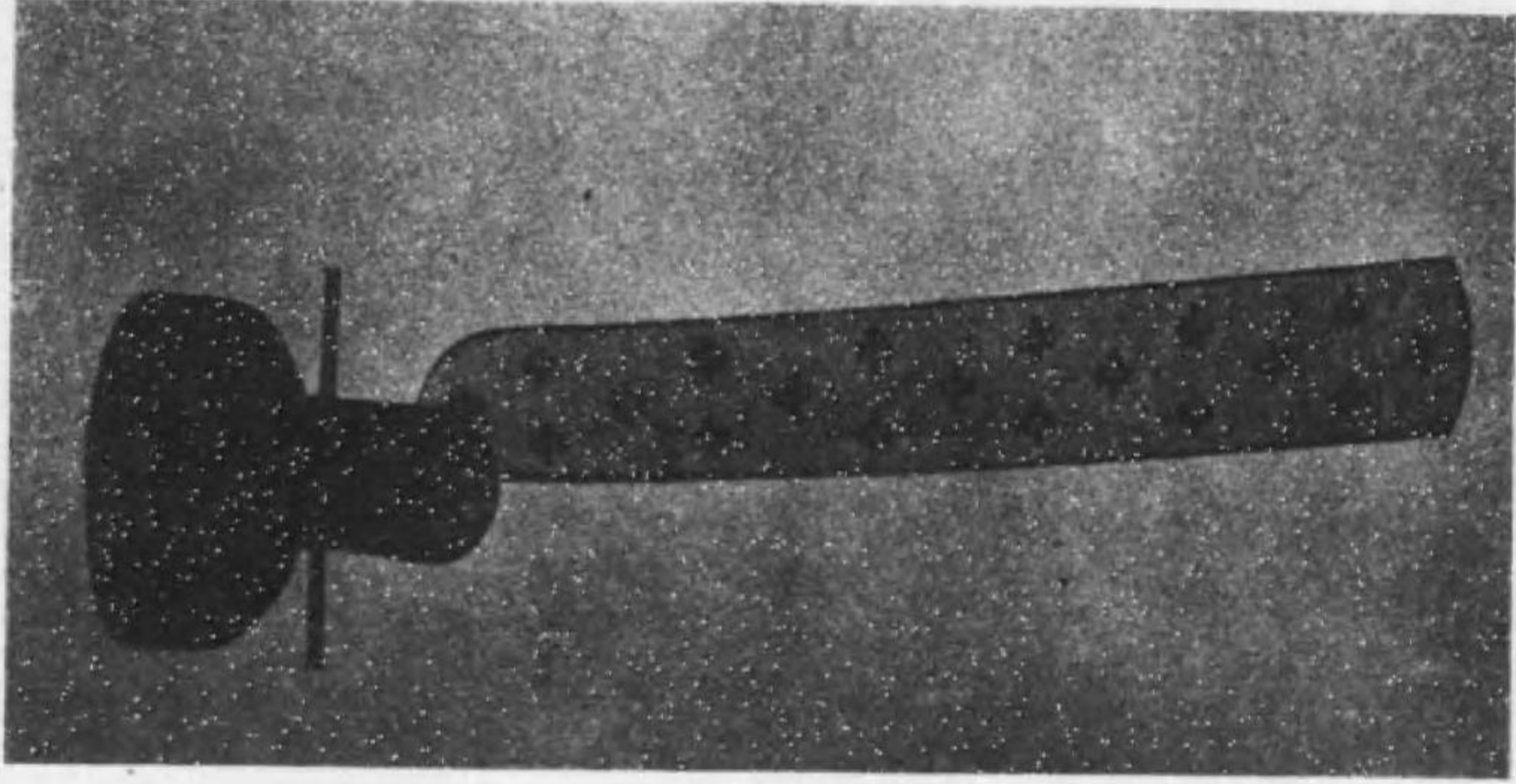
御上衣

御正服  
 明治六年制定ノモノナリ

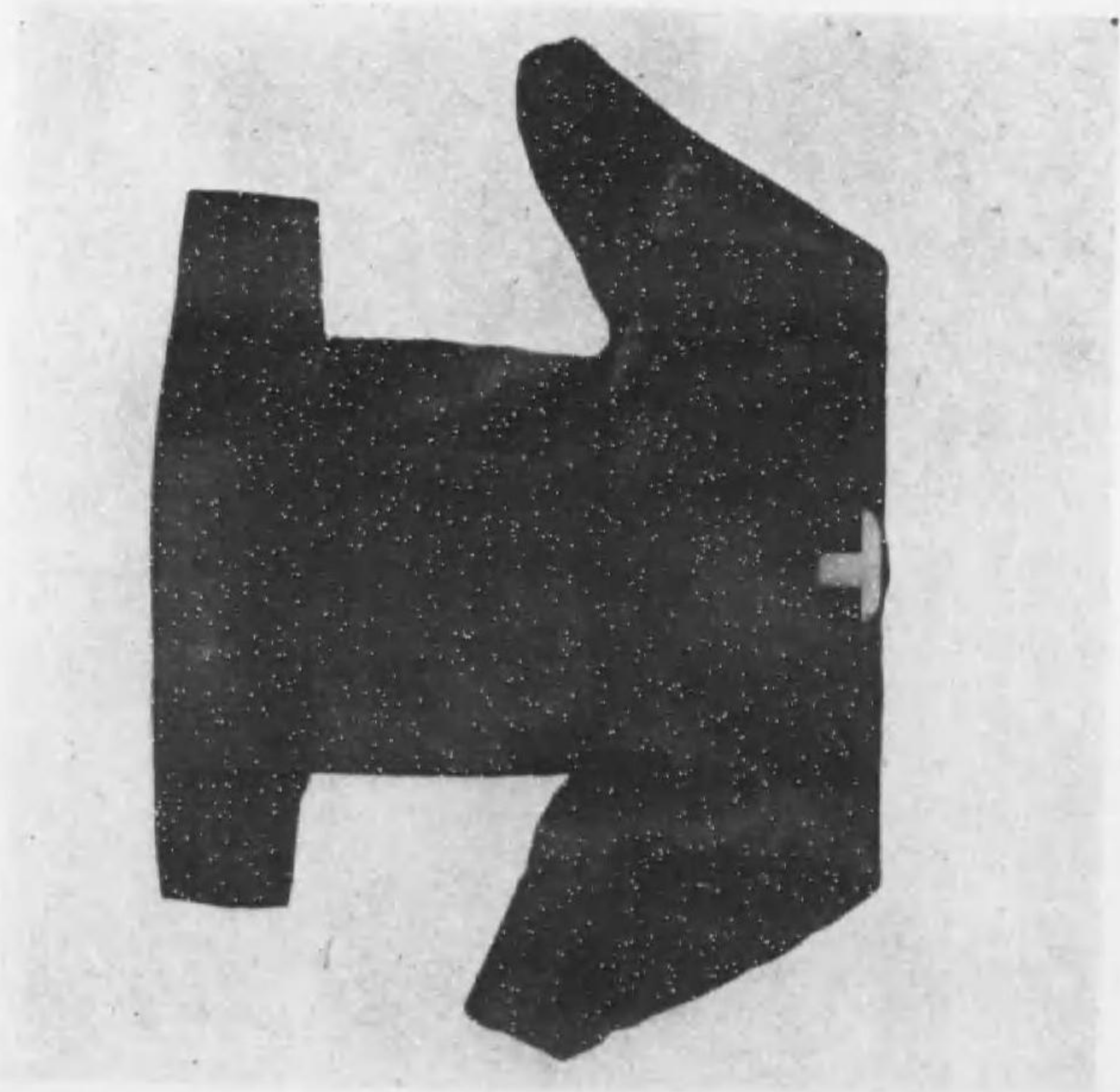




御  
賢所皇靈殿等ニ於テ御祭典ノ節御使用  
アラセラルモナリ



御  
袍  
黄櫨染夏ノ御料ニシテ立夏ヨリ立冬ニ至  
ルマデノ期間賢所皇靈殿神殿等ニ於テ御  
祭典ノ節御着用アラセラルモナリ





昭憲皇太后 御歌

御歌

やつかほのたりほのうへにいたつきし  
ひとのちからもみゆるあきかな

古訓古事記

福羽美静ヨリ進講ノ節御用品

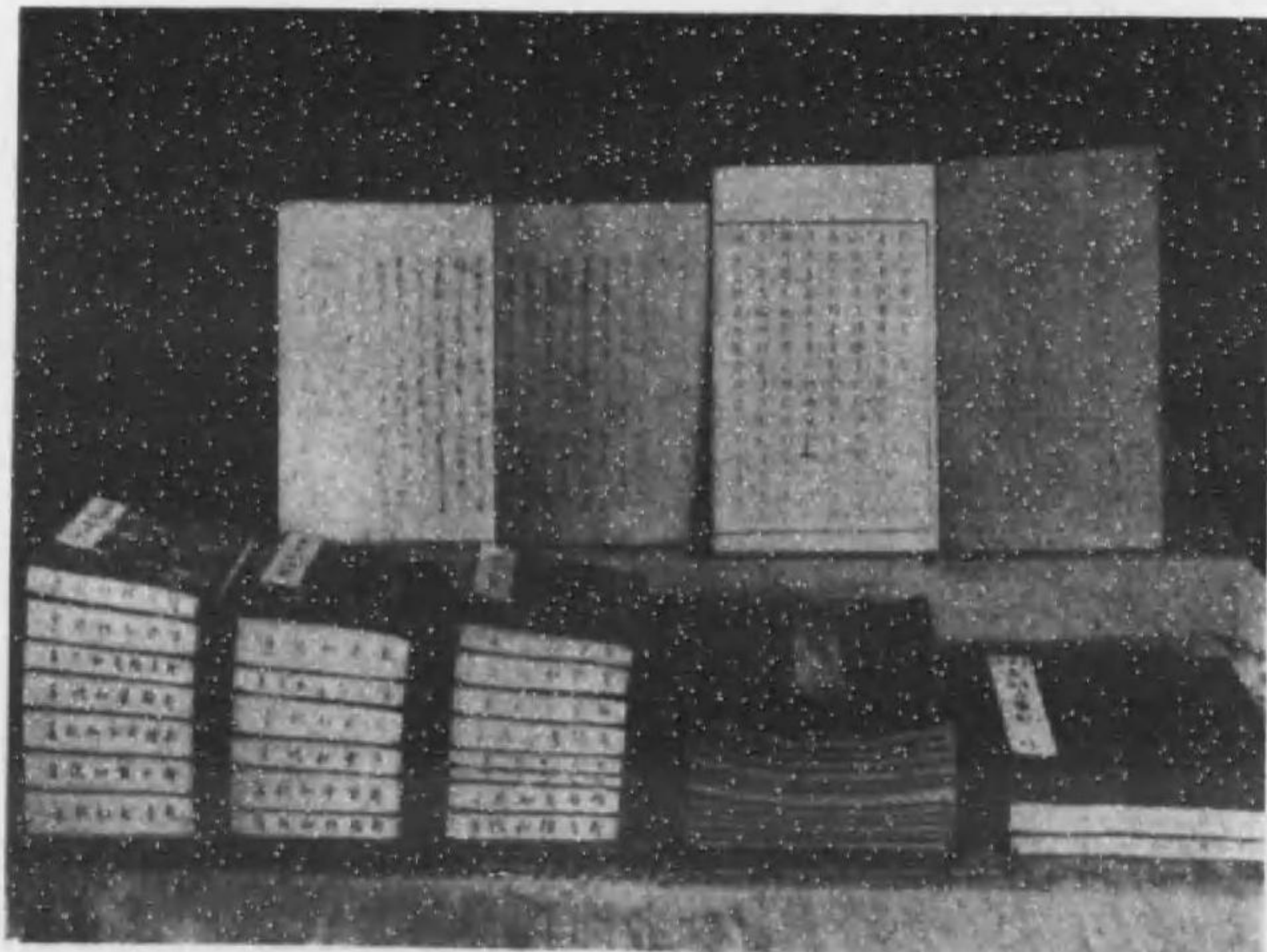
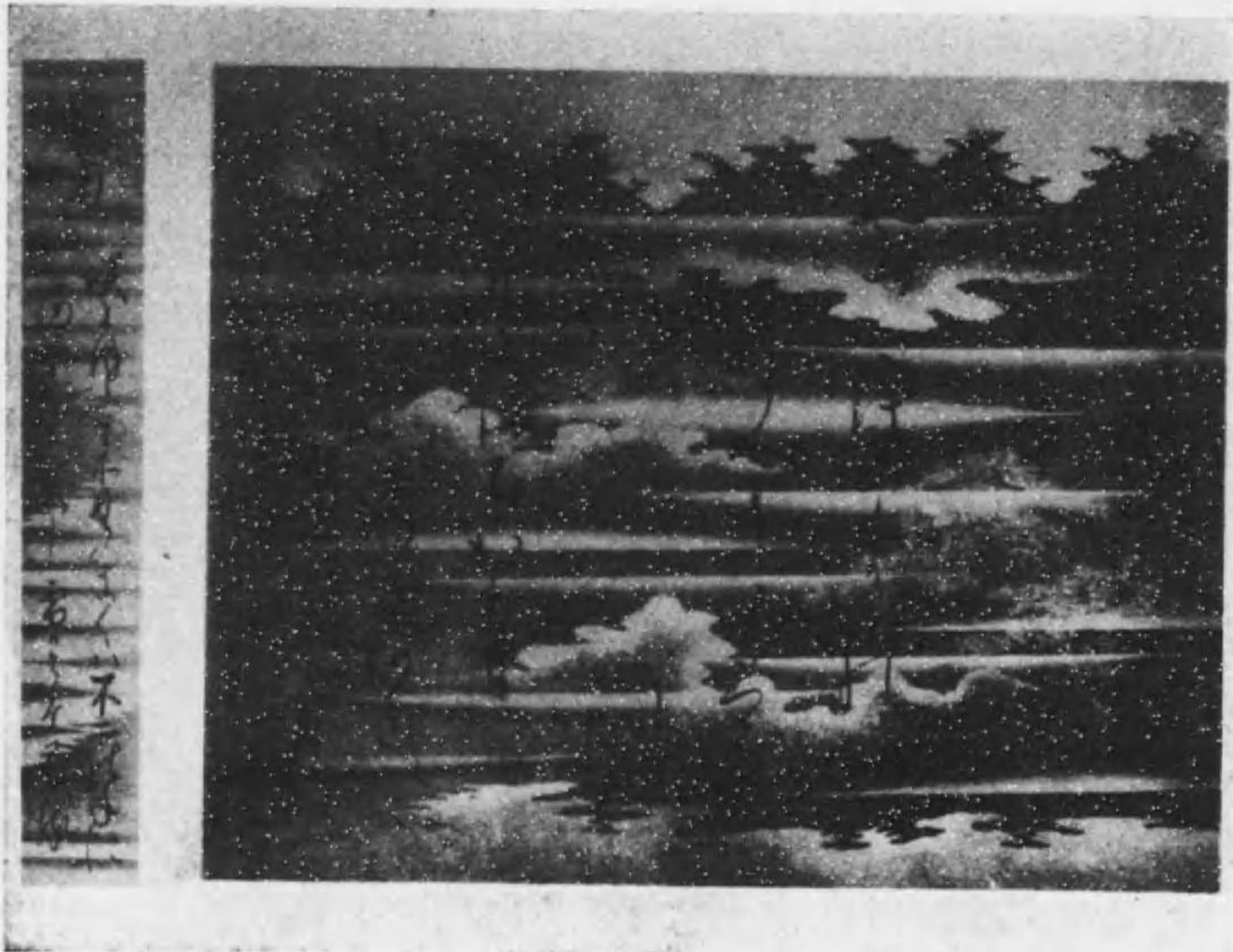
榮華物語

二十一代集

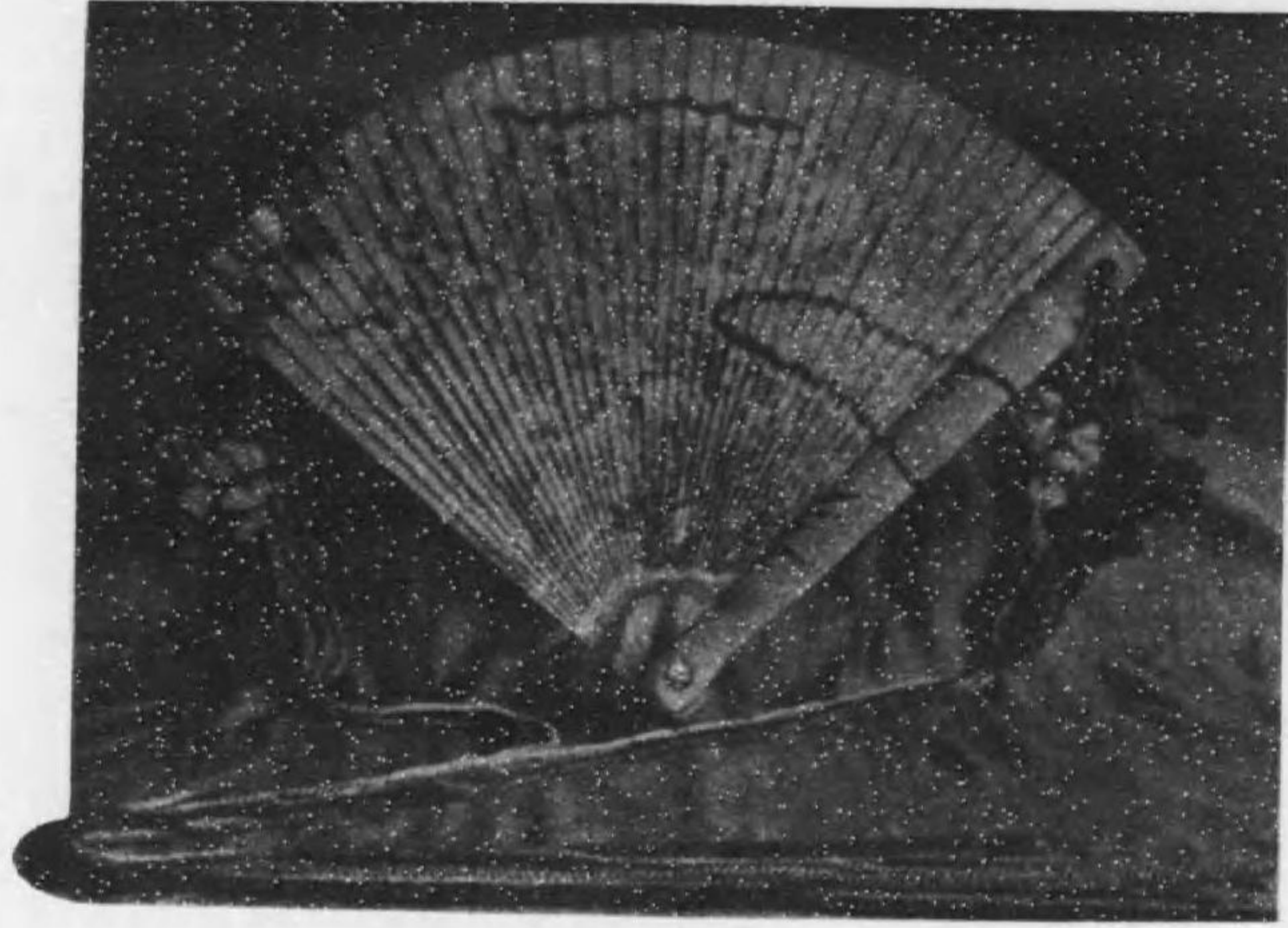
日常御愛讀アラセラルタルモノナリ

御歌

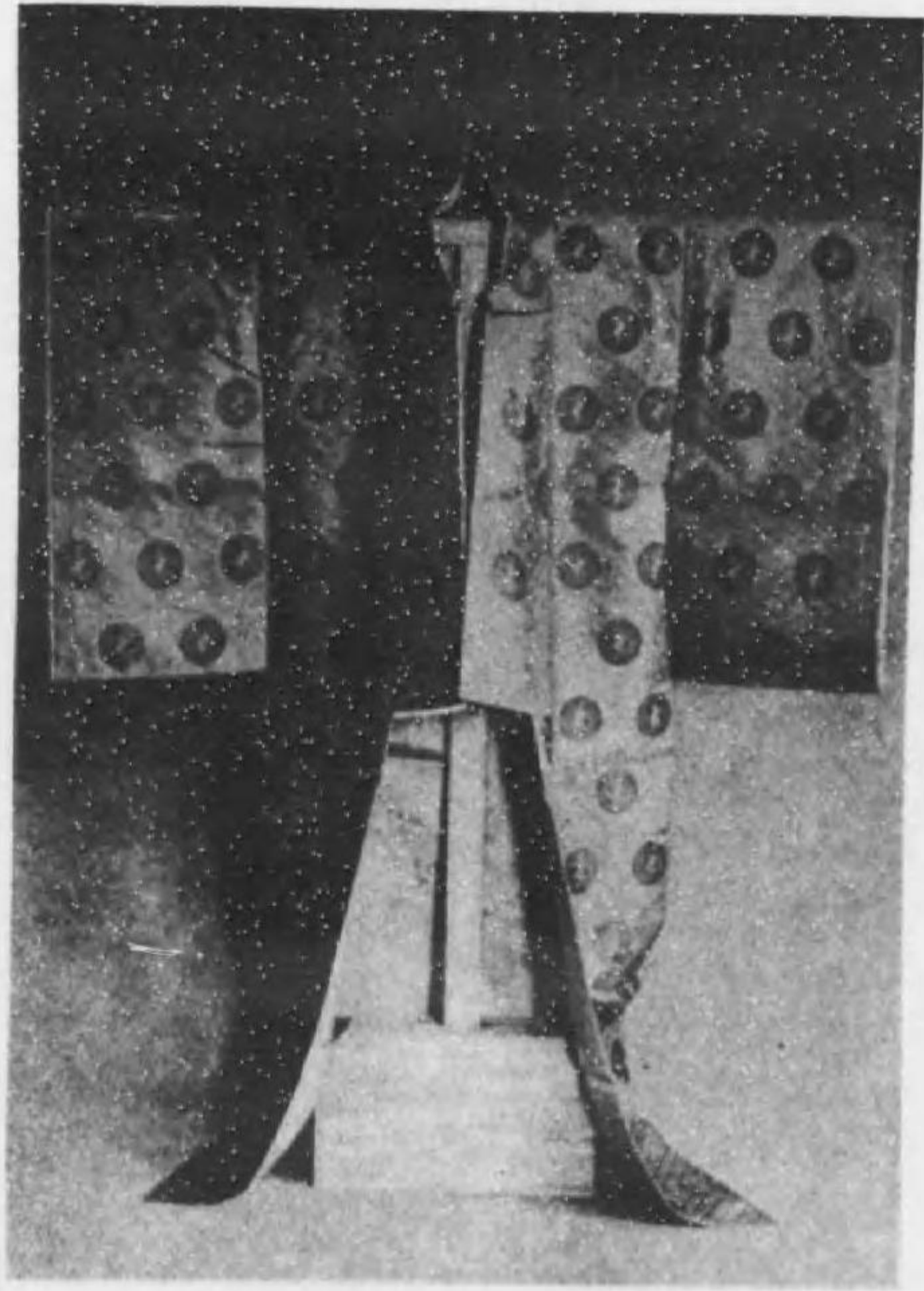
白菊  
咲にほふすそ野のきくは不二のねに  
あまりて落し雪かきを見る







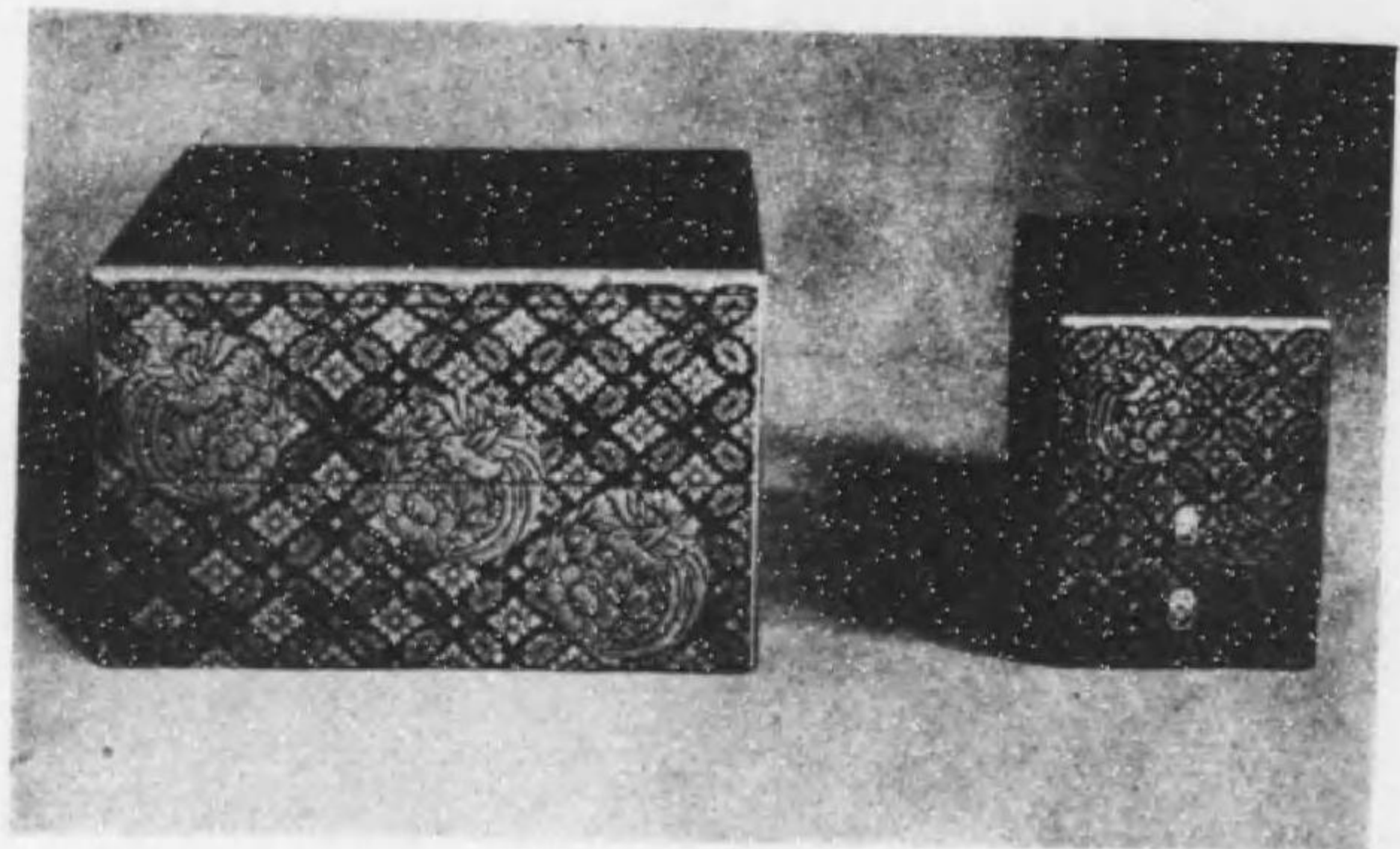
御  
檜  
扇



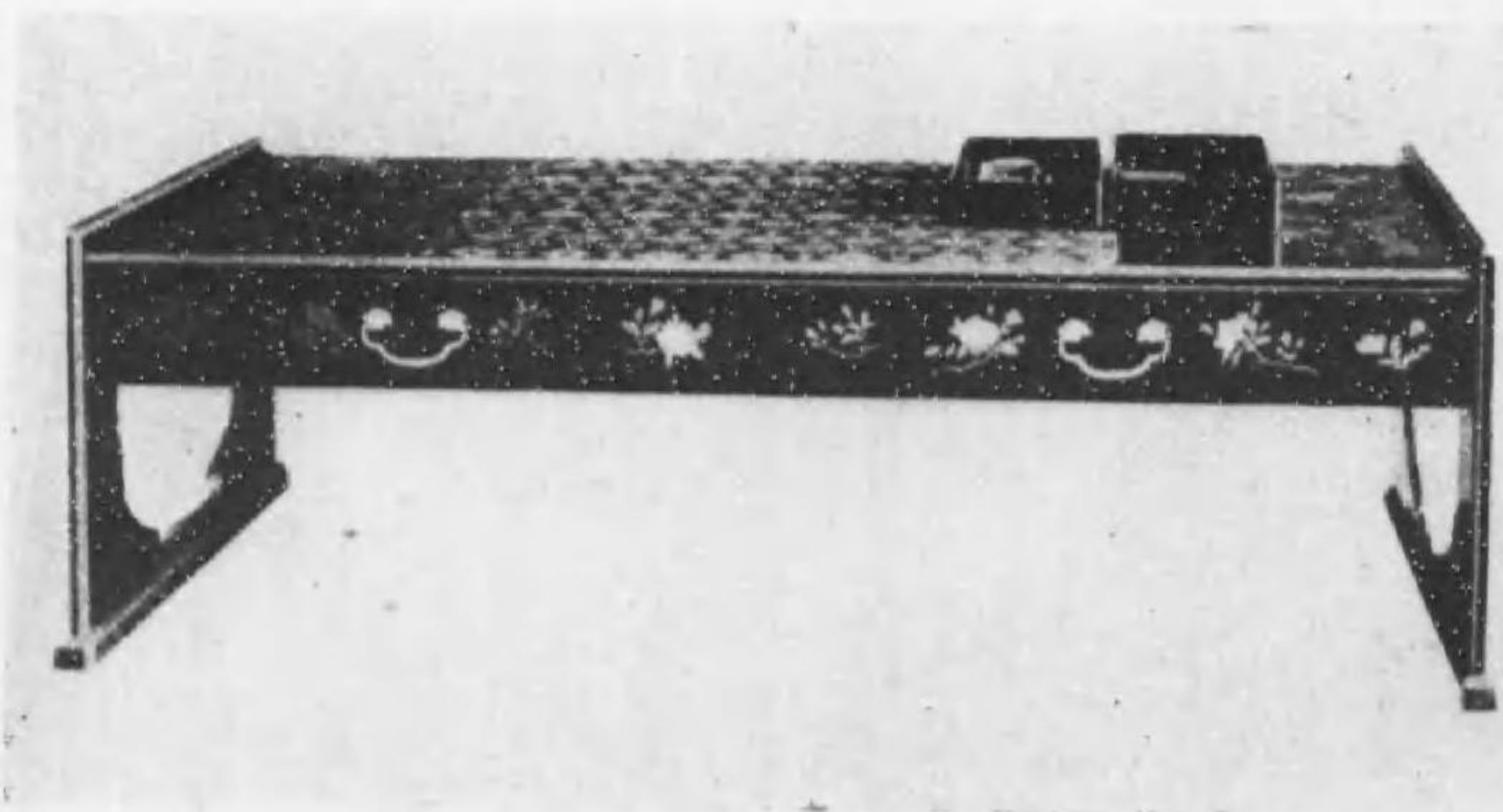
御  
表  
着

明治初年新年朝拜、天長節、等ニ御着用アラセラレタル  
モノナリ





小葵鷺瑞草丸蒔繪御硯箱  
 黒塗瑞草鷺小葵蒔繪御座文匣  
 聖上御座所へ成ラセラレタル  
 節御前ニテ御使用アラセラレ  
 タルモノナリ



黒塗櫻鳩春草蒔繪御机

石磐附御蒔繪硯箱  
 日常聖上御座所へ成ラセラレ  
 タル節御使用アラセラレタル  
 モノニシテ蓋裏ニ特ニ石磐ヲ  
 嵌入シアルハ御歌御詠進等備  
 忘用トシテ御用ノ爲特ニ斯ク  
 製作セシメラレ最モ御愛用ア  
 ラセラレタルモノナリ



# 大御心

小林一郎著

明治天皇並に昭憲皇太后の御物を拜して

皇祖以來御歷代を一貫したる大御心は、吾等臣民の共に感佩しまた服膺し奉るべきものであるが、明治天皇の御事蹟に至つては、吾等の近く記憶に存するものであるが故に、殊更に忘れ難く感ぜらるゝのである。吾等は天皇の御登遐を送り奉つて後既に十五年の歲月を経過したのであるが、今もなほ親しく聖恩に浴して居るが如くに思はれる。殊に陛下並に昭憲皇太后の御遺しになつた御物を拜見すると、如何なる聖賢に接して教へを受けるよりも更に深き感銘を覺ゆるのである。此の拙き小著の巻頭に多くの御物の寫眞を掲げたのは、たとへ余の説く所はいかに不束であつても、此



の御物を拜した人々の心に、大御心の忝さが必ず深く印せらるゝであらうと信じたからである。

二

此等の御物は皆明治神宮の寶物殿に藏せられてある。苟くも神宮へ参拜したものは必ず此の寶物殿へ参つて御物を拜観すべきである。此等の御物を拜観すると宛ら兩陛下に親しく謁して、聖容を仰ぎ奉りたる如き感がある。

先づ賢所等に於て御祭典の際に御使用になつた御冠御袍等を拜すると、吾が尊嚴無比なる國體の世界各國に異なる所以が殊に強く感ぜられる。外國の文物制度をいかに多く採り入れても、宮中に於ける御祭典等は昔ながらの御儀式であつて、天皇は昔ながらの衣冠を召して皇祖皇宗の靈を祭らせらるゝのである。世界の何れの國に於ても幾度か革命があり、帝王の血統は幾度か變つた。その中に在つて萬世一系の天皇を戴く唯一の國たる日本に生れた吾等は、眞に光榮ある國民と申さなければならぬ。次に御日常の御用具たる椅子卓子等を拜見すると、あまりに御質素なのに驚き入る

のである。何れも民間の中流以上の家庭には見られぬ程のものである。殊に樅製の御筆筒は陛下の親しく寸法等を御指圖になつて製作せしめられたものと申す事であるが殆んど吾等の學生時代に使用したものに異らぬ品である。陛下は御自ら簡易質素なる生活の範を御示しになつて然る後に戊申詔書の如き御訓戒を御下しになつたのである。吾等臣民たるもの如何にして之に違背することが出来やう。史上に赫々たる名を遺したる帝王の殆んど凡てが其の成功に驕つて奢侈の限りを盡して居る。獨り明治天皇に於かせられては内外共に仰ぎ奉る所の鴻業を成就せられながら、斯くも質素なる御生活を續けさせられ、以て吾等に篤き御訓戒を御下しになつたのである。誰か感激せずして居らるゝ者があらう。

又御座所に近く御飾りになつた置物の中に、二宮尊徳翁の青年時代苦學の狀を現はした像と、除隊兵士の像とがある。共に銅製の至て質素な物である。前者は陛下が如何に國本を固うすることに御心を注がせられたか、又如何に修養の大切なることを常

三



に御軫念になつたかを拜察するに足るべきものである。後者に至りては國民の勞苦を重んぜさせらるゝ、歡慮のほどが推し測られて何とも恐れ入つたことである。民を以て國の寶とするといふ御歴代の聖慮は遺憾なくこゝに現はれて居る。此國に生れ、此君を戴く吾等の幸福は世界の凡ての國民に對して永く誇るに足るものではないか。

又明治初年に侍講の人々より御進講した際に御用ゐになつた古事記、日本書記其他の書籍を拜見すると、陛下が帝王としての御修養に深くも意を用ゐさせられたことが明に分る。副島種臣伯が侍講を辭せんとした時に陛下は之を御慰留になるために極めて懇到なる御宸翰を御遣はしになつたが、その中に「畢生の力を學問に用ゐるつもりである」との思召が示させられてある。今此等の書籍を拜見すると、此事が思ひ合されて殊に貴い。陛下の如き英邁なる御天資の方にして且つ此の如くである。吾等の如き一日たりとも修養を怠つて濟むべきではない。

御色紙御短冊等に御染筆になつた御製には、有難い歡慮をことに明かに窺ふことが出来る。孔明と題する御製には「たつのふす岡の白雪ふみわけて草のいほりをとふ人やたれ」とある。彼の劉玄德が孔明をその草廬に三顧して、終に之を宰相としたる故事を詠ませられたのであるが、國家の大事を托すべき賢臣を求めたまふ御心が一首の上へ溢れて居る。また逢友述志と題する御製には「きのふけふ長き春日にわれと臣と昔のふみの物語りして」とある。古の聖王の事蹟を談論して時を移させらるゝは、即ち今の世を穩かに治めんとすの御心に出るものであらう。まことに感佩に堪へぬ事である。

また昭憲皇太后の御使用になつた品も數々ある。何れも優美なる御品ながら絶えて虚飾的のもの無く、國母としての御態度が窺はれてまことに貴い。御硯箱の蓋に石盤を嵌入したる如き、平生の御用意の程も察せられる。御色紙や御短冊の御歌の中に「八束穂のたりほの上のいたつきし人の力も見ゆる秋かな」とあるは、民の勞苦を御察しになつての御作で、何とも申しやうもなく有難く感ぜられる。また「咲きにはふ

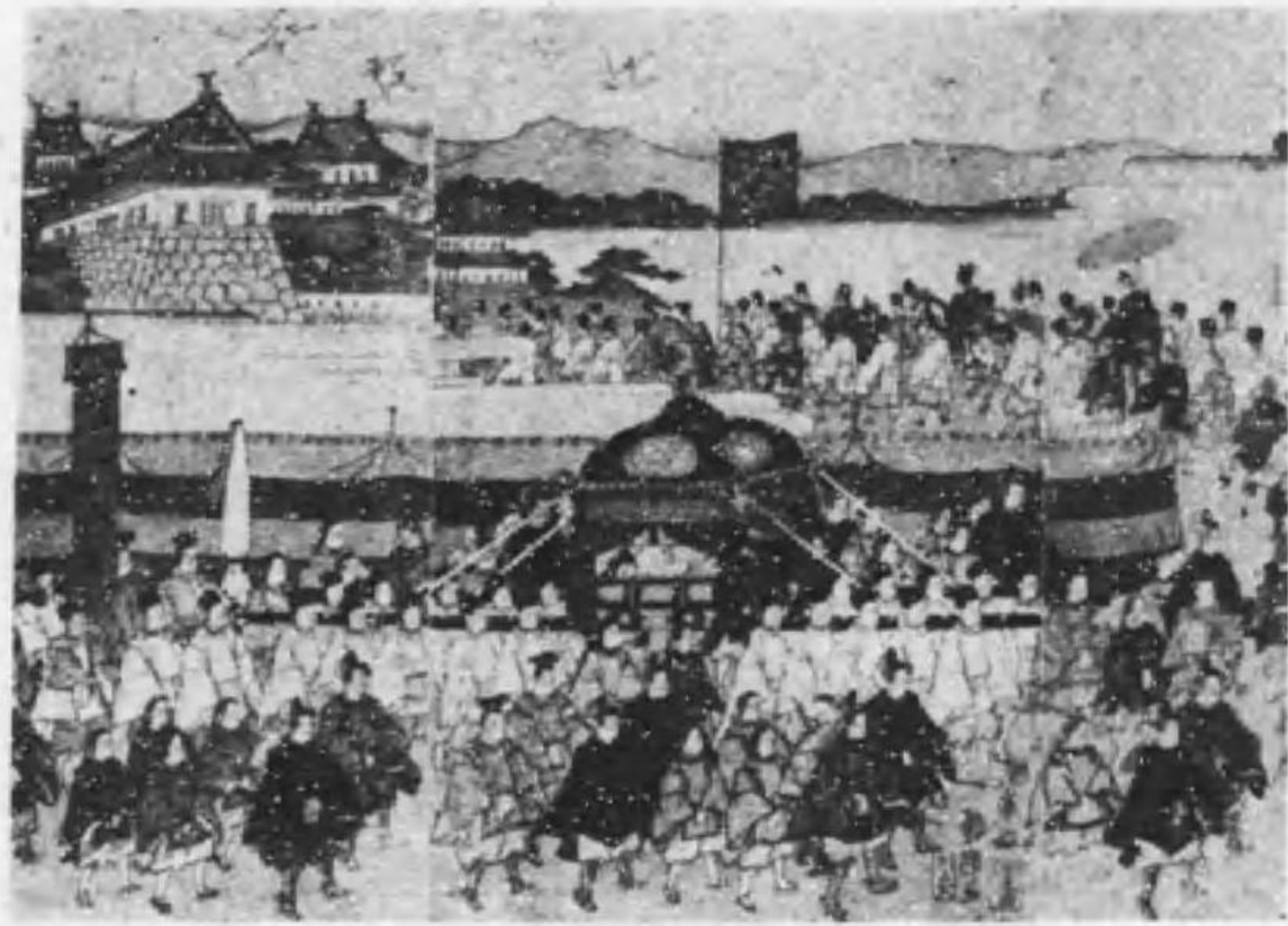


六  
すそ野の菊はふじの嶺にあまりて落ちし雪かとぞ見る」と申すは高高にして而も優雅  
真に絶唱と稱へ申すべきである。

以上は寶物殿へ參つての感想の一端を述べたに過ぎぬ。若し親しく此中に入つて、  
此等の多くの御物を拜するならば、幾百卷の書を読むよりも多くの活きたる教訓を心  
に刻むことが出来る。此の貴い御物の數々を寫して巻頭を莊嚴にし得たことは、著者  
の返す返すも光榮に感ずる所である。しかしながら此の巻頭に奉掲したるものは寶物  
殿に藏せらるゝ所の一部分に過ぎぬ。此によつて感銘を得たる人々は、是非とも自ら  
寶物殿へ參つて御物を拜し、その感銘を更に深くすべきである。

### 一 吾等は日本人である

日本の國に住むものは誰も「吾等は日本人である」といふことを知らなければなら  
ぬ。是が吾等の出發點である。世界の人口は凡そ十七億五千萬人程であるが、此中で



幸遷へ京東てめ始皇天治明

七  
白色人種が凡そ八億九千萬ばかりで、其餘は皆  
有色人種である。然るに此の八億餘の有色人種  
の中で、彼の白人と對抗して競争をすることの  
出来る國といへば、獨り吾が日本のみである。  
今まで數百年の間、彼等白色人種は此の世界を  
全く自分達の世界と考へて、勝手次第なことを  
やつて來た。其處へ吾が日本といふ國が新に興  
つて、世界の強國の一に加はり、彼等白色人種  
の國々と對抗することになつたのである。とこ  
ろで此の日本人といふものが果して白色人種の  
國々と競争して勝を占めることが出来るであら  
うか。是が世界の最大問題である。



今より七十年のむかし、日本が初めて世界各國と交際を開いた時は、たゞ東亞の片隅に在る小い島國に過ぎなかつた。此の小い島國が半世紀ばかりの間に世界の強國の一に列らうとは、何人も豫想せぬことであつた。それは彼等西洋人が豫想せぬばかりでなく、日本國民の殆んど全體が豫想せぬ所であつたのである。此際に當つて東西古今に多く比類を見難き名天子たる明治天皇が皇位を御嗣ぎになつたことは、日本國に取つて此上もない幸であつた。天皇は慶應三年に御歳十六にして皇位を嗣がせられ、幾もなく徳川幕府は大政を奉還し

日本國の天皇、各國の帝王及び其の臣人に告ぐ。嚮には將軍徳川慶喜政權を歸さんことを請ひ、制して之を允し、内外の政事は之を親裁す。

といふ堂々たる國書の發表されたるは、翌明治元年正月のことである。而して此年の三月には五箇條の御誓文が發表せられ、それと同時に懇篤なる御宸翰を下された。その中には、

近來宇内大に開け各國四方に相雄飛するの時に當り、獨り我邦のみ世界の形勢に疎く、舊習を固守し一新の效を計らず、朕徒らに九重中に安居し、一日の安きを偷み百年の憂を忘るゝときは、遂に各國の凌侮を受け、上は列聖を辱しめ奉り、下は億兆を苦しめん事を恐る。故に朕茲に百官諸侯と廣く相誓ひ、列祖の御偉業を繼述し一身の艱難辛苦を問はず、親ら四方を経營し汝億兆を安撫し、遂には萬里の波濤を开拓し、國威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置かん事を欲す。

といふが如き御言葉がある。御即位の始めに於て、此の如き洪大なる御抱負を御示しになつたことは、何とも以て恐れ入つた次第である。

上に此の如き聖明の天子を戴いて居たのみならず、多くの國士があつて御輔佐の任を盡したのである。今日の如くに學問も博く智慧も多い人は比較的少なかつたかも知れぬが、一身一家の爲を思はずに、國のため君のために如何なる困難をも冒さうといふ考への人が少くなかつた。此等の人は眞に國士と稱せらるべき者である。西郷南洲



の清訓の中に、

道を行ふものは固より困に逢ふものなれば、如何なる艱難の地に立つとも事の成

否、身の死生等は少しも關係すべからず。事

西には巧拙あり、物には出来る人出来る人あ

るより、自然心を動すことあれども、人は道

を行ふものなれば、道を踏むには巧拙もなく

出来ざる人もなし。故に只管道を行ひ道を樂

み、若し艱難に逢ふとも之を涉がんとならば

盛 隆 郷 西 郷 隆 盛



彌々道を行ひ道を樂むべし。予壯年より有ゆる艱難にかゝりし故、今は如何なる事に

會ふも介心せず、是れ予の幸福なり。

とあるが、此念をもつて終始する人が眞の國士である。斯ふいふ貴い人々が多く出て

維新の大事業を成し遂げたのである。

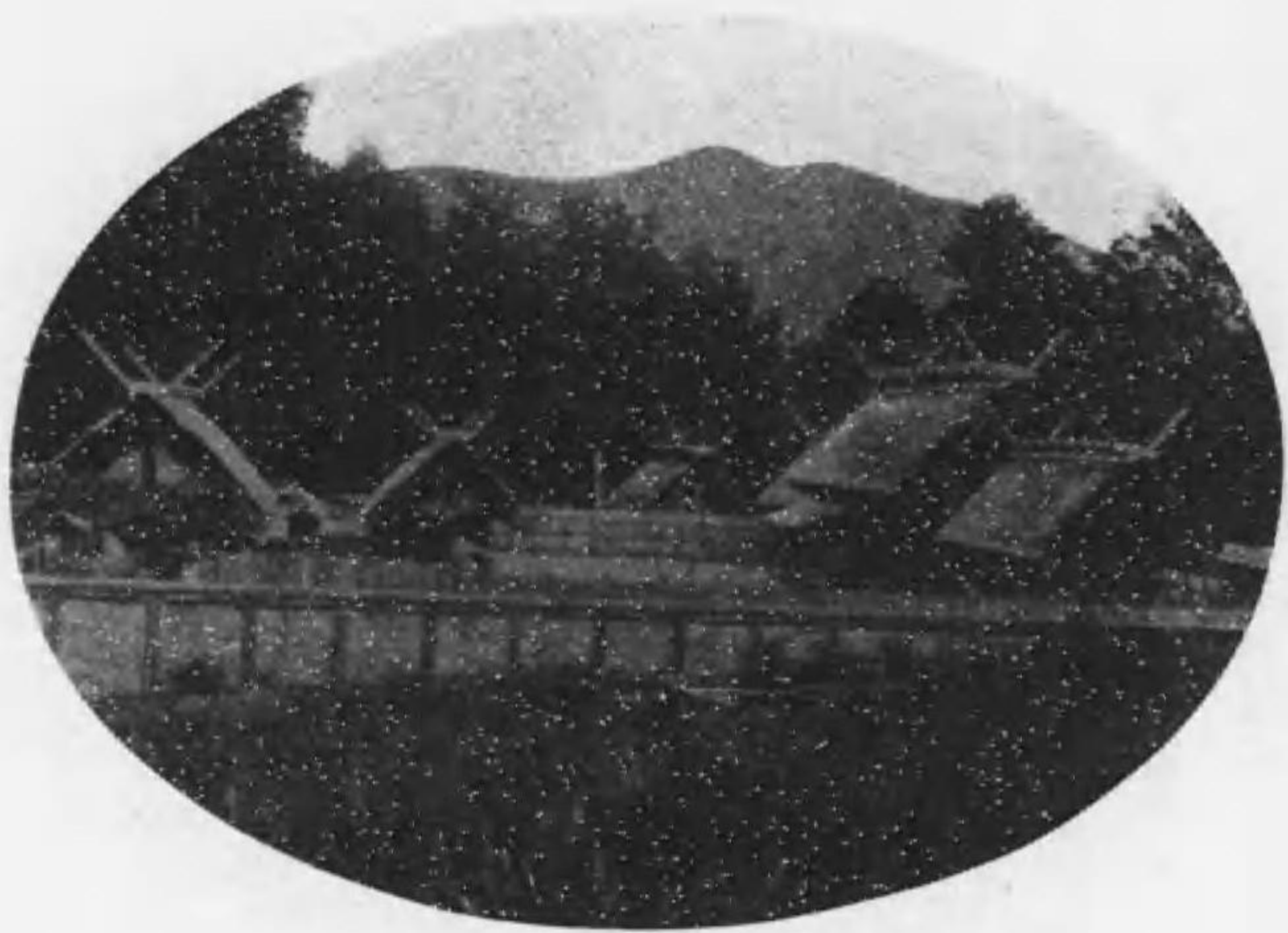
今から思へば實に危い時であつた。外からは世界の諸強國が皆交際を求めて來て居る。それに對する國策に誤りがあれば、彼等は武力を以て壓迫を加へて來るかも知れぬ。我には其の場合に處すべき準備は殆んど無い。徳川の幕府は全く國內の平和を保つべき實力がなくなつて、一般の人心は極度に不安を感じて居る。斯ういふ中を通り抜けて今日に至ることの出來たのは、上に聖明の天子あり、下に利害損得を忘れて國の爲に力を盡したる多くの國士のあつた爲である、吾等は此事を深く心に銘じて居なければならぬ、若し今日に於て數十年前に出たやうな國士が全く世に跡を絶ち、上下共に利害の打算にのみ專になつてしまふならば、國の前途はどうなるか分らぬのである。明治天皇の御製に、

打向ふたびにこゝろを磨けとや鏡は神のつくりそめけむ

とあるが、反省力なく自制心なき國民は決して永く榮え得べきもので無い。

更に注意しなければならぬ事がある。それは此の國家の大事に當つて、獨り男子が





伊勢大廟

一二  
國のために力を盡したのみならず、その  
蔭には多くの健氣なる婦人の居たこと  
ある。其頃は勿論今日の如くに女子教育  
が盛ではなかつた。「女子教育」などとい  
ふ特別の語さへなかつた。しかし一身の  
利害を全く忘れて、その家の爲めその夫  
の爲めに心を盡して居た貞烈なる婦人は  
有らゆる艱苦を忍んで彼の國士達の志  
を成さしめたもので、其の間接に國家に  
貢獻した所は頗る大なりといふべきであ  
る。例へば女流歌人の随一として知られ  
た野村望東尼の如き、殆んどその生涯を

國に捧げたものである。世の亂れたるさまを歎いては、

よひよひに曉つぐる鳥は鳴けど暗き世あくといふ人ぞなき  
と詠しながらも、必ず此の亂れたる世のさまを引換へて、泰平の世にあふ時のあるべ  
きを信じて、

久方の照る日の本のうき雲を吹きはらひませ伊勢の神風

と詠じ、多くの憂國の士の心が必ず世を動すに至るであらうと念じて、

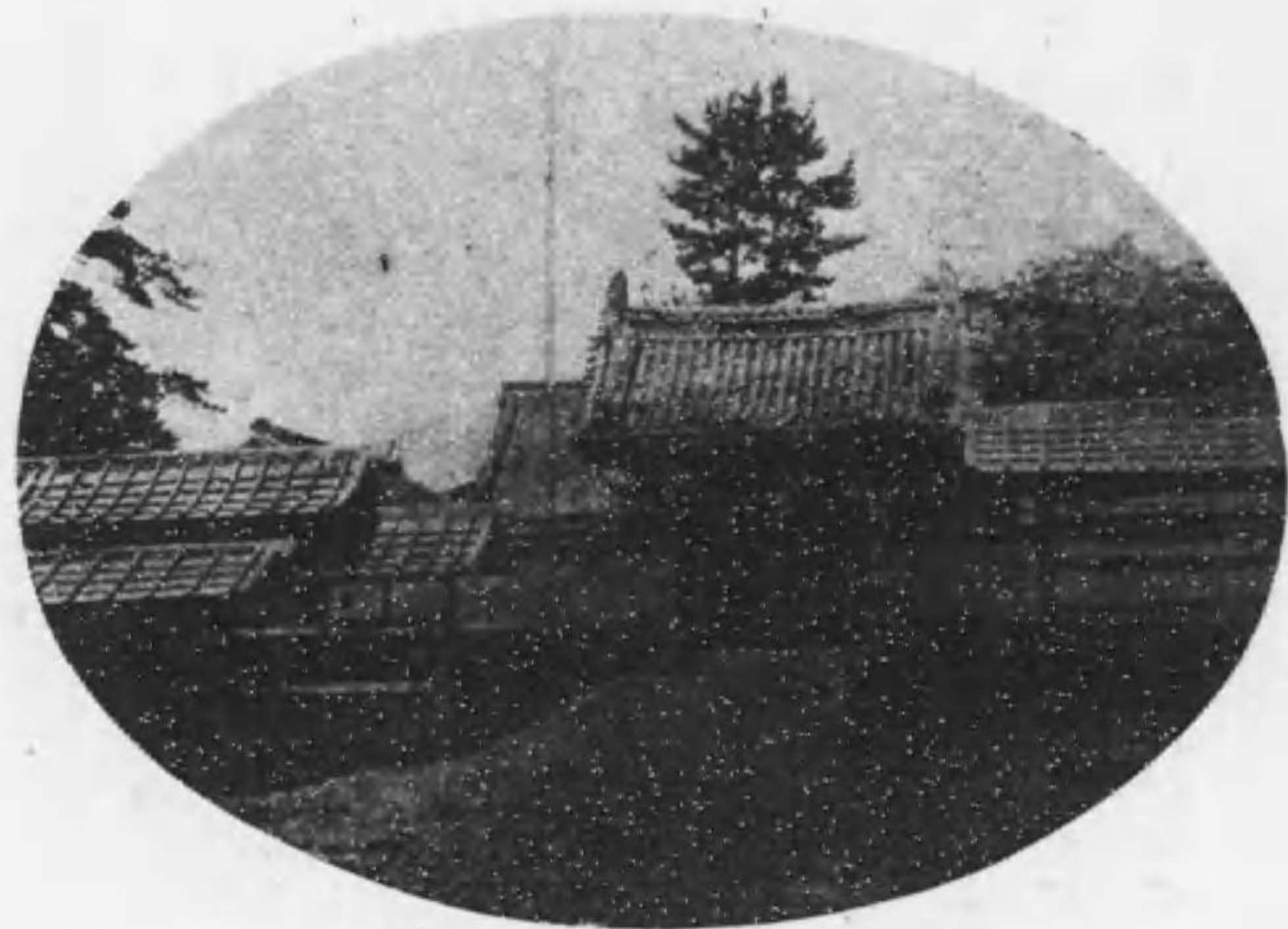
へだてぬる世のうき雲の上までも思ふ心のとほらざらめや

と詠じた。其子が遠い島へ流された時の歌には次のやうなものもある。

舟出して行きつと人のいひしより浪にたゞよふ親心かな

眞に一字一涙である。多くの健氣なる婦人が此に類する憂苦に堪へて、男子をして各  
その志す所に力を盡させたことをも、吾等は永く記憶しなければならぬのである。  
此の如き國士と烈婦との事蹟を擧ぐるならば實に數へ盡せぬほどであるが、其の美





水戸弘道館

しい事蹟の根柢となるものは「吾は日本といふ貴い國に生れた者である」といふ自信に外ならぬのである。獨り維新の際のみではない、吾國の上下三千年に亘る光輝ある歴史は、此の大なる信念の發露したるものである。憲法發布の際の勅語の中に、

此れ我が神聖なる祖宗の威徳と、並に臣民の忠實勇武にして國を愛し公に殉ひ、以て此の光輝ある國史の成跡を貽したるなり。

とあるのは實に此事である。西洋諸國の

學問技藝等には學ぶべきものが非常に多い。けれども「吾等は日本人である」といふ自覺なく徒に外國のものを學ぶならば、其の弊はいふに堪へぬに至るであらう。維新前後に於て西洋の學問や技藝を急速に模倣した際にも、國の前途を案する人々は深く此點に意を用ひて、充分に訓戒を與へて居る。例へば水戸の藩主徳川齋昭の作つた弘道館記には

我が國中の士民、夙夜に懈らずして斯館に出入し、神州の道を奉じ、西土の教を資り、忠孝二無く文武岐れず、學問事業その教を殊にせず、神を敬ひ儒を崇びて偏黨あること無く、衆思を集め群力を宣へ、以て國家無窮の恩に報せよ。

といつてある。此の弘道館は天保年中に建てたもので、學問と武藝とを教へた所である。その建物は今に保存されてあるが、藤田東湖をはじめ多くの學者は皆此館の爲に力を盡したものである。

是はたゞ一例である。此外にも外國の長所を學ぶと共に、吾が國有の美風を忘れて



はならぬといふことを力説した人達は少くない。佐久間象山の如きは西洋文明を學ぶことに餘り熱心であつた爲に、多くの人の誤解を受けたのであるが、「西洋の學問技藝を學んで、吾が國體を護らなければならぬ」といふのが其の生涯の主張であつたのである。されば象山の作にかゝる『櫻賦』には櫻花に寄せてよく其の志が述べてある。今日以後に於ても西洋諸國に學ぶべき事は夥しくあるであらうが、殊に維新前後に在つては學問にせよ技藝にせよ、彼と我とでは非常な差があつたのであるから、何から何まで眞似をしなければならぬといふ主張の起つたのも不思議ではない。又一方には極めて固陋な考への人もあつて『斯んな恐ろしい奴等と交際をこてゐると、今に國を取られてしまふ。早く追ひ拂つてしまへ』と主張した。彼等を學べといふのと、彼等を追ひ拂へといふのは正反對の主張であるが、彼等を恐るべき者と考へ、我國は到底彼等に及ばぬものと思つた點は同一である。斯ういふ中に於て眞の活眼の人は、彼等の學ぶべき所は之を學び、我が固有の美點は極力保存しなければならぬといふ大

方針を立てたのである。明治天皇の御製にも、



孝 明 天 皇

わが園に茂りあひけり外國の草木の苗もおほし立つれば  
 とある。苗は外國から持つて來るもよいが、之を生育せしむる園は吾が日本の國であることを忘れてはならぬ。  
 學ぶべきを學ぶのとむやみに屈從するのと  
 はちがふ。徒に自ら



尊大にして他の長所を知らぬものは終に衰へる。徒に自ら輕んじて他を崇拜するのみに專なるものは終に亡ぶる。維新前の國家多事の際に當り、孝明天皇は

戈とりてまもれ宮人九重の御はしのさくら風そよぐなり

と御詠みになつた。事ある時に戈とりて九重を護るだけの決心があつて平和の交際を結ぶならば、眞の平和が得られるであらう。徒に屈從して一時の平和を求むるならば、唯だ外の侮りを受くべきのみである。前にも引いた南洲の遺訓の中に、

廣く各國の制度を探り開明に進まんと欲せば、先づ我國の本體を立て、風教を張り而して後徐かに彼の長所を斟酌すべし。然らずして猥りに彼に倣はゞ、國體は衰頽し風教は萎靡して、匡救すへからざるに至るべし。

とあるが、今日の吾等には最も適切なる訓戒といふべきである。

獨り南洲のみならず、其頃には此の如き見識をもつた人々が少くなかつた。其等の人々が一身の私をすて、國家の事に當り、明治天皇を輔佐申して維新の大業を成就

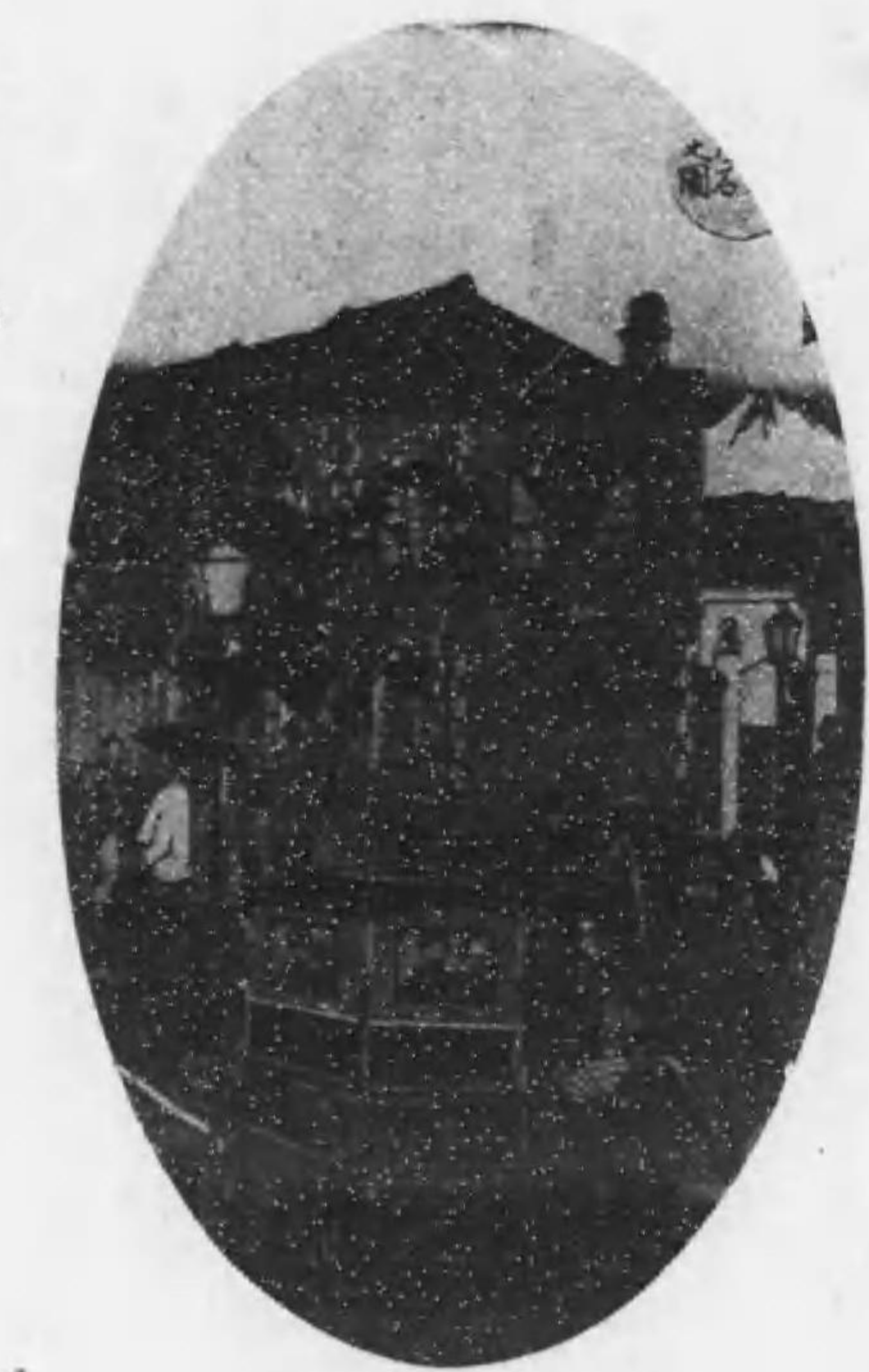
し、世界各國との交際をも開いたのである。勿論西洋諸國からすれば世界の進運に後れたる一つの島國に過ぎぬと思はれたのであらうが、我には二千數百年來養ひ來つたる國民性がある。東洋に於ける他の國々のやうに唯だ西洋諸國の勢力の下に屈伏してしまふ國ではない。慶應三年七月に薩州と土州の兩藩の間に取り交した盟約書の第一條にも、

國體を協正し萬世萬國に亘りて耻ぢざる是第一義。

とある、以て當時に於ける志士の抱負を知るべきではないか。但し如何に貴い國民性があつても、各自の努力が緩む時には、自然他の侮りを受けるやうな結果になるに極つて居る。前に挙げたる御宸翰の内に「一身の艱難辛苦を問はず」と仰せられ、天皇が躬を以て衆を御率ゐになつて、國民が共に艱苦を忍んで世界各國と對立すべき實力を養はうといふ決心を御促しになつたのは實に之が爲である。諸外國の長所を學ぶと共に、諸外國の侮りを受けず、彼等と對峙すべき實力を養ふといふことは容易の業で



はない。殊に彼等は數百年來相對立して競争を續けて來たのである。我國は久しく世界の國々と交際せずして、亞細亞の片隅に引込んで居たのである。



明治初年の風俗圖

それが急に彼等の中へ出て、四方八方に應接しなければならぬ事になつたのであるから、責任ある地位に立つ人々の苦心は非常なもの

であつたに違ひない。

此際に於ける明治天皇の御苦心のほどは、屢々下されたる詔書等によつて拜察する

と、實に感涙に咽ばざるを得ぬ次第である。明治元年十月の詔書には

汝百官有志同心戮力し以て鴻業を翼けよ。凡そ事の得失可否は宜しく正義直諫して朕が心を啓沃すべし。

と仰せられ、同十二月の詔書には、

朕亦將に自今親ら勵精治を圖り、教化を國內に布き、徳威を海外に輝さんことを欲す。汝百官將士其れ之を體せよ。

と仰せられ、更に明治二年正月 政 始の勅書に於ては、

惟ふに天道常なし一治一亂、内安ければ必ず外の患あり、豈に戒慎せざるべけんや、と戒められてある。同年四月の詔書には

神州安危の決今日に在り。

とて國民の決心を促され、同年五月の詔書に至つては、官吏公選の法を定めて祖宗の靈に告げられたことを御述べになつて、



神靈降鑑、過なからんことを期す。汝衆を斯意を奉せよ。

といふ如き御言葉さへある。同三年七月の詔書に於ては、なほ萬國と對峙すべき力の足らざるを述べさせられて、

何を以て億兆を保安し、萬國と對峙するを得んや。朕深く之を慨す。

と仰せられてある。同八年四月の詔書には、

汝衆庶或は舊に泥み故に慣るゝこと莫く、又或は進むに軽く爲すに急なること莫く、其れ能く朕が旨を體して翼賛する所あれ。

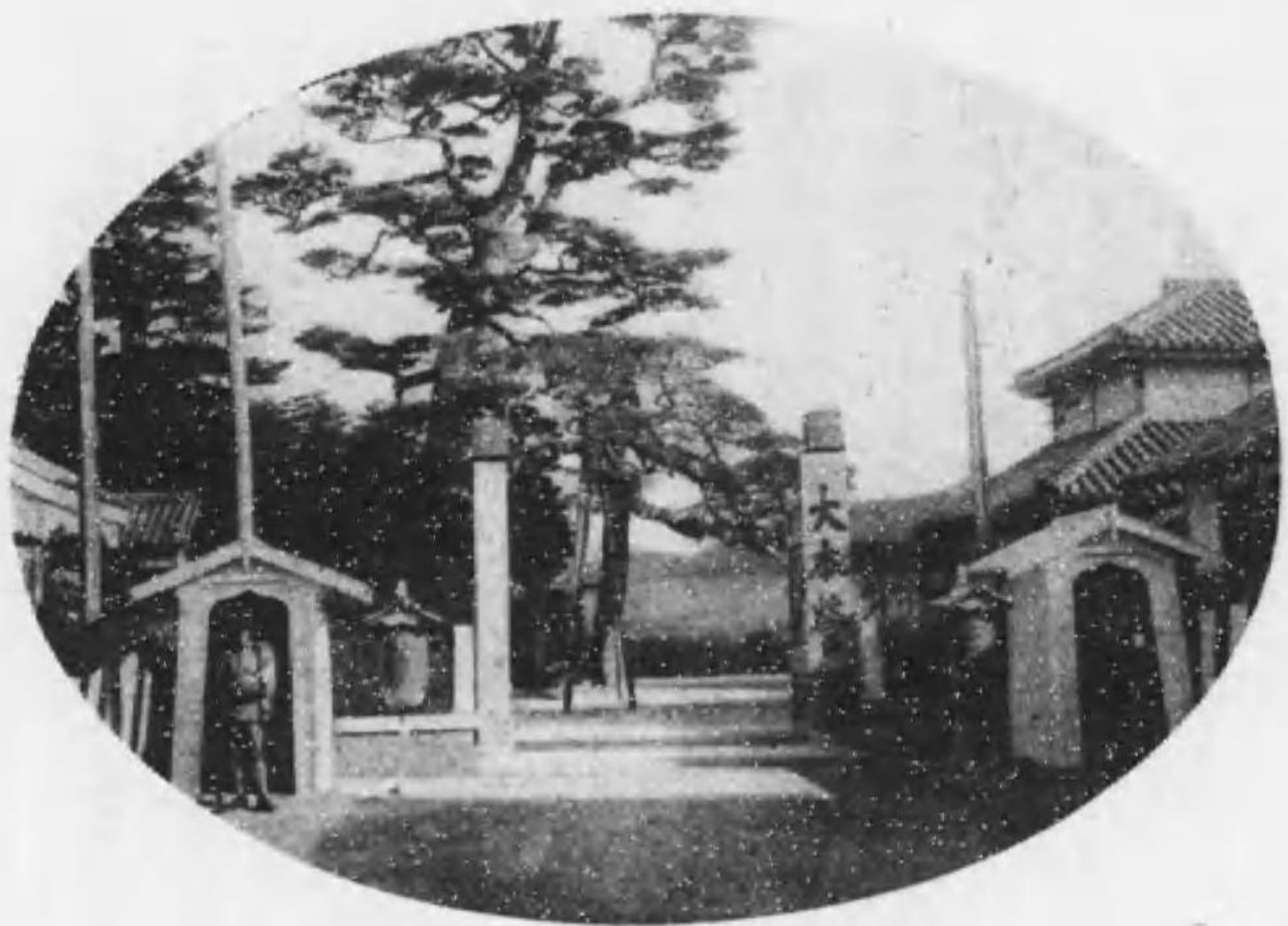
と御諭しになつて居る。

此外にもなほ夥しくあるが、此等一二の例によつても、御精神の在る所は明であらう。斯る洪大なる御聖徳と、之を賛け奉つた吾等の多くの先輩の苦心努力によつて、吾が日本は最も急速なる發達を遂げ、殊に日露戦争によつて吾が實力を示して後は、世界の強國の一に數へらるゝに至つたのである。ツイ三十餘年前までは、歐米諸

國でも教育のない人は「日本といふのは支那の一部か」など、いつたさうである。然るに今日に於ては世界の何れの地に於ても、日本の名を知らぬ者は無くなつた。此の驚くべき發展を評して「これは一の奇蹟である」といつた外國人もあつた。しかし奇蹟でも何でも無い。是は明治天皇の御聖徳の然らしむるものである。又貴い吾が國民性の然らしむるものである。又一には吾等の先輩の苦心努力の然らしむるものである。吾等は此事を忘れてはならぬ。又果して吾等にその後を承けて國威を失墜せぬやうに力を盡すべき覺悟ありや否やを反省しなければならぬのである。

明治天皇は御歳五十を過ぎさせらるゝ頃まで非常に御壯健に拜せられた。御髪も御髯も眞黒で、御歳に比べて非常に御若く見上げられた。行幸の御途次などで、御機嫌の麗はしいさまを仰ぎ見た吾等は、いつも我國の前途のために非常に心強く感じたことである。然るに日露戦争以後に於ては著しく御老けになつた。余は明治四十年七月に、東京帝國大學の卒業式に參列して、僅か三四間の御近くで陛下を仰ぎ見た時、あ





廣島大本營

二四  
まりに御年を召したのに驚き入つてしまつた。御髪にも白毛が大分交り、御髯の末の方は真白であつた。余は「此四五年の間に陛下は二十ばかりも御年を召した」と思つて、一種の寂しい感じに襲はれたが、「此の四五年の間に此國の運命を決すべき日露戦争があつた」といふことに思ひ當つて、何とも言ひやうのない感慨に打たれた。嗚呼あの戦争が陛下の御壽命を縮めたのであつた。陛下は御一身に此國の運命を荷はせられて、晝夜を分かたず御心勞になつたのである。陛下は吾等

同胞の爲に、斯く俄かに御年を召すほどの御心勞を遊ばされたのである。然るに吾等國民の多數の者はどうであつたか。戦へば必ず勝つものと思ひ込んで、其の局に當る人々の苦心を殆んど察せずに「ウカ／＼として過したのではないか。思へば勿體ないことである。」

唐の詩人杜子美は詩を當時の顯要の地位に在る人に寄せて「獨り至尊をして社稷を憂へしむ、諸君何を以てか昇平に答へん」といつたが、此句はその儘に吾が日本國民に適切である。而も明治天皇は吾等國民が必ず大に覺醒して、陛下の御心を身に體し、國事に盡瘁すべき時の來るべきことを信じたまひ、日清、日露の兩戰役の際に「汝有衆の忠實勇武なるに倚賴し」と仰せられた。更に遡つて明治二十二年、憲法發布の時の勅語を拜すると

朕我が臣民は即ち祖宗の忠良なる臣民の子孫なるを回想し、其の朕が意を奉體し朕が事を獎勵し、相與に和衷協同し益々我が帝國の光榮を中外に宣揚し、祖宗の遺業





極 原 神 宮

を永久に鞏固ならしむるの希望を同くし  
此の負擔を分つに堪ふことを疑はざる  
なり。

と仰せられてある。是れ實に吾等に對し  
て「汝等は日本國民たる自覺を有する者  
たることを疑はぬぞ」との仰せではな  
いか。吾等は果して此の有難い聖旨に副  
ひ奉るだけの覺悟をもつて居るであらう  
か各自に反省して見なければなるまい。

## 二、若き日本國

日本國民たる者は「萬事は是からであ

る」といふ心をもつて居なければならぬ。老若男女共に吾が日本國の前途に大なる希  
望をもち、心はいつも若くなければならぬ。二千數百年の歴史はまことに久しいもの  
であるが、此國は實際に於て若い國である。天照大神が天孫瓊々杵尊を此國に下した  
まへる時の神勅に、

是れ吾が子孫の王たる可き地なり。宜しく爾皇孫就て治むべし。行け。寶祚の隆な  
ること當に天壤と與に窮り無かるべし

とあるは、誰もよく知る所である。天地と共に窮り無かるべき國である以上は二千年  
や三千年は物の數でない。日本國民たるものは、過去の歴史に就て誇るのみならず、  
いつも將來に對して大なる希望をもつて居なければならぬのである。

人皇の世の第一代たる神武天皇は、眞に若い氣分をもつて居させられたのである。  
天皇が日向國を發して東に向はせられたのは御歳四十五の時、爾來六年を経て大和  
を平定したまひ、即位の式を橿原宮に擧げさせられたのは御歳五十二の時である。然



るに此の標原の都を御造營になる時の詔には、

夫れ大人の制を立つる、義必ず時に隨ふ。苟くも民に利あらば何ぞ聖造を妨げん。とあつて、眞に國民のために利のある事ならば、決して舊習に泥むことなく何處までも改革刷新を行はうといふ御決心を示して居らるゝのである。明治天皇の御製には、よきをとりあしきをすてゝ外國にをとらぬ國となすよしもかな

とあり、又明治元年三月の五箇條御誓文の一條には、

智識を世界に求め大に皇基を振起すべし。

とあるが、是れ御歴代を通じて一貫したる御精神であるに違ひない。又神武天皇が日向を發せらるゝ際の詔に、大和の地に就て

必ず當に天業を恢弘し天下に光宅するに足るべし。蓋し六合の中心か。

とあり、更に標原の都を御造營になる際の詔の中には、

六合を兼て以て都を開き、八紘を掩ひて而して宇と爲さんこと亦た可ならずや。

とある、即ち吾が日本國が世界の中心となり、世界の國々を指導して行くことを理想としたまへるものである。實に洪大無邊なる思召と申すべきではないか。明治天皇の御製に、

いにしへの書見るたびに思ふかなおのが治むる國はいかにと

と申すのがある、『いにしへの書』といふのは如何様にも解せらるゝのであるが、右の詔と併せ考へて見ると、明治天皇の御理想もやゝ拜察し得らるゝやうに思はれるのである。

何れの國民と雖も、其國が世界の凡ての國に立優れるものになることを熱望せぬものはない。又何れの帝王も、世界第一の聖帝として仰がるゝことを望まぬ者はない。しかし他の國に優れるといふ中にも、種々なる差異があることを知らなければならぬ。昔のアレキサンダアとか近世のナポレオンとかいふ英雄は、世界の凡ての國を征服して自ら永く榮華を極むることを理想とした。又その國民も同じ理想を懷いて奮闘





富士山の景

三〇  
したのである。此の如き理想が若し實現さるゝならば、其國の人は非常に得意を極むるであらうが、征服せられたる多くの國の人民は永く困苦と屈辱との下にうめいて居なければならぬ。然るに神武天皇の詔の中に現はれたる理想は其と全く異つたるものである。「天下に光宅するといひ、「六合の中心となる」といふは、他の國を壓迫して我のみ獨り榮えんと望むのではない。吾が日本國を中心として世界の凡ての國が共に榮え、共に幸福を享け得るやうになることを理想とするの

である。日本國民たるものは永久に之を以て其の理想として進まなければならぬのである。余は近世の世界の歴史を通覽し、各國が何れも他を排して自國の勢力を擴張せんことにのみ腐心し、口には正義人道を唱へながら實際には修羅道の争ひを續けて居る有様を見て、今更ながらに吾が皇祖の御理想の洪大なのに恐れ入らざるを得ぬのである。飯田年平の歌に

群山のあしたの狭霧ふかければさやかに見ゆる富士の白雪

といふのがある。多くの山々が霧に包まれて、まだほの暗く見ゆる時に、高く天際に聳ゆる富士の白雪は殊更に美しく見らるゝのである。日本國民たるものは斯る貴い國民であることを自覺しなければならぬ。

斯く吾が國民の理想は最も高遠なるものであるが、之を實現するに就ては國の實力が充實して居なければならぬ。譬へば水に溺れんとする者を救はうといふのは、まことに健氣な心であるが、自身に水泳の心得が無ければ溺れんとする者を救ひ得ぬのみ



ならず、自身も共に溺るゝより外はない。世界各国を指導しやうとする前に、先づ各  
國に對立して耻しからぬだけの實力を具へて居なければならぬ。今吾が國はそれ丈の



大山元帥

るから、世界の國々は吾が陸海軍にそれ程の實力があらうとは思つて居なかつた。そ  
の日本の軍隊が支那に打克つたのみならず、露西亞にも美事に打克つたのである。露

實力を具へて居るかといふに  
殘念ながらまだ其處までには  
至らぬのである。日清、日露  
の兩戰役によつて吾等は世界  
の國々を驚かすことが出來た  
日本の陸軍は多く獨逸を日本  
とし、日本の海軍は多く英國  
を日本として出來たものであ

西亞は流石のナポレオンさへ持て餘した國だといふので、凡ての國から恐れ憚られて  
居た。その大敵に對して日本が勝利を得やうとは誰も想像して居なかつた。それが立  
派な勝利を得たのであるから、何れの國の人も驚異の眼を腫つた筈である。日本の軍  
隊は獨逸や英國を師としたには違ひないが、それは形の上的ことで、其の軍隊の中を  
一貫する所の精神は二千數百年來養つて居たものである。是は外國人の窺ひ知るこ  
の出來ぬものであるから、彼等が唯だ不思議と思つたのも更に無理ではない。

既に世界の強國として知られて居た露西亞を美事に打破つたのであるから、日本は  
當然強國の列に入ることが出來たわけであるが、斯うなると今迄とちがひ、日本國民  
の一舉一動が世界の注意を惹くことになる。世界の國々の人は皆我に對して「日本の  
軍事上の實力は確かに拜見した。まことに美事なものである。軍事以外に於て日本の  
實力はどうであるか。定のし立派なものであらう。サア拜見しやうか」といふ。東洋  
に於て日本が唯一の強國であると極つた以上は、日本國民たる者はどうしても世界の



諸強國を向うへまはして、競争しなければならぬ立場となつたのである。西洋の強國はいづれも數百年の間此の東洋で盛に活動してゐる。各自にその國の勢力を東洋の地方に扶植するためには、随分思ひ切つた悪辣なことをやつたものである。それでも東洋諸國には彼等に對抗すべき力のある者は一つも無かつたので、彼等は何時迄も勝手な事が出来ると思つて居た。ところが意外千萬にも日本といふ國が頭を上げて来て、トウ／＼強國の仲間入りをしてしまつたのである。今までは日本と彼等との關係が異つて来た。今までの日本は彼等から後進の國として視られ、弟子として視られ、東の片隅の小國として視られて居たが、今度は競争の相手として視らるゝに至つたのである。日本國民たるものは茲に於て大に奮はなければならぬのである。

日本の得たる強國の地位は、戦争によつて得たものである。此の地位を守るのには、戦争以外の事に於ても他の諸強國に對立し得なければならぬのである。忠勇なる陸海軍人は生命を擲つて國のために戦ひ此國の地位を高めてくれた。若し日本國民全體

の勢力が足らぬために、諸強國との競争に打負けて、一たび得たる地位を失ふやうな事があつたなら、吾等は如何にして其等忠勇なる人々の靈を慰めることが出来やう。



ン オ レ ホ ナ

歴史を纏いて見ると、古來の英雄は戦勝を得て後に、社會の制度を整へ、有用なる事業を起し、以て國力の充實を謀つて居る。漢の高祖は秦を亡ぼし楚を破つて天下を一統し自ら誇つて『馬上にして天下を得たり』といつたが、その

臣下の陸賈といふ者が  
陛下馬上を以て之を得るも寧ぞ馬上を以て之を治むべけんや。文武並び用ゆるは長



久の術なり。

と説いたのに感心して、之より心を百般の事に注ぐやうになつた。又ナポレオンの如きは大に學問を奨励し、法典の完備に努めた。例へば今日吾が國でも行はるゝに至つたメートル法の如きもナポレオンの保護奨励によつて出来上つたものである。彼が曾て

ペンの力は劔よりも偉大なり。

といつて歎息したといふ逸話もある。

今や世界の強國の間に於ける競争は益々劇烈になつて居る。其の中へ日本が乗り出したのである。競争は有らゆる方面に亘つて行はれて居る。學問に於て技藝に於て、政治上外交上に於て、商工業に於て皆烈しい競争が行はれて居る。中にも經濟上の競争は最も劇烈である。世界大戦争の後に於て、佛國が獨逸のルール地方を監視するために兵を送つたのは、表面上種々なる理由を並べて居るが、實は獨逸の經濟力の

回復を恐れて、其の喉首ともいふべきルール地方を抑へ、彼の復興力を阻止する事が重なる目的であつたのである。此の一事によつても現代の趨勢はほゞ察し得らるゝであらう。殊に注意すべきは彼等歐米人の東洋に於ける發展である。彼は大正三年より五年間に亘つて、大戦争をやつて居た爲に、東洋の方面からは暫く手を引いて居たのであるが、其の大戦が終熄してから既に十年ばかりも経たので、何れの國も著しく國力を回復して來た。殊に米國の如きは世界第一の富強なる國として自ら許す程である。斯く彼等の國力が盛になつて來ると共に、彼等は再び東洋方面に向つて其の力を延して來るにちがひない。茲に於てか吾が日本國民の責任は殊に重きを加ふるのである。

吾が日本國は建國以來非常に久しい歲月を経たる國である。しかし世界の諸強國を相手にして競争をするといふやうな經驗は、今までに曾て無かつた。足利時代の頃までは支那と朝鮮とを相手にしたのみである。足利時代の末に至つて西洋諸國との交渉





地中海の圖

三八

が開かれたけれども、それはあまり永く  
 績かず、徳川時代の初期に於て暫く交渉  
 は絶えた。徳川時代の末から又西洋諸國  
 と接觸するやうになつたが、眞に彼等と  
 對立して競争するやうになるまでには四  
 五十年を費した。之を彼等西洋諸國が相  
 對立して數百年の競争を續けて來たのに  
 比べて見ると、同日にして語ることとは出  
 來ぬ。今日に於て吾等は『萬事は是から  
 である』と覺悟しなければならぬ。日本  
 國民が果して優秀なる國民であるか、但  
 しは彼等白人の國々に對抗の出來ぬやう

な國民であるか。之を決定するものは今後に於ける吾等の働き方一つである。吾等は  
 軍事上に於ては世界の何れの國にも負けぬといふ確信をもつて居る。それは日清、日  
 露の兩戰役に於て證すべきのみならず、世界大戦争に際してもよく現はれて居る。英  
 獨佛等の諸國とは異つて、吾が國は極めて少く軍隊を派遣したに過ぎぬけれども、地  
 中海なり乃至は青島なりに於ける吾が海陸軍の活動は實に美事なものであつて、各國  
 共に日本軍の紀律の嚴肅なること、又其の動作の敏活にして建實なることに就ては、  
 大なる尊敬の意を表して居るのである。そこで問題は軍事以外の點である。  
 日本は軍事以外に於て世界の他の國に立優ることは出來ぬであらうか。余は決して  
 そんな事はないと確信するものである。前にもいふ通り、日本の海軍は英國を手本と  
 し、日本の陸軍は獨逸を手本として出來たものであるが、日本人固有の精神を以て之  
 を活用したるが故に、彼等に勝るとも劣らぬだけの成績を擧げることが出來たのであ  
 る。軍事以外の事に於ても、吾等の努力次第で、彼等を凌駕することの出來ぬといふ



答はない。今までは萬事西洋諸國の模倣をして來たのであるから、何をしても彼等には及ばぬやうに思はれて居るが、日本人はそんなに無氣力な國民ではない筈である。



奈良朝時時代の俗風

れを立派に日本化してしまつた。さうして支那や朝鮮に見られぬやうな日本獨得のもの

四〇

他の國に習ふのは必しも耻かしい事はない。他の國に習つても、やがて他の國を凌駕するほどのものが出來れば宜いのである。吾等の祖先は支那や朝鮮から多くの事を學んで、久しい歲月を経る間にそ

のを作り出した。例へば奈良朝あたりの風俗を見ると支那の衣冠の制を其儘に模倣したものである。然るに平安朝になると全く日本獨得の風が出來て、支那などには決して見られぬ、最も優雅なる衣冠東帶の姿が出來上つて居る。又文字なども最初は支那の學んだのであるが、久しい間に日本獨得の假字といふものが出來た



紀貫之の筆

ものは純乎たる和様であつて、支那の書家などの學ぶことの出來ぬものである。其外學藝でも政治上の諸制度でも、乃至は宗教の如きでも日本には日本獨得のもの

四一



四二  
が出来上つて居る。此國に入つて久しい歳月を経る間に凡てのものが日本化されるのである。

此の如くに古い祖先を吾等ももつて居る。その子孫たる吾等が何時迄も外國の模倣にのみ甘んじて居てはならぬ。今迄の六五十年が西洋文明の模倣に費されたのは己むを得ぬことであるが、今後には各方面の人々が皆一生懸命になつて、今迄輸入したものを盡く日本化し、日本獨得のものを作り上げることに努力しなければならぬさうして此の日本獨得のものを提げて世界各國と競争して行かうといふ覺悟をもたなければならぬ。三千年に近い間、養ひ來つたる吾等日本人の貴い國民性を世界に示すのは今後に在る。萬事は是からである。日本國民は共に『若い國』であると思はなければならぬ。國民の全體が青年の氣分を以て奮ひ起たなければならぬのである。

此時に當つて吾等が上に若き攝政宮を戴いて居ることは、まことに偶然ではない。佛國の諺に『過去を語るものは地を眺め將來を思ふものは天を仰ぐ』といふのが



攝政宮御肖像

ある。吾等は將來に大なる希望をかけて、如何なる艱難をも突破して行かうといふ決心をもたなければならぬ。近來天皇陛下が御病氣勝ちに在らせらるゝことは、日本國民の深き憂ひとも申すべきである

が、皇太子殿下が御壯齡を以て攝政の大任に當らせらるゝ以上は、國の前途は眞に洋々たる希望に充ちたものと考ふべきである。抑も攝政の事は皇室典範の中に定められてあるので、其第十三條には、

天皇久しきに亘るの故障に由り

大政を親らすること能はざるときは、皇族會議及び樞密顧問の議を経て攝政を置く。



とあり、其第二十條には、

攝政は成年に達したる皇太子又は皇太孫之に任ず。

とある。皇太子及び皇太孫は滿十八年を以て成年とせらるゝのであるが、若し成年の皇太子若しくは皇太孫の在らせられぬ時には、他の皇族が攝政となるのである、その順は第一に親王及び王、第二に皇后、第三に皇太后、第四に太皇太后、第五に内親王及び女王といふことに、同じく皇室典範によつて定められてある。即ち皇族以外の方が攝政にならるゝことは絶對にないのである。

勿論平安朝以來は藤原氏の一族から攝政が多く出て居るが、それは一時の變體であつて、日本の國體とは合はぬことである。天皇の御位は申すまでもなく神聖なものである。而して攝政は帝國憲法の第十七條に、

攝政は天皇の名に於て大權を行ふ。

とある通り、最も大切なる地位であらせらるゝのであるから、臣下の中から攝政にな

る者の出るのは決して正當なる事ではない。それは一時の變體として己むを得ぬ事であつたが、明治二十二年に皇室典範を御發布になると共に、皇族以外に攝政となる場合の今後絶對に無かるべきことを定められたのは誠に結構なる次第である。さて歴史上に於て皇族が攝政とならせられた例は今迄に三回ある。其一是仲哀天皇崩御の後に應神天皇がまだ御幼年であつたので、御母の神功皇后が攝政の任に當られた。それは凡て六十九年間續き、神功皇后の崩せられたので、應仁天皇が初めて親ら政事を執らせられたのである。

第二には聖德太子が推古天皇の朝に皇太子にして攝政となりたまひ、凡て二十九年間此の大任を全ふせられた。第三には中大兄皇子が孝德、齊明、兩朝に同じく皇太子にして攝政とならせられたが、是は兩朝を通じて十七年間である。其後齊明天皇の崩御により皇太子が即位せられた。即ち天智天皇である。但し中大兄皇子の事は國史の上に攝政といふ語が見えて居ないで、たゞ皇太子とのみある。攝政の御名は無いが事



實上は確かに攝政であらせられた。されば皇太子にして攝政とならせらるゝことは、今回で都合三度となるわけである。而して此の御三方ともに極めて御年若で此の大任にお就きになつた。即ち聖徳太子は推古天皇の元年に御年二十一。中大兄皇子は孝徳天皇の元年に御年二十。今の攝政宮は大正十年十一月、御年二十一にして此の大任に就かせられたのである。



聖徳太子の像

中大兄皇子といひ、何れも其の攝政時代に於て非常なる御活動をなされて、吾が日本

の國威は海外に輝くに至つたのである。今の攝政宮の御爲に、まことに幸先の善いことと、申さなければならぬ。彼の御二方は何れも非常に英邁なる天性を有したまへる故に、此の如き成績を御示しになつたに違ひない。しかしながら又一には當時御二方を御補佐した人々も、是は國家大事の際であるといふ覺悟を以て力を盡し、國民一般にも最も緊張したる精神が充ち満ちて居た爲に、上の思召がよく徹底したものであらうと思はれる。若き攝政宮を上戴く所の日本國民は特に此點に意を注がなければならぬ。

聖徳太子が攝政とならせられた時に吾が日本は極めて多事多難であつた。先づ國內に於ては蘇我氏といふやうな豪族があつて權勢をふるひ、朝廷の百官は何れも互ひに黨を立て、勢を争ふことにのみ専であつて、國家のために盡さうといふ決心の者は至つて稀であつた。外に於ては支那の勢力が著しく強大になつた。支那は其頃まで久しく南北朝に分れて相争つて居たのであるが、隋といふ國が起つて之を統一した。統





法隆寺

四八  
一されて力が強くなつたので、その力は朝鮮へ延びて来た。斯くして朝鮮半島は殆んど皆隋の勢力の下に置かれてしまつた。此時に當つて我が日本國に若し乗すべき際があつたならば、支那の勢力は必ずや我に壓迫を加へて来たにちがひない實に危急の時である。然るに聖德太子が攝政の地位に就かせらるゝに及んで、日本の國中は曾て例の無いほどに緊張して来た。風紀は刷新せられ、國力は次第に増進し、工藝美術の如きに至るまで實に目覺しい發達を遂げた。その頃の建築と

して今に傳はる大和の法隆寺を見たものは、誰も驚嘆せずには居られまい。此の如き雄大莊嚴なる建物は、當時の最も緊張したる國民精神の生み出したるものである。

推古天皇十六年に隋より國書を送つて来たが、その書は「皇帝倭皇に問ふ」といふ語を以て始まり、頗る驕慢なるものである。聖德太子は之に對する返書を草して御送りになつたが、その書には

東天皇敬ひて西皇帝に白す。

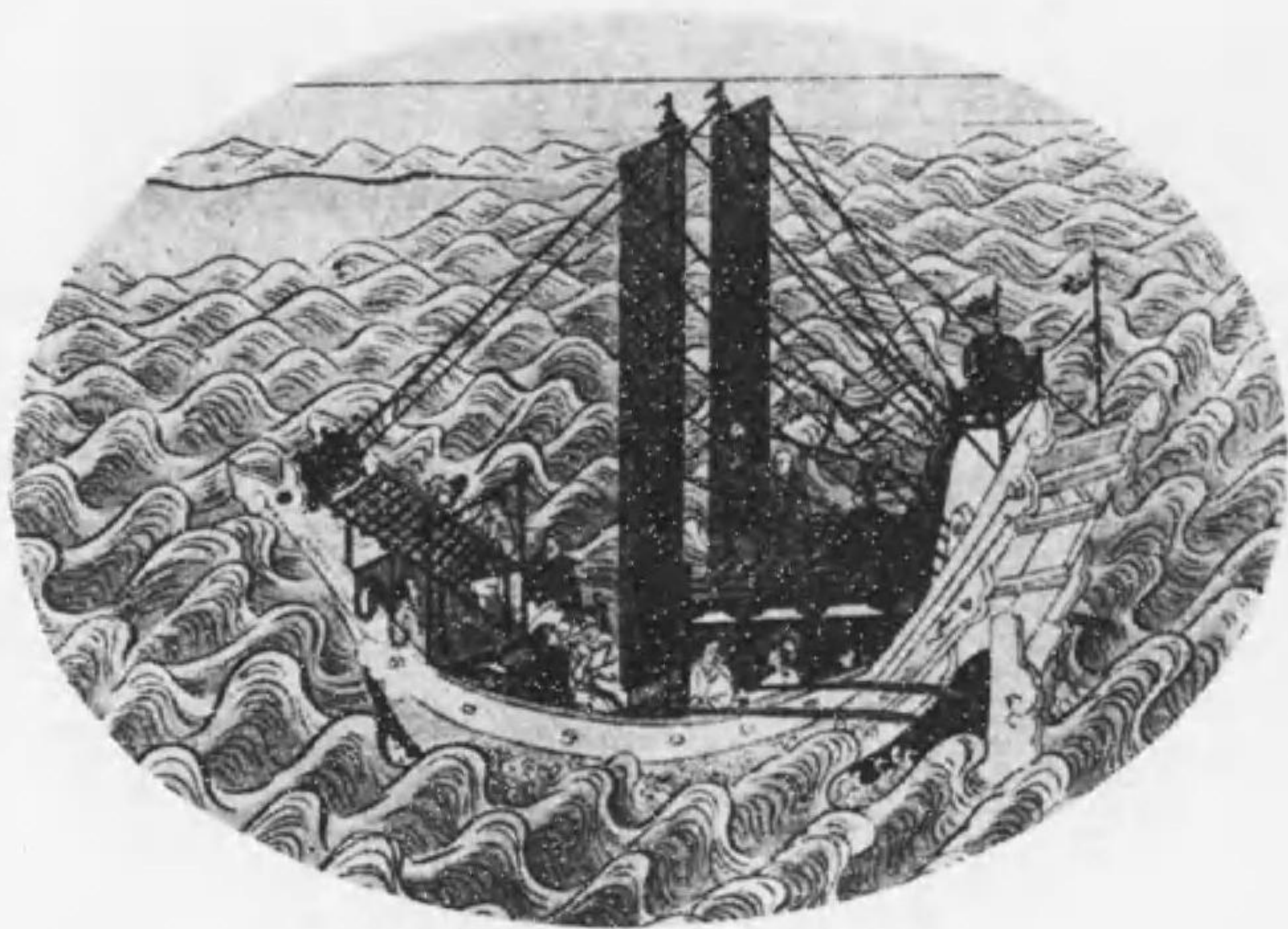
とあり、全く對等の語を用ひて居られるのである。是は決して空威張りではない。彼と對峙すべき實力のあることを確信せられたればこそ、此の如き辭令を用ゐられたのである。又太子が攝政であらせられた間は蘇我氏一門の者も我儘な事をせずして屏息し、朝廷の役人達の風儀も大に改まつた。されば太子の薨去になつた時には國民盡く泣き悲しみ、皆共に

日月輝を失ひ天地既に崩れぬ。今より以後誰をか恃まんや。



と語りあつたさうである。

中大兄皇子の攝政としての御功績も極めて偉大なものである。皇子が蘇我入鹿を大極殿に於て誅せられたのは誰も能く知る所であるが、是は攝政となられたのと同じ年である。此の御年の若い皇子を御輔け申して大事を決行したる中臣鎌足も、其時は二十六歳といふ壯齡であつた。斯くて孝徳天皇の御宇に皇太子として御決行になつたのが有名なる大化の革新であるが、これには鎌足等の力も與つて居る。此の革新は豪族の専横なるを抑へ、貧富の懸隔の甚しくなつたのを平均せしめ、朝廷の御威光を古に復し、民力の涵養を圖ることが主眼であつた。又其頃支那に於ては隋が亡びて唐の代であつたが、唐の太宗といふのは非常に賢明なる天子であつたので、國力は著しく増進し、文化の程度は最も高くなつた。中大兄皇子は内外の形勢を達観する力をもつて居られたから、唐の制度の採るべきものは、盡く探つて吾國に應用せられた。それと同時に彼の壓迫を受けぬだけの實力を養ふことに最も多く御苦心になつた。此よ



遣唐使の船出

り後、奈良平安の朝に至り吾が國の文化の程度はメキ／＼と進んだが、その根柢は既に此時から培はれたものと見るべきである。

此の如く聖徳太子の時といひ、又中大兄皇子の時といひ、若き攝政宮を上へ戴き、日本國中が若き氣分を以て努力した爲に、何れも美事なる成果を得たのである。今や吾等は第三回目に若き攝政宮を上へ戴いて居る。吾等の祖先は二回共に若き攝政宮の下に於て、多事多難の中を突破し、國力を養ひ國威を輝すに成功



したのである。其の子孫たる吾等が無爲無能にして、祖先を辱むるやうな事があつてはならぬ。殊に余は青年の人々に向つて奮起を望みたいのである。日本の爲に最も大切なのは今後の二三十年間である。此間に於て歐米諸國の東洋に於ける活動も益々盛になり、隨て吾が日本との競争も益々烈しくなるであらう。此間に於ける吾等の覺悟次第で國の運命がほと決すべきである。青年諸君は此の最も大切な時を承くべき人々である。青年の時はまだ世間の波に揉まれず、利害損得の打算のために昏まされぬ所の、極めて純潔なる心をもつて居る。此時に於て諸君は吾等の若き日本の爲にシツカリとしたる覺悟を固めて置かなければならぬ。昔希臘のソクラテスは七十歳になるまで青年の友を以て自ら任じて居た。彼は常にいつた。

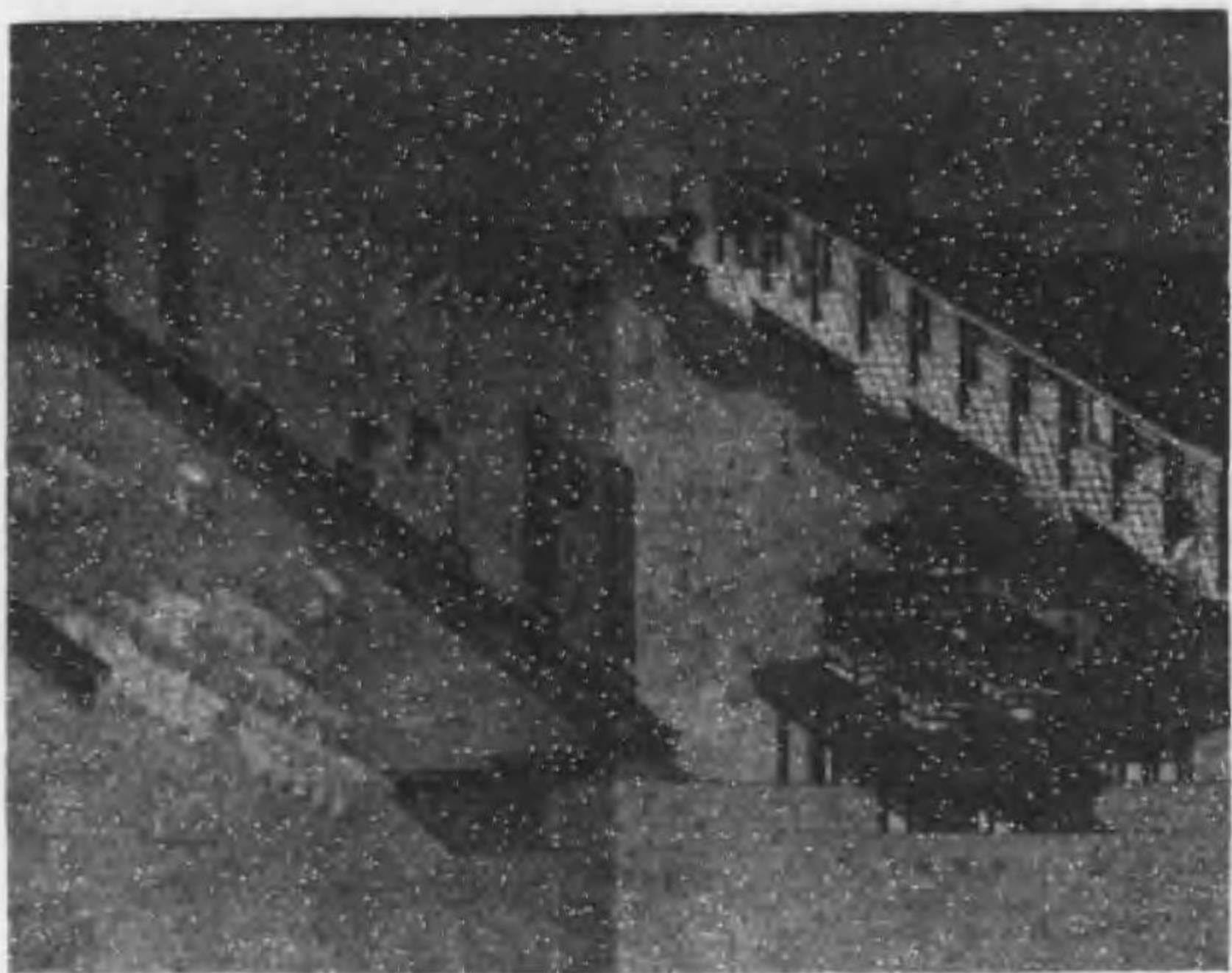
余は青年を愛す。何となれば青年は眞理を愛する者なればなり。

吾等の國は若き國である。而して上には若き攝政宮を戴いて居る。願はくば共に若き心を以て勇往邁進したいものである。

### 三、天皇のしろしめす國

日本の天皇は世界の帝王と全くちがふのである。世界の國々の歴史を調べて見ると皆その國民が國力を發展せしめる必要上から、國王といふものを推し立てたのである。即ち世界の國々の帝王は國民によつて作られたるものである。されば國民が帝王を戴く必要を認めぬ時が來れば、それを引き下してしまふのも更に不思議ではない。世界が盡く共和政治の國となつて、帝王といふものが無くなつても、少しも驚くには及ばぬ事である。しかし吾が日本國は全くちがふ。吾が日本國はその建國の始めから上に天皇があらせられて、多くの臣民は天皇を君として仰ぐのみならず、子の親に對すると同じやうなる親みの念と、弟子が師に對する崇敬の念とを以て仰ぎ尊んだものである。天皇は吾等の爲の君であるのみならず。吾等の父であり又吾等の師である。吾等の心と天皇の御心とは常に相通じて居る。それで天皇の此國を統治したまふことを





御即位の式圖

「しろしめす」と申すのである。  
吾が國の古語に「しろしめす」といふのと「うしはく」といふのがある。此の二つの語は似たやうなもので實は全く意味がちがふのである。例へば武田信玄が甲州を領地として居たとか、北條早雲が關東八州を取つたとかいふ類は「うしはく」の方である。唯だ天皇が此國を御治めになることのみを「しろしめす」と申すのである。「うしはく」といふは領するとか所有するとかいふ意味である。力があるか智慧がありさへすればうしはく事は出来る。然るにしろし

めすと申すのは力づくや智慧づくの事ではないのである。「しろしめす」と申すは又「しらす」といふのと同じ語である。即ち天皇は吾等の心を悉く知つて居らせられて、吾等凡てが幸福になるやうに統治せらるゝのである。日本國の天皇は他の國の國王の如くに、力づくで國民を壓迫するとか、智慧づくで策略を構へ政略を用ゐるとかいふことは少しもなく、唯だ國のため民のために御位を保たせらるゝのである。されば國民の凡てが如何なる場合に於ても、皇室に背き奉ることはすまいと、皆心に誓うて居るのも當然の事である。照憲皇太后の御歌に  
青柳のなびく姿や大御代にしたがふ民の心なるらむ  
と申すのがある。春風が吹けば柳の枝が自然と之に靡くやうに、民の心は自ら皇室に向つて居るのである。是は上の御心が下に徹底して居るからである。即ち天皇のしろしめす國なるが故である。

今ではモウ三年のむかしになるが、大正十二年九月一日に恐ろしい大震火災が東京





前橋重二の時當災震

を襲うた。此の日の午後には二重橋前に  
夥しい避難者が集つて居た。彼等は多  
く身一つを以て猛火の中を脱して來たも  
ので、所謂着の身着のまゝであつた。さ  
うして非常なる不安の顔つきで、なほ空  
を蔽ふて燃えさかる火焰の方を眺めて居  
た。其時に宮城の御門から軌り出た一臺  
の自動車は彼等の群集の中へとさし懸つ  
た。中には確かに御所へ御機嫌伺ひに上  
つた人々を乗せて居るのである。之を見た  
人々は彼の自動車のまはりに集つて來た  
さうして口々に「攝政宮に御障りはな

いか」と尋ねた。時に車中の人は窓から半身を乗り出して、朗々たる聲を張りあげて  
一同に向ひ

御安心なさい。殿下には何の御障りもない。

といつた。之を聞いた一同は覺えず「萬歳」を三唱した。其の人々はいづれも感激に  
充ちた面持であつた。しばしは自分一身の苦勞などは全く忘れてしまつて、吾等の攝  
政宮殿下の御無事であつたことを、心の底から祝し奉つたのである。日本國民の美  
しい國民性は此の如き時に最もよく發露するのである。

此の國民性こそは建國以來養はれて來たものである。但し其間に於て武家などが政  
權を執つて、皇室の御心の貴さが直接四民に知れ渡らぬ時代もあつたが、維新の大事  
業に力を盡した人々は、此點に就ても深く意を用ひ、何卒して上の御心と下の心とが  
常に通じあつて居るやうにと苦心したものと思はれる。大久保利通が明治元年に上つ  
た意見書の中にも



國內同心合體、一天の主と申し奉るものは斯くまでに有難きもの、下蒼生といへるものは斯くまでに頼もしきものと、上下一貫、天下萬人感動涕泣致し候程の御



大久保利通

實行舉り候事、今日急務の最急なるべし。といひ、更に進んで敬上愛下は人倫の大綱にて論なきことながら過ぐれば君道を失はしめ、臣道を失はしむるの實あるべし。

といつたが、誠に至言といふべきである。今日に於ては、その昔のやうに上上の間が塞がつて居ず、皇室の有難い思召がいつ

も吾等の間に知れ渡るのは、まことに貴い次第である。殊に明治天皇の御製などを拜見すると、吾等臣民を宛ら生の子の如くに思召さるゝ御心がありと分つて、唯だ感激の外はない。

千萬の民と共に樂むにます樂みはあらじとぞ思ふと申す御製があるが、實際陛下は取立て、御樂みと申すべき事は何もなく、民間の富豪などの如くに避暑とか避寒とかに御出になることもなく、唯だ民の生活の安らかになるやうにとのみ御心を碎かせられたのである。勿論世の中には苦勞が多いから、安樂にのみ毎日を送ることは誰にも出来る事ではない。しかし如何に苦勞しても、その苦勞のかひがある世の中ならば、苦勞は堪へ得らるゝものである。互ひに人格を認めあひ。互ひにその仕事の價値を認めあひ、互ひに感謝しつゝ、毎日を送り得るならば、如何なる困苦の中をも通り抜けるゝ筈である。明治元年三月の五箇條御誓文の中に官武一途庶民に至る迄各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要す



とあるに眞は有難い叡慮である。

何よりも人心の倦むといふことが最も恐ろしい。倦むとは努力することが馬鹿らしくなることである。享樂主義などといふものも多くは人心の倦んだ所から生れ出るのである。努力することが馬鹿らしくなつて、相競うて世の中を胡魔化して渡らうとするやうになれば、やがて國は衰微する。甚しきに至れば滅亡する。彼のスペインとかホルトガルとかいふ國々は今より三百年前には世界の強國として仰がれて居たが、今日では殆んど勢力がない。斯くなつた原因を尋ねて見ると、眞面目に努力する者が次第に少くなつた爲に外ならぬのである。人心をして倦まざらしめんとする者は、世の中の人々が皆互ひに努力の貴むべきを認めあひ、互ひに感謝しあふやうになつて初めて實現し得らるべきである。されば御製には

おのがじゝ力を盡し世を富ます民こそ國の寶なりけれ

とあるが人々は貧富貴賤の差がいろ／＼ある。又智者もあれば愚者もある、體力の強

い者もあれば弱い者もある。その地位境遇もそれ／＼に皆ちがふ。しかし何人でも其の爲すべき事がある。その爲すべき事に力を盡すものは皆國の寶である。

民を以て國の寶となすといふことは、歴代の天皇に一貫したる御心であつたと存せられる。それで吾が國の古語では、人民のことを「おほみだから」といふのである。國は民の力によつて保たれるのであるから、人民のことを「大なる御寶」といふのである。余は淺學であるから世界の多くの國の言葉に通じては居ないが、余の知れる範圍で、人民のことを「おほみだから」とまでいつた例は英獨佛といふやうな國語の中には見出されぬ。吾等が尊い皇室を上戴き、歴代の天皇の御心に「國の寶」として重んぜられたといふは、いかに光榮ある國民ではないか。

聖帝の御事蹟も多く知られて居る中に、彼の仁徳天皇が高い臺に上つて民の竈の煙の薄きを見そなはし、租税を免せられた事の如きは、最もよく知られて居る。其時の天皇の御言葉こそは歴代の天皇の有難い思召を代表するものとも頌し奉るべきであ





仁 德 天 皇

六二  
らう。日本書記に據ると、租税を免すべ  
きことを群臣に命せられたのは天皇の御  
即位四年の二月で、同七年の四月に至り  
煙の多く立つやうになつたのを見そなは  
して「朕既に富めり」と仰せられたので  
ある。其時皇后が其の御言葉の意味を御  
尋ねになつたのに對して、天皇の仰せに  
は、  
其れ天の君を立つるは是れ百姓の爲な  
り。然らば則ち君は百姓を以て本と爲  
す是。を以て古の聖王は一人も飢寒す  
れば之を願みて身を責む。今百姓の貧

きは則ち朕が貧しきなり。百姓の富めるは則ち朕が富めるなり。未だ百姓の富みて  
君の貧きこと有らず。

とある。此時御所は夥しく破れてしまつて居たので、諸國よりして其の修理を願つた  
その中には

若し此時に當つて宮室を修理せんば、懼らくは其れ罰を天に獲んか。

とまでいつた者もあるが、天皇なほ之を許したまはず、十年冬十月に至つて初めて許  
されたので、人々は喜び勇んで働いた。日本書記には「日夜を問はず力を竭して競ひ  
作る、是を以て幾時をも經ずして宮室悉く成りぬ」とある。

此の如くに貴くも美はしい君臣の情誼が、建國以來一貫して今日に及んで居るが故  
に、時に治亂興亡の變化はあつても、國體の上に於ては何の動搖もないのである。吾  
が國體の何故に尊いかなを知るために、國といふものは一體如何して成立つものである  
かを考へて見たい。元來人は群を成して住むといふ本性をもつて居る。希臘の哲人ア





アフリカ人部族

六四  
 リストテレスが「人は社会的なる動物である」といつたのは、動すべからざる真理を含んで居る。西洋で十八世紀頃には「國家といふものは元來人々が約束して作ったものである。國家を作つて住む方が人々の利益であるから斯ういふ事を續けて居るのである。これは人々の利益でないことが明になれば何時でも止めてよいのである」といふやうな事を唱へる學者もあつた。しかし此説は根本から誤つてゐる。吾等は利害損得を比べ合せてから、約束して國家を作つたのではない

ひとりでは生まれぬといふのが人の本性である。如何なる蠻人と雖も必ず部落を作つて居る。彼等は決して多勢の人の力を借りて自分の生命の安全を謀らうとするために部落を作るのではない。共に住み共に語ることが彼等の大なる樂みなのである。其等の蠻人の中には日々の生活に必用なる物を得られぬものもある。又言語の發達も至て幼稚であつて、僅かに日々の用を足すに過ぎぬものである。然るに彼等は其の不足だの生活の中に於いて相集つて樂みを共にして居るのである。如何なる蠻人にも必ず唄と踊りとがある。又如何なる蠻人でも酒を作ることを知つて居る。それは彼等の自然に有する社會性の現はれたものに外ならぬのである。  
 言語が不完全でありながら、集れば何か唄をうたふ。又集つて踊りを踊る。又不足の食料の中から酒を作つて、一緒に集つてそれを飲む。これは皆人間固有の社會性の發露したものである。食欲とか睡眠欲とかいふものは人間の固有なもので、若し食はず睡らずに居れば死んでしまふのである。而して其等と相並んで人間には社會欲





踊 盆

がある。社會欲とは相集つて共に住みたいといふ欲望である。どうしても獨りで寂しい生活をしては居られぬのである。其の本性に基いで、人は皆社會生活をするのである。凡河内躬恒の歌に、

世をすて、山に入る人山にてもなほ憂き時はいづち行くらん

といふのがある。世の中が煩いといつて山の中へ入つて獨りで住んで居てもやがて寂しくて堪へられなくなる。その時にまた何處へ行くのか。元の家へ

戻つて来るより外はないではないか。

共に住むことは吾等の自然の要求で、共に住み共に樂むより以上の樂みは無いのである。田舎でよくある盆踊りといふものも要するに此の社會心の現はれたものである。唄の文句とか踊りの手とかいふものは、國によつてそれ／＼異ふが、月の涼しい晩に村中の者が皆集つて、踊るのが何よりの樂みなのである。平生に於ては貧富の差とか身分のちがひとかいふ事が人々の心を隔て居るのであるが、此時には一切平等になつて共に唄ひ共に踊るのである。これが何にも換へられぬ樂みである。後水尾天皇の時に諸國の盆踊りの唄を勅命によつて集められたことがある。民心の嚮ふ所を知ろしめすといふ歡應のほど、まことに畏いことである。その唄の中には、

鮎は瀬につく鳥は木はとまる人はなさけの下に住む

といふやうなものも見出される。世の中が切迫して來ると「他人はどうでも自分の都合さへよければ宜い」といふやうな考への人も多く出て來るけれども、各自にその心の



底を叩いて見ると、人と共に楽しむのを眞の樂みにするといふ本性が潜在して居ることに氣附くであらう。

六八

斯く生れながらにして社會性をもつて居るから、此の天性に基いて部落が出来た。それが發達して來ると國家組織が成り立つのである。國家といふものは唯だ多くの人が集つて共に住むといふだけでなく、或る組織を有し、また統一を有する所の團結である。其の統一力が微弱になれば國家の存立は危くなる。そこで何れの國に於ても必ず主権者といふものがある。これは其國の統一力を代表するものである。主権者がなくしてよく治つて行くといふ國は決して無い。其の主権者にもいろ／＼の種類がある。帝もあり王もあり、大統領もある。又むかしの羅馬時代には二人若くは三人の執政官といふ者が政權を握つて居たこともある。何れにしても其の主権者の地位の動搖せぬことは、國の平和を維持する上から最も望ましい事である。

然るに吾が日本以外の國々に於ては、其の主権者の地位といふものが頗る不安定な



シザアの刺るる圖

のである。むかし羅馬のシザアは其の國の爲に大功を立て、非常なる人望を負ふて執政官となり、又萬能に達した人として誰からも尊敬されて居た。然るに其の部下の一人たるブルタスの爲に刺されて議院の中で死んだ。その時にブルタスは公衆に對して

余はシザアを愛す。されども余は更に多く羅馬を愛す。

といつて、國の爲にシザアを殺すのは己むを得ぬことであると説明した。眞に國家の爲ならば主権者に背いても宜い、

六九



場合によれば殺しても宜いといふ思想が勢力を得て来ると、革命が起るので、是は獨りシーザアとブルタスの場合のみでは無い。歴史上にいくらかも例がある。英國のクロムウエルの如きも國家の幸福の爲にチャールス帝を殺したので、彼は之を神に對して耻る所なき行爲と自信して居た。最近に獨逸のカイゼルの如きも一時は非常なる勢力であつたが、今では國外に追はれて寂しい生活をして居る。是れ皆吾が日本と國體の異なるが爲に外ならぬのである。

革命によつて主権者や其の家族などが悲惨な有様に陥るのは言ふ迄もないが。之によつて國民一般の蒙る所の不幸もまた極めて大なるものである。革命によつて破壊されたる秩序が回復するには随分長い歳月を要する。又革命によつて醸されたる人心の不安は容易に醫し得らるゝものではない。例へば彼の佛蘭西革命によつて其國の受けたる損失の如きを考へて見ればよく分るであらう。あれ以來佛蘭西はどうしても實力上英國と同等にはなれぬやうになつてしまつた。以前には英佛二國の力が殆んど

匹敵してゐたのであるが、革命以後に於ては佛蘭西にナポレオンの如き大英雄が出て大に努力したにも拘はらず、到底英國を凌駕することなどは出来ぬのである。若し他國との關係が無ければ、一たび破壊されたる秩序が又國民の自覺によつて徐々に回復して来るのを待つても、それで済むのであるが、今日に於ては國と國との間にはいつも烈しい競争がある。その最中に革命などが起れば、モウ他國との競争には容易に勝てぬことになつてしまふ。譬へば徒歩競争をして居る途中で躓いた者は、優勝者となる見込みが無いのと同じことである。しかし主権者の地位が安定して居ない國に於ては、時として革命の起るのもまことに避け難い事なのである。其の理由は至て簡單である。

前にもいふ通り世界の國々の主権者は皆人民によつて推し立てられたものである。大統領とか執政官とかいふものは人民の中から選舉されて、一定の任期の間だけ其の地位を保つことは誰もよく知る所である。帝王と雖も其の始めに遡つて見ると、何



れも人民より推されたのである。故に帝王の子孫が又其地位を嗣いだにしても、其の實力が無くなれば地位を失はなければならぬ。力が強くて上に立つ者は、それより力の強い者が出た時に地位を保つことは出来ぬ。智慧を以て上に立つ者は、それより以上の智者に地位を奪はるゝのも己むを得ぬ事である。徳を以て上に立つても、その徳が衰へる時には他の徳の高い人の方に人民が歸服するのである。支那の昔の書物などには、君たる者の地位の危いことを説いて、或は朽ちたる繩を以て馬を馭するやうに思へとか、或は薄氷を踏んで立つて居るやうに思へとか、頻りに戒めてある。太公望が周の文王に説いたといふ語にも、

天下は一人の天下に非ず、乃ち天下の天下なり。天下の利を同うする者は天下を得天下の利を擅にする者は天下を失ふ。

とある。即ち多くの人民を利する者のみが主権者の地位を保ち得らるゝといふのである。それで若し「此の如き王を戴くのは國民の不利である」と考へる者が多くなれば

忽ち革命が起るのである。

斯ういふ様な次第で、世界の何れの國にても絶対の平和といふものは望まれぬのである。主権者の地位の動搖することは、一般民心の動搖の本となるのであるから、何



太公望の圖

れの國でも出来るだけ之を避けたいのであるが、時には避け得

られぬ場合があるのを免れぬ。其中に於て唯一ヶ國、實に世界に於て唯一ヶ國のみ全く特別の性質の國がある。是れ即ち吾が日本帝國である。吾が國の天皇は力があると



七四  
 か智慧があるとかいふ理由で人民が推し立てたのではない。抑も此國の起つた初めから、天皇は上に在らせられたのである。他の國では國が出来て然る後に帝王が出来るのであるが。獨り日本 於ては此國が上に天皇をもつて生れ出たのである。譬へば吾等の身體に頭があるのと同様である。抑も生れ出た初めから頭は身體の上部にあつて手足を支配する地位に在るので、後になつて取り附けたものではない。吾等の身體から頭を取り去ることが出来やうか。出来ぬことは無いが、若し頭を取り去れば身體が死ぬのである。頭の無くなる時は即ち死ぬ時である。頭を大切にするのは即ち身體の各部を大切にすることなのである。吾等の天皇は實に此の如きものである。天皇に仕へ奉るのが即ち吾等の凡てを幸福にする道なのである。

君臣上下一體であつて、而も君臣上下の地位は初めから定まつて居る。苟くも此國の續かん限り、此の關係は變らぬものである。道鏡が皇位を望んだ時に、和氣清麿が奉答した宇佐八幡の神勅に、



圖の官武古上

我が國家開闢以來君臣の分定まれり。臣を以て君と爲すことは未だ之れ有らざる也とあるのは一語にして、よく吾が國體を悉して居る。既に君臣一體であるが故に、君

の爲に力を盡すのは即ち臣民たるもの各自の悦びであつて、君の爲に死するとも更に悔むぬは日本國民の特性である。彼の大伴家持が族に諭すの歌に、

海行かば水づく屍

山ゆかば草むすかばね、大君の邊にこそ死なめかへりみはせじ



とあるが、日本國民は此の精神によつて日清、日露の兩戰役にも大勝利を得たのである。今後は此の同じ精神が學問、技藝、商工業等凡ての事の上に發揮されなければならぬ。明治十四年十月に下されたる國會開設の勅諭に、

我祖我宗照臨して上に在り。遺烈を揚げ洪謨を弘め、古今を變通し、斷じて之を行ふ責朕が躬に在り。

と仰せられてある。時代がちがへば萬事昔の通りといふわけには行かぬ。外國の學ぶべき所は少しも躊躇なく之を學んで宜いのである。唯だ我には我として、萬古に通じて變らぬ貴い國體のあることを知り、「古今を變通し斷じて之を行ふ」と仰せられた聖意に背かぬやうに各自が心掛けなければならぬ。吾等は天皇のしろしめす國の民であることを、片時と雖も忘れてはならぬ。

#### 四 世界の列強ニ日本國

日本はもはや東洋の日本でなく、世界の日本である。日本國民の一舉一動が世界の注目を惹くと共に、世界の出來事が一々に皆日本に影響して來る。されば吾等は世界を知ると共に吾等自身の國をよく知らなければならぬ。昔は武士といふものが四民の上に立ち、凡ての責任を負ふて居た。農工商の民は武士の後からついて行けばそれで宜かつた。今日は全く時勢がちがふ。國民全體が皆此國を自分の國と考へて、各自に國を背負つて立つといふ決心をしなければならぬ。凡ての責任を當局者にばかり負はせてはならぬ。日清戰爭の濟んだ後で下された勅語の中に、

有司に信任して専ら贊籌の責に當らしむべしと雖も、積累滋蓄以て國本を塔ふは主として億兆忠良の臣庶に頼らざるべからず。

と仰せられてあるが、國の本となるべき實力は一般の人の努力の結果を積み重ねたものでなければならぬので、いかに政治家や學者が多く出ても基く所は國の實力である。その實力を充實するためには國民一般の覺悟が何よりも大切である。



法律制度の完備することも大切ではあるが、其の法律や規則を運用する者は人である。人の心が根本から善くならなければ、いかに法律制度が完備しても、國の健實なる發展は望まれぬ。事業を起すといつても、富を積むといつても、要するに人の力によるものであるから、各個人の覺悟が何よりも大切である。國の盛衰を定むるものは吾等各自の心一つであることを忘れてはならぬ。むかし孟子が

天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず。

といつたのは眞に名言である。又孔子の弟子の子貢が或時政事の要領を孔子に問ふた。孔子は三事をあげて之に示した。

食を足らし、兵を足らし、民は之を信にす。

といふのである。「之を信にす」とは人民が皆信義を守るやうに教へ導くことである。子貢が更に「若し己むを得ずして、その三事の中で一をやめなければならぬ時は如何しませうか」と問ふと、孔子は「兵を去らん」と答へた。「然らば残りの二事中で、又己

むを得ずして其一をやめるとしたら如何と問ふと、孔子の答へは

食を去らん。右より皆死有り。民信なければ立たず。

とあつた。食物は大切であるが、食つて居ても死ぬ時には誰も死ぬものである。信義



(筆山華) 像 子 孔

が行はれなければ、人民たるもの一日として人らしく生活することは出来ぬ。是が最も大切であるといふのである。少しく極端なやうな言であるが、深く味ふべきものである。たとへ衣食に不足なくして

て毎日の生活を續けて居ても、生きがひのある生活をし得ないで、たとへ生きて居るのでは全く無意味ではないか。



如何に榮華の生活でも、久しくなれば必ず厭きて来る。いかに高い地位に上つても、高い地位には又それに相應する危険が伴ふ。人に褒められるのは愉快な事であらうが、褒める人があれば、又そしめる人も出て来る。そんな事にはかり心を煩はされて居る人は、眞に意義のある一生を送ることは出来ぬ。昭憲皇太后の御歌に、

むらぎもの心に問ひてはぢざらば世の人はいかにありとも

と申すのがある。眞に吾が心に問ふて見て耻しからぬ一生を送り得る人は、自身に幸福であるのみならず、其の周囲にも必が善い感化を興へ得べきである。當世は兎角宣傳といふ事ばかり流行するが、その實なくして宣傳のみをやつて居るほど見苦しいものはない。偉大なる功業を立てやうとしても、一朝一夕にして急に出来るものではない。各自の業に全力を注いで、心に耻ぢぬ一日を送らうといふ潔い精神から、凡ての善い働が生れるのである。千代といふ女流俳人の句に

百なりや憂一筋のこゝろより

とある。「百なり」といふは俗に千なり瓢箪などともいふが、一本の憂に小い瓢が非常に多く出来るものである。百なつても憂は一つである如く、多くの働も心一つが元

で出来るのである。



加賀千代筆蹟

今世界に強國として勢を張つて居る國に就て調べて見ると、それは政治家とか大將軍とかの力のみでなく、久しい間に養はれたる國民性の發露に外ならぬのである。英國の將軍ウエリントンが佛の將軍ウエリントンを破つて、偉功を立てたのは人の知る

國皇帝ナポレオンを彼のワテラローの戦場で打破つて、



所である。しかし彼は自分の力のみで偉功を立てたとは思はず、部下の將士が多くの艱苦に堪へて其の責任を全うしたことに深く感謝して居た。英國へ凱旋して後のウエリントンの人氣は非常なものであつた。彼は爵位や年金や、多くのものを以て賞せられた上に、國民一般の尊敬の的であつた。彼は獵をするのが好きであつたので、凱旋後も折々暇を作つては獵に出るのを何よりの樂みとして居た。或日彼は獵に出ての歸りかけに或る牧場の側へ出た。その周圍にはグルリと木柵が繞らしてあつた。此の柵を越えて、牧場の中を横切つて行けば大分近徑になるので、彼は何氣なく柵へ足をかけ、ひらりと牧場の中へ飛び下りた。スルト突然耳の側で

其處から入つてはいけません。後へお戻りなさい。

といふ小兒の聲がした。その聲は小供らしいながらに凜とした調子であつた。氣がついて見ると、彼の前には番人の小兒が突立つて居た。見ればまだ十二三歳ぐらゐである。ウエリントンは笑ひながら、

通つても宜からう、余はウエリントンだ。といつた。小兒は頑然として肯かなかつた。ウエリントン將軍でも誰でもないけません。私は主人に此處の番をすることを言ひつ



像肖のントソリエウ

けられました。主人の許しを受けない人は誰でも通しません。通りたければ主人の許しを受けてお出なさい。

と言ひ放つて、小兒は一步も動かなかつた。

此の様子を見て居たウエリントン

は、いかにも感激に堪へぬやうなさまで、身を屈めて小兒の肩へ手をかけ、お前はよくお前の職を守つてくれる。余はお前の主人の爲でなく、一の英國人とし



てお前に禮をいふ。

といったが、更に言葉を續けて、

吾が英國は實に貴い國である。英國人は斯んな小兒までがよく其の責を守るのである。余が戰に勝つたのは自分の力でない。斯ういふ頼母しい國民が余と共に戰場に立つたからである。

といひ、欣々然として元の木柵を飛び越えて、前の途へ引返して行つたといふことである。

英國人に英國人氣質があると同じく獨佛等にもそれ／＼に佛人氣質があり獨逸人氣質がある。最近の獨逸の有様を見ると、彼等がいかにも根氣の強い國民であることが能く了解し得らるゝのである。彼等は戰敗の結果、今非常なる苦境に陥りながら其の努力一つを以て昔の獨逸に還ることが出来るといふ確信をもつて各自の仕事に全力を注いで居る。さうして最近に至り多くの事業が續々と起つて來たのである。此の如き

健氣なる働きの根抵となつて居るものは彼等の有する最も嚴格なる責任觀念である。獨逸の哲人カントは



カントの肖像

吾等をしていつも襟を正さしむるものは暗れたる夜の星影と吾が本心の聲である。といつて居るが、獨逸人の心の中には斯ういふ嚴肅なる氣分が確かに存して居る。彼の世界大戰爭の勃發して後幾くもなく、余は獨逸人に就て一の感歎すべき話を聞いた。甲州には葡萄園があるが、その中の或る所で獨逸種の葡萄を多く栽培することになり、獨逸人の技師を一人雇ひ入れて凡ての監督を任せた。それは大戰爭の起る前年のことで、契約の期限は三ヶ年であつた。其の獨逸人の技師は極めて忠實に働いて著々と成績を擧げ



て来たが、一年経つて大戦争が起つて、日本は獨逸を敵として戦はなければならぬ事になつた。そこで雇主は彼の技師を呼んで、「折角今まで骨身を惜まず働いてくれたのを解備するのは残念だけれども、お互ひに敵味方となつたのであるから、どうぞ國へ歸つてくれ」と言ひ渡した。彼の技師は之に答へて「御趣意はよく分りました。しかし願はくば今日から三日の間御猶豫を願ひたい」といつた。「それは隨意にしたら宜からう」といつて許すと、彼の技師は自分の部屋へ引取つて、それから三日の間一生懸命に何か書き物をして居た。約束の三日が経過して第四日目の朝、彼は雇主に面會を求め、

私は三年の間此處で働く御約束で参りました。さうして此の三年間に爲すべき事の大體は豫定を立て居ました。然るに僅かに一年で去らなければならぬやうになつたのは残念でなりません。私は貴君に對して自分の責を果し得ぬことを、何よりも悲しく思ひます。私は三日の猶豫を頂いて、今後二年間に私のしやうと思つた事を出



葡萄園の圖

来る丈委しく書きました。これを後へ遣して行きます。此中に書いてある通り實行して下されば、私が居なくても葡萄は充分に發育しませう。是で私の貴君に對して負うた責任の幾分でも果すことが出来れば、私に取つて此上の悦びはありません。といつて、一束の書き物を差し出した。雇主は彼の健氣な心に感じて懇ろに禮を述べた。彼の獨逸の技師は自分の誠意の貫徹したのに満足して、その日の汽車で直ちに歸國の途に上つた。此の一條の美談は獨逸國民の長所を遺憾なく現はしたものだと思はれる。



八八  
以上は英獨の二國に就ての話であるが、其他の國々にも皆長所がある。而も彼等は久しい間相對立して競争を續け、互ひに他の國に負けまいといふ考へで其の力を磨いて居るのである。殊に大正三年から五ヶ年間續いた大戦争は彼等に最も強い刺激を與へ、彼等をして協力一致して國家の大事に當ることの必要を最も痛切に感せしめた。此の五ヶ年間に彼等の失つたる所は極めて多いが、其の得た所もまた極めて大である。彼等は物質的に大に失つたけれども、精神的に大に得る所があつた。實をいふとあの大戦争の始まる前頃は、各國共にあまり物質的文明の進歩したる爲に著しく生活が華美になり、風俗も随分頹れて來て、何れの國でも心ある人は國の前途に就て相應に憂ひを懷いて居たのである。然るに意外なる大戦争が彼等の間に勃發して、彼等は非常なる苦みを嘗めた。負けた獨逸はいふ迄もないが、勝つた方の英佛等も種々の苦みを受けた。亞米利加のみは其等の國々とは別であつたが、それでも大戦に参加して後は凡ての物質を儉約するために、國中擧つて著しく質素な生活をしなければならなかつ

た。斯ういふ苦みが彼等の爲には大なる藥となつた。苦しい目にあつて初めて眞の力が現はれる。これは一個人でも一國民でも同じことである。熊澤蕃山は曾て



熊澤蕃山

雲のかゝるは月のため、風の散すも花のため、雲と風とのあればこそ、月と花とはたふとけれと詠じたが、苟くも國家の大事に當らうとする人は、是程の覺悟がなければならぬ。トントン／＼拍手で旨く行く時には、馬鹿な者でも相應に分別があるやうに見える。ところが一朝

逆運になつて來ると、其人の眞の價値が明かに分るものである。世界の強國は何れも苦しい目にあつて、其の苦しい中を通りぬけて、確としたる覺悟を極めることが出來



た。

戦時中には各國共に民心が非常に緊張して居た爲に、種々なる美談もあつた。是は英國のロンドン附近に起つた事であるが、其處に罐詰の大きな工場があつた。此の工場で模範職工といはれた某といふ者が戦争に出て行つた。その後で彼の妻が工場へ来て支配人に面會を求め、自分を夫の代りに雇つてくれといつて頼んだ。其の理由は、夫の遺して行つた一人の小兒を育てるために生活費を得たいのと、又一つには夫が久しく御世話になつた御恩報じに、一生懸命に働いて見たいといふ事であつた。支配人は其の志に感じて直ちに見習ひとして雇ひ入れた。ところが此の婦人は眞に一生懸命に仕事を勵んだので、間もなく一人前の仕事が出来るやうになつた。半歳も経たぬうちに彼の夫と同じやうな腕になり、給料も夫と同じくらゐ取るやうになつた。婦人は出来るだけ節約をして小兒を學校へ通はせ、餘つた分を貯金して置いた。彼此するうちに戦争が濟んで、夫は幸に少しの傷も負はずに歸つて來た。妻は喜んで之を迎



歐大洲戰出陣の光景

へ、國の爲に働いたことを厚くねぎらひ、又無事で歸つて來た喜びを述べた末に、私も貴君の代りに使つて頂いて、今では貴君と同じくらの給料を頂いて居ます。それで小兒も學校へ通はせて、幸に成績はいつても優等です。それから精々節約をして、貯金も是れだけ出來ました。貯金の通帳を出して見せた。夫は委しい話を聞いて且つ感じ且つ耻ぢた。私は模範職工として、可なりに多くの給料を貰つて居た。あの頃は小兒も至て小く、まだ學校へ通はせる費用も要らなかつた。



それだのに取つた丈は皆使つてしまつて、家に貯へといふものは全くなかつた。お前は女の身として私の代りに働き、それで小兒も立派に教育し、斯んなに多くの貯金までして置いてくれたか。人間が一生懸命になると、どんな困難な事でも出来るといふことを、お前によつて今日初めて教へられた。私は今迄努力が足りなかつた。是から一生懸命になつて働いて、お前の骨折に酬むやう。

と彼は妻の前に誓つた。それから彼は從軍中の疲れを休めやうともせず、直に工場へ行つて仕事をはじめた。此の夫婦の話が、いつか工場全體に傳はつて一同に大なる感動を興へ、それから著しく能率が増進するやうになつたといふ事である。

斯ういふ類の逸話は何れの國にも澤山あるであらう。何れの國の人も其の國の實力を回復するために必死になつて働いて居る。伊太利といふ國は以前には、歐洲に於て最も共產主義者などの多く出た國で、又遊惰の氣風の盛なことは乞食の夥しいのを見ても直に分るといはれて居たが、今ではムソリーニが國政を執り、國家本位の政策を

以て人々を率ゐ、以前とは全く面目を一新した。此の一事を以ても世界の形勢が最近に於て著しく變化して居ることを知らなければならぬ。斯く緊張したる心を以て、努力に努力を重ねて居る國々が吾等日本國民の競争の相手である。彼等は苦しんで後に大に覺醒した。然るに吾が日本人は今迄の幸運に狎れて、貴き吾が國民性を忘れ、一身の私をのみ謀らんとして居る。斯んな有様で如何して彼等と對抗することが出来る。

孟子は『憂患に生きて安樂に死す』といつたが、是は眞に名言である。憂患に堪へることによつて新なる生命を得べきである。安樂に耽ることが久しければ凡ての力が皆衰へる、即ち死に近づくの道である。例を外國に求むる迄もなく、吾が國の歴史の上に於ても此の道理は極めて明である。例へば徳川氏の如きも天下を取るまでには非常なる苦みを嘗めて居る。徳川氏は三河の國に起り、武田織田今川三氏の間に挟まつて久しく苦しんで居た。今川が亡び武田が亡びて後もなほ織田氏の勢力によつて壓迫せ



られた。此の如き中に於て君臣心を一にして苦を忍び難に堪へて來たのが、他日天下



徳川家康

面から常に壓迫を加へて居た。その結果として武田徳川二氏の兵が三方が原に於て衝

を取るべき力の元を作つたのである。三河武士といふものは此の艱苦の中に鍛へ上げられたものである。共に苦しむが故に君臣の間には水魚も雷ならぬやうな情誼が養ひ成されたのである。その美しい君臣の情誼を最もよく現はしたのは、元龜三年十二月、三方ヶ原の戦である。

三方ヶ原は遠州濱松城の北方に連る原野である。其頃徳川家康は濱松城に居たのであるが、武田信玄は是非とも京都へ攻め上る爲に東海道路に根據地を得たいといふ考へから、徳川氏に背

突したのである。此の戦争は徳川方の大敗に歸したのであるが、その敗軍の際に於て三河武士の健氣なる性質が極めてよく現はれた。時に徳川家康はまた三十一歳といふ壯年であつたが、部下の將士が折り重つて討死するのを見て「彼等を死なせて自分ばかり助からうとは思はぬ。共に屍を此の原に曝すであらう」と、馬を敵の大軍の中へ乗り入れやうとした。多くの將士が之を遮り止めやうとしたが、家康は人々の言葉を耳にもかけず、敵の方へ向つて突進した。其時に夏目某といふ武士が居た。彼は六尺に近い大男で力も強く、殊に槍術が得意であつた。此の夏目が家康の馬の口を捉へて、力まかせに濱松の城の方へ引き向け、手に持つた槍で其の馬の尻を續け打ちに打つた。馬は打たれて驚き驀地に城の方へと駆け出したので、家康は生命を全うして濱松城へ入ることが出来た。其時に夏目が一生懸命に槍を振つたので、その槍が家康の兜の鍔に當つた。夏目は主君の後影を見送つて、涙をハラ／＼と流し、

いかに危急の場合とはいひながら、主君に對して槍を上げるといふのは相濟まぬこ

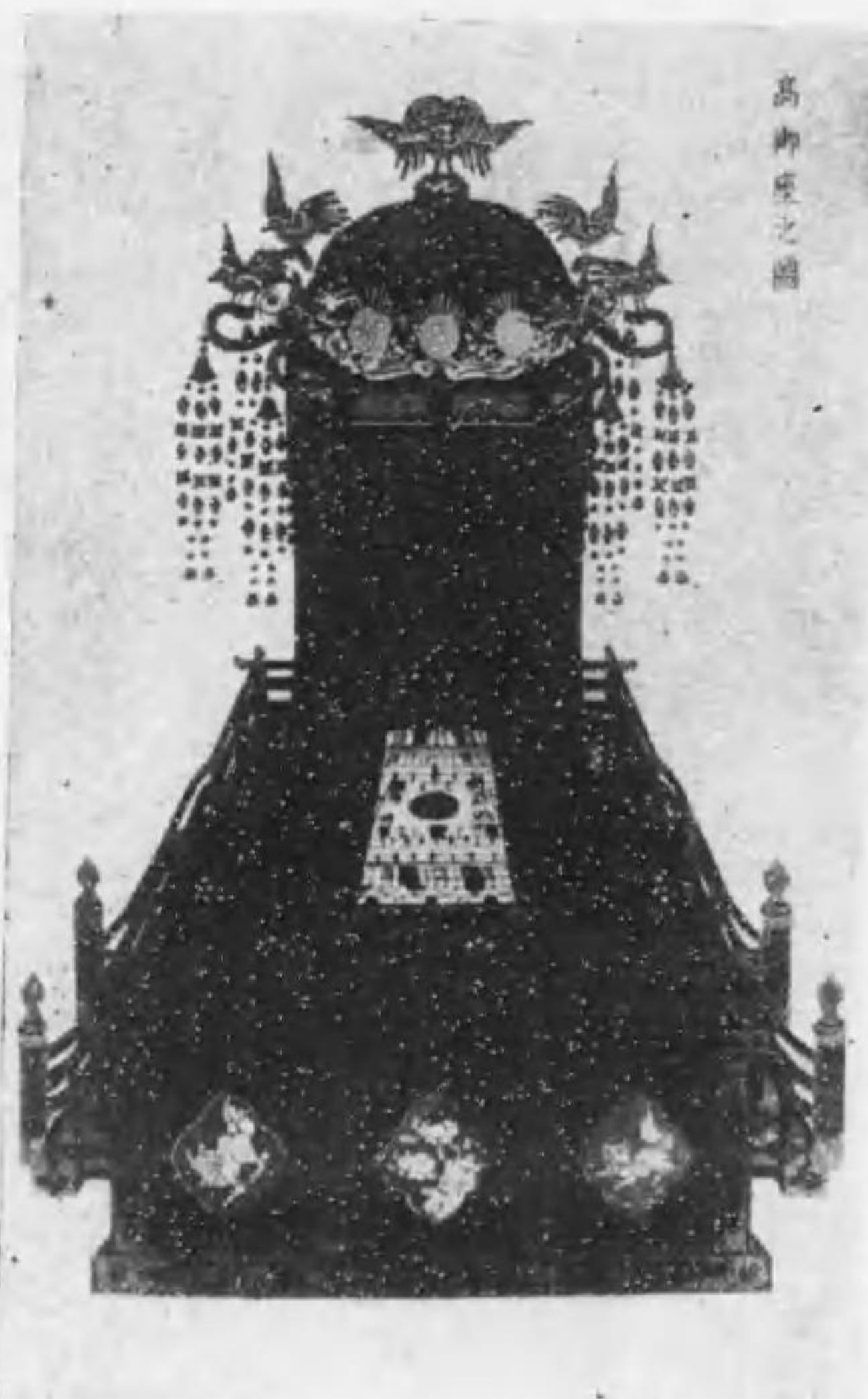


とである。殊に槍を以て主君の兜の鏝に傷をつけたのは、何とも申譯のない事であつた。此罪は生命をすて、償ひませう。

といつて群がる敵の中へ突き入り、槍の柄の折れるまで戦つて討死した。此處に武士道の精華が現はれて居る。主は家來ばかり死なせては濟まぬといふので共に死なうとする。家來はまた主の生命を救ひながら、それを自分の功とは考へず、死を以て不敬の罪を償つた。此の三河武士の美しい氣風が他日徳川氏の天下を一統する根本の力となつたのである。

日本人には此の如き貴い性質が具はつて居たのである。一身の利害損得を忘れて、君のため國のために力を盡すといふのが日本人固有の美風であつた。然るに近來に至り、あまり幸運が続いた爲に人の心が緩んで、此の美風も地に墜ちんとして居る。是はまことに由々しき大事である。今上陛下には大正十二年十一月を以て國民精神作興に關する詔書を下したまひ、

輓近學術益々開け人智日に進む。然れども浮華放縱の習漸く萌し、輕佻詭激の風も亦生ず。今に及びて時弊を革めずむば、或は前緒を失墜せむことを恐る。



高御座之圖

と仰せられた。此の如き悲痛なる語を詔書の中に於て示させられた例は今までに曾てない。吾等はいかにして此の罪を償ふべきであらうか。願れば大正四年十一月、陛下御即位の式を擧げさせられた

際には、極めて優渥なる勅語を賜はり、



朕は爾臣民の忠誠其の分を守り、勵精其の業に従ひ、以て皇運を扶翼することを知る。庶幾くは心を同くし力を戮せ、倍々國光を顯揚せむことを。とまで仰せられた。然るに此より八年の後に於ては、若し時弊を改めなければ前緒を失墜するであらうとの御訓戒を受けたのである。前緒を失墜するといふは、今まで發展し來つた國勢が頓挫して、世界の列國と對峙することの出來ぬやうになることである。斯ういふ悲痛なることを、詔書の中に於て承るといふは、いかにも相濟まぬ次第ではないか。斯くてもなほ覺醒せぬならば、何を以て吾等の祖先の靈に地下に於て見ゆることが出來やうぞ。嗚呼吾等の奮ふべきは今である。今は一刻をも忽且にしてはならぬ時である。

### 五 興亡の分岐點

今はまことに多事多難の時である。けれども吾等は此のくらゐの事で挫けてしまつ

てはならぬ。

うき事のなほ此上に積れかし限りある身のちからためさむ

と詠んだのは吾等の先輩である。その後を承けたる吾等が此の多事多難の世の中に立つて、頓挫してしまふやうな事があつてはならぬ。明治天皇は吾等を頼もしい者に思召されて、

敷島のやまと心の雄々しさは事ある時ぞあらはれにける

と御詠みになつた。日本國民たるものは此の氣概を失つてはならぬ。支那を相手として戦ひ露西亞を相手として戦つた時にはいつも勝つた。やまと心の雄々しさは最もよく現はれた。今は武力を以て吾が國に臨む國はないけれども、世界の凡ての強國が東洋に發展せんことを志として居るのであるから、東洋を代表する吾が日本は宛らに包圍攻撃を受けて居るものと覺悟しなければならぬ。此の戦争は兵力による戦争ではなくて、智力と財力とによる戦争である。所謂やまと心の雄々しさは此際に於て特に



現はれなければならぬのである。

但し如何にすぐれたる國民性を具へて居ても、之を養ふ道に於て缺くる所があれば、自然に緩んで行くのは免れ難いことである。前にも拜誦したる國民精神作典に關する詔書に、

國家興隆の本は國民精神の剛健に在り。之を涵養し之を振作して以て國本を固くせざるべからず。

とあるは吾等の常に服膺して忘れてはならぬことである。彼の徳川氏が三河に在つて周圍の爲に苦しめられて居た時には、前にいふやうに極めて質實剛毅なる士風を養ひ成したのであるが、所謂徳川幕府時代となつて、泰平漸く久しきに及んでは風俗甚しく頹廢し、殊に元祿以後になると、多くの武士はその職分を忘れて遊惰を事として居た。其頃の句に

何事ぞ花見る人の長刀



元祿花見の繪

といふのがある。武士にして武士道を磨くことを忘れ、唯だ長い刀を横たへて花見の群集の中を横行し、町人百姓を驚かし、得意がつて居たといふは、まことに哀むべき事で、徳川幕府滅亡の基は實に此時に在るのである。此の優柔懦弱の風の甚しきに及んだ時代に於て、武士道の精華を示したものは赤穂義士の復讐である。今その顛末を委しく述べる必要もないが、此の義士を出したに就ては深い淵源があるので、義士が一朝一夕にして出來た



ものではない。此の義擧は深く養ふ所があつて即ち發したるものである。此事に就て考へて見ると、今日の吾等に對する大なる教訓が含まれて居るのである。赤穂の義士といふものは元來山鹿素行の薫陶によつて出來たものである。山鹿素行と赤穂藩とは非常に深い關係をもつて居る。素行は江戸に在つて文武二道の達人として仰がれ、三十歳を過ぐる頃には既に數千人の門人を有して居た。加賀の前田家で其の聲名を聞き、七百石を以て召抱へやうとしたが素行は辭して仕へなかつた。然るに承應二年、素行が三十二歳の時に赤穂の城主淺野長直が千石を以て召抱へたいと言ひ込んだ。是は殿中で吉良義央を斬つた長矩の二代前の赤穂城主である。加賀百萬石の前田氏で七百石を給するといふのに、淺野氏は僅かに五萬八千石の小身でありながら千石を給するとは非常なる奮發である。素行もその志に感じて淺野氏の臣下となり播州赤穂へ赴いたのである。臣下といつても、細い用は何もさせず、唯だ家中の若者などに學問武藝を教へさせ、賓客として待遇された様子である。それは素行が自ら「配所殘筆」の中

に、

拙者儀相應の奉公申付られ候様に達て頼み申候へども、いかゞ存せられ候や、番並に使者等一度も申付けられず候。定て拙者不調法者故にてこれあるべく候。稽古日を定の置き、吾等罷出候



山鹿素行の筆蹟

とあるによつて明である。是は非常なる優待である。此の優待に感激して素行は主君をはじめ多くの藩士

の爲に全力を盡して教育の任に當つた。而して萬治三年、三十九歳の時に辭して江戸へ歸つたが、その時に主君長直は



十二歳の時より兵學の稽古をはじめ、諸流の師に就て學んだが、其方の御蔭を以て兵學の筋目が初めて明になつた。此の恩は永く忘れまい。

といつて誓紙を書いて渡した。此より六年の後、即ち寛文六年に至り素行が幕府の嫌疑によつて江戸を追はれることになつた時に、北條安房守の計らひによつて舊縁ある赤穂へ送られることになり、素行は又此年より十年間を赤穂に送り、延寶三年赦されて江戸へ歸つた。此の十年間は名義上は罪人であるけれども、舊縁のある地であつた爲に赤穂に於ては以前の如く優待せられ、多くの藩士に文武二道を教へた。しかし素行は少しも驕慢の狀なく、常に謹慎して日を送つた。彼は此時の事を自ら記して、今年配所に十年これ有り、唯今は一入天道のとがめを存じ候て、病中の外一日と雖も朝寝仕らず、不作法なる體を仕らず候。

といつて居る。此の十年間に教へた人々の中に大石良雄も居たので、素行は五十五歳の時に赦されて江戸へ歸つたが、此時に良雄は十七歳であつた。

山鹿素行が初めて淺野氏の臣となつて赤穂へ來た時から義士の討入の時までは、四十九年を隔て居る。之を以て見るも、養ふ所の深いものが初めて大なる功績を顯はすといふことは明であらう。徳川時代に於て親や主人の爲に復讐をしたものは夥しくある。しかし赤穂義士のは全く他の復讐とは性質がちがふのである。多くの



大石良雄の肖像

人は復讐をして後には目覺しい出世をして居る。その時代の習はしとして、親や主人



が殺された場合に復讐もせずオメ／＼として居れば、その同輩から排斥されて世の中に立つことが出来なくなる。そのかばり立派に復讐をした後は同輩からも尊敬され、体祿等も非常に増すのである。伊賀の上野で仇討をした荒木又右衛門や渡邊數馬をはじめ其の例は頗る多い。然るに赤穂義士の場合に於ては、その主人は罪人となつて家祿を召上げられ、敵は世に時めいて居て、表面上復讐の理由は認められぬのである。それ故に復讐をしておふせて出世をすることで無味、復讐をしておふせた時は即ち自分達が死ななければならぬ時なのである。それ故に此の復讐こそは眞に献身的なものといふべきである。孟子は

生もまた我が欲する所なり、義もまた我が欲する所なり。二者兼ぬるを得べからずんば、生を捨て義を取らん者なり。

といつたが赤穂義士の如きは眞に之を實行したものと云ふべきである。

此の困難なる事を果すに當つて、四十六人の同志を糾合して、少しも違算なく其の

計畫を實行したる大石良雄は、まことに非凡な人であつた。而も良雄が此の大事を實行するに當つて、『我は武士道の範を示すものである』などいふ驕慢の念は少しもなく、終始一貫して恭謙の態度を失はなかつたのは敬服すべき事である。討入をするに就ても、幕府の大切なる儀式の日を憚つていろ／＼と思索した末に、やうやく十二月十四日と定めたのである。又本懐を達して後も『自分達は浪人の身として旗本の邸へ亂入したる罪人である』といふ考へから、態と裏道を辿つて高輪の泉岳寺へ引き揚げた。其後幕府の役人の取調べに當つても、極めて謙遜であつて、

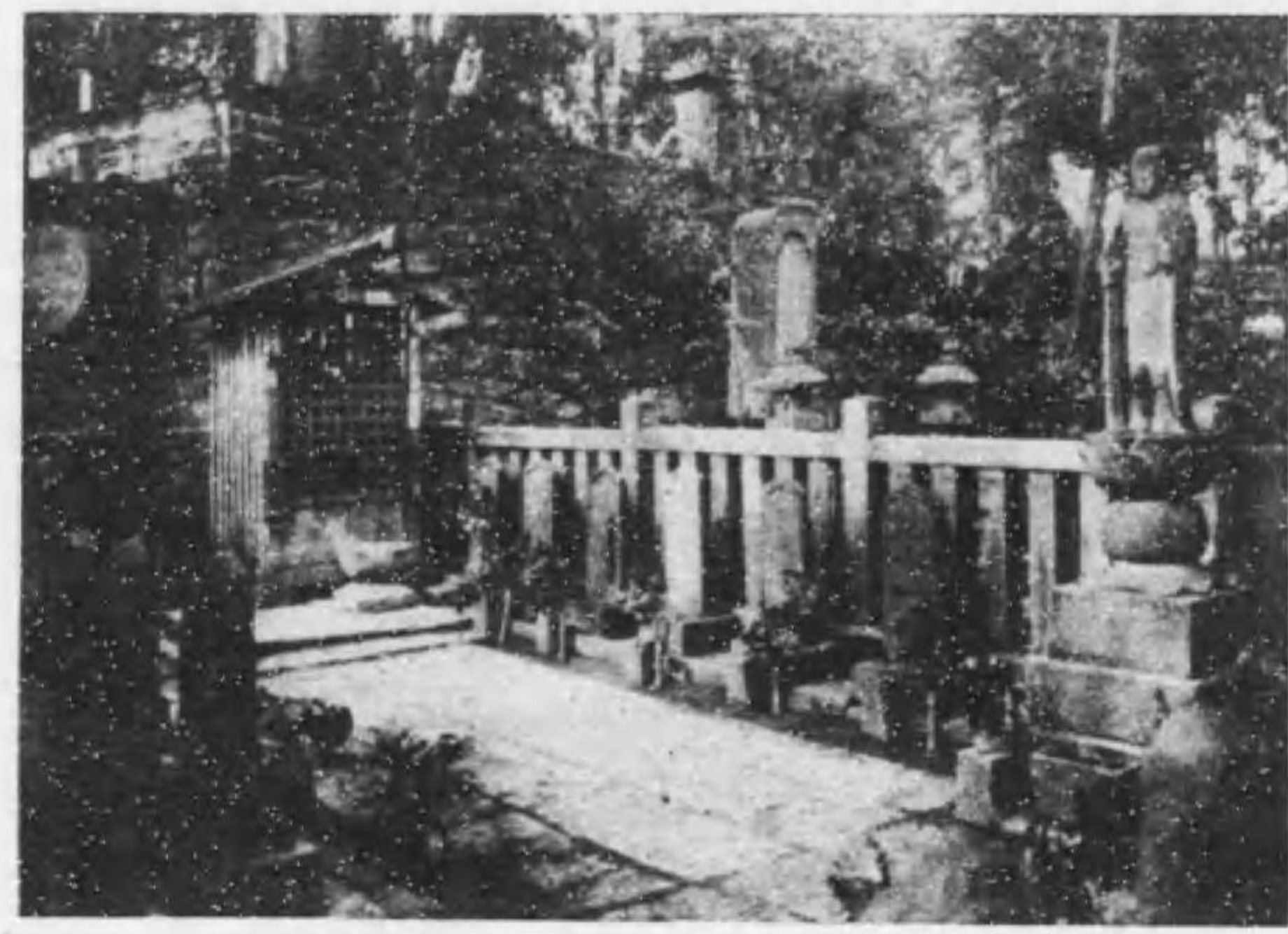
主人長矩は吉良殿に對して刃傷に及びました。定めて吉良殿の御生命を取りたかつたので御座りませう。私共は家來として主人の志を遂げたい爲に、吉良殿の御首級を頂戴いたしましたのみで、外に何の意趣も御座りませぬ。此上は御法の通りに御仕置きを願ひます。

といふのみであつた。彼は尋常の人の到底爲し遂げ難き事を爲し遂げながら少しも之



に誇らず、たゞ身の罪を謝するのみであつた。是れ彼の及ぶべからざる所である。良雄等十七人は細川家へ預けられ、翌年二月に至つて切腹を命ぜられたのであるが、良雄に附いて居た茶坊主が深く彼の徳に懷き、涙を流して別れを惜んだので、良雄はかたみにとて印籠を興へたといふことである。

今日は二百年前と全く時代がちがふから、復讐は罪として考へられて居る。今日の如く一國に統一が行はれて居れば、此の國內で不正なことをした者は或は法律を以て罰せられ、或は社會の制裁を受くべき故に、個人的に復讐をすることは社會の秩序を亂すことになる。しかし封建時代の如き、國內の統一の完全に行はれて居なかつた時には、復讐といふことも眞に止むを得ぬ事なのである。若し復讐も出来なければ、正義を蹂躪せられたまふ、之に對して何の制裁も加へ得ぬやうな場合もある。今日は時勢がちがふから赤穂義士の復讐を學ぶには及ばぬが、其の意氣精神は今後の吾等の共に學ぶべき所のものである。殊に良雄が千辛萬苦して其の志を達しながら、更に之



墓の士義寺岳泉

を得意とするさまの無かつたのは、吾等の仰いで以て範とすべきものである。明治天皇が東京へ御遷りになつた時に、直ちに良雄の墓へ勅使を遣はされ、且優渥なる御沙汰書を賜はつたのは、思召の在る所略ぼ拜察し得べきである。

良雄の子の主税良金は松山藩邸へ預けられたのであるが、切腹の申渡しを受けた時に彼は欣然として拜謝した。而して松山侯の尋ねに應じて、父の良雄が自分に平生教訓した事を語つた。

父は斯う申して居りました。此度の大事は



自分が思ひ立つたのである。此の大事に同意した人々は皆自分と共に死ぬことを誓つたのである。此の人々が死んだならば、その家族や知己朋友はどれ程に歎くであらう。自分が復讐の事を思ひ立つた爲に、斯く多くの人に歎きをかくなるといふ事は、何とも申譯のない次第である。その謝罪の爲には自分は勿論、主税其方も共に潔く死ななければならぬ。父と共に死んで申譯をしてくれよと、父は懇ろに申聞かせました。今日父の教へを空しうせずして死ぬことの出来ませすのは、何よりの悦びで御座ります。

之を聞いて其の座に在る者は皆涙に袖をしぼつたといふ。良雄の此の精神は、乃木大將が旅順に於て大功を樹てながら少しも自ら功とせず、多くの士卒を失つたをこと悔んで、

愧づ我何の顔ありて父老に見えん、凱歌今日幾人か還る。  
と詠じたのと全く同じ境地と思はれる。此の如き精神は眞に武士道の華とも稱すべき

ものである。

但し武士道なるものを獨り武士階級にのみ限られたる道徳と考へてはならぬ。其の



乃木大将

時代に於ては武士が四民の上に立ち、四民を指導すべき地位に在つたから特に徳行をも磨いたのであるが、今日に至つては凡ての人が古の武士の任じた所を以て自ら任じなければならぬ。前にもいつた通り、人の心といふものは久しく安佚の中に在れ

ば腐つて來るもので、其の腐つた風俗を立て直す人は必ず艱難を経た者の中かゝ出る。武士道なるものも元來は多くの武士が艱難を嘗めて力を盡して居る間に、自然發達し



來つたる實踐道徳である。されば是も貴き吾が國民性の發揮に外ならぬものである。古來より武士道に就て説いた人も少くないが、例へば山鹿素行の如きは、士としては道を行ふことを根本とすべしと教へ、

大丈夫といふは是れ士の道に志し、其の志す所をたしかに行ひ勤めたる者の事なり。其の厚く正しき所此の如くにつとめずしては、士の本の立つといふべからざる也。といつて居る。又貝原益軒の『武訓』の中にも、此の本末の關係を心得なければならぬことを懇ろに説いて、

武士の道、内には忠孝義理を以て本として、兵法を知り、外には武藝を習ひ武備乏しからざるを以て助とす。……武藝は匹夫の勇のはたらきなり、其の位に應じて學ぶべし。大人は武藝に專一に心を用ふべからず。藝になづめば道行はれず。と戒めて居る。眞の武士道は武士のみに限られたる道徳でなく、武士によつて率ゐられて日本國民の共に實行すべき道徳であつたのである。

武士の興つたのは、藤原氏一門が榮華を極めた時からである。藤原氏の中にも忠誠の念を以て君に仕へ、民を子としていつくしみ給ふ上の大御心を身に體して、政治に勤めた者も少くなかつた。而して其の相戒め相勵ましたる語の中には、永く後世の訓とすべきものも多くある。或は



東装の鞠職

富み榮へぬれば驕りていつはり多し。(家良)と戒め、或はまた

人として一言も惡を語るべからず、物を損い人を失ふこと多し。(小黒麻呂)と戒め、或は人貧しき時は必ず信ありて、

人の急難を救ひ貧窮の者をたすけ、廢れたるを起し敗れたるを取立つる者は、かな



らず天之を佑く。(經忠)

と教へ、若くは

人間第一の後悔といふは始めを篤くせず終を慎まざるなり。(公任)

と教へ、

人苦みの中に苦みを樂めば苦みなし。貧苦を樂めば貧苦なし。天地の間に物として

樂まずといふ事なし。(通憲)

と教へたのもある。此の如き心を以て常に其心として居たれば永く榮ゆることが出来たのであらうが、あまり久しく得意の時代が続いた爲に心が緩んで、唯だ一家一門の榮華をのみ念とし、君の爲にも國の爲にも、一般人民の爲にも殆んど意を用ゐぬやうになつてしまつた。

斯うなつて最も悲惨な状態に陥つたのは地方の農民である。中央政府の力が殆んど地方に及ばぬ爲に、地方の國可はじめ多くの役人の中には農民を苦しめて私腹を肥す

者が多くなつた。或は國司等の勢力も衰へて山賊や海賊が横行しても、之を如何ともすることの出来ぬ地方もあつた。又時として飢饉とか疫病とか乃至は洪水の害などがあつても、誰も救恤に

力を用ゐる者はない。

此の如き窮地に陥つた

農民等は僅かに武士の

力に頼つて息を吐くこ

とが出来た。武士は身

分の低い者で、はじめ

は藤原氏等の命を受け

て地方の賊を鎮めに行

つたのであるが、次第に農民の間に人望を得、地方に勢力を扶植するやうになつた。



朝服



又農民の子弟の中で見込みのある者を取立て武藝を教へ家來として使ふやうになつた。その家來には親子兄弟共に同じ主人の家に仕へる者も出来て、次第に親みが深くなつた。斯くて歳月を経る間に、地方に於ける武士の勢力は動すことの出来ぬものになつてしまつたのである。而して武士の家の主と家來の關係、又武士の家と其の下に屬する農民の關係は恩愛情誼を以て結ばれ、切らうとしても切ることの出来ぬものになつた。彼等は何れも學問も無く、仁義道德の講釋を聞いた者ではないけれども、共に多くの苦みを嘗め、共に簡易質素なる生活を營み、共に努力して居る間に、自ら相倚り相扶くるの美風が出来た。主と家來は宛ら親子のやうな情を以て頼りあひ、其の家來は「家の子」と呼ばれた。是が即ち武士道なるもの、成立ちである。日本の美しい國民性が都會に混びて、土臭い地方に榮えて來たのである。

武士が次第に勢力を得て終に藤原氏一門に代り、所謂武家政治の時代が來たのは少しも不思議ではない。彼等の間にのみ吾が國民性が保存され、また發達したのである。

から、次第に勢力を得たのは當然である。如何なる國に於ても其の國民性に反するものが久しく勢力を占め得た例は決してない。武家天下の時代は斯くて凡そ七百年も續いて徳川氏の末に至つたのであるが、其間の盛衰興敗を概して打眺めると、武士道の廢れたものが衰へて、武士道を涵養するに力を用ひたものが之に代つて勢力を占めるといふ有様であつたのである。尤も時には不義非道の者が勢力を占めた事もあるが、それは決して久しく榮え得なかつた。北條竹鳳子の「士道心得書」に、

常を治むるを文と云ひて、變を治むるを武と云ふ。さり乍ら武は變にばかり用るものにあらず。變は治中に起るものなれば、常に武を備へざる時は禍亂をなす。故に君として徳を修めず、民を教へず、守護とならざる時は三民流亡す。士として武道を能くせざる時は士も亦遊民なり。

とあるは簡にして能く要を得て居る。此の意を忘れぬものが武士として其の職を盡し、一般國民の指導者となつて居たのである。





徳川時代の武士

一一八  
徳川氏の末に至り天下多事の際を  
美事に切り抜けて、明治維新の大事  
を成し遂げたものは、華奢風流に誇  
つた江戸武士ではなくて、土の臭ひ  
のする田舎武士であつた。即ち簡易  
質素なる生活に甘んじ、心を練り力  
を養ひ、事ある時によく一致して力  
を盡すことの訓練の出来て居たもの  
が、此の大事を成し遂げたのである。  
今日の日本國民が此事を忘れるなら  
ば、國の前途は頗る寒心すべきであ  
る。殊に戒むべきは自己の事に全力

を注ぐことを努めず、たゞ他人に見られて虚名を博せんことをのみ旨とするの習はし  
である。是が國家衰亡の本である。山鹿素行の「自警」の中に、

夙に興き夜に寝ね、父母に事へ子弟に誨へ、親族に睦しくし、僕従を養ひ賓客に接  
し、志士を貴び無能を殆む、行ひて餘力あれば則ち文を學ぶ。各我が志す所なり。  
而るに其の實厚からず、只だ名聞に在るが故に其の爲す所、其の極を致し盡さず。  
是れ我が尤も力を著けて自省すべき所なり。

とあるは今日の吾等に尤も適切なる戒めといはなければならぬ。

余は徒に過ぎ去つた事を繰返すのを好む者ではない。過去を語るは即ち今日以後の  
覺悟を定めんが爲に外ならぬ。昔の武士は國家安危の鍵を握つて居たが、今は武士と  
いふ特別の階級はなく、國民各自の力を集めて此國を守るべき時代である。即ち

國をおもふ道に二つはなかりけり戦の場に立つも立たぬも、  
と明治天皇の仰せられた通りである。殊に今後に於ては國力の充實せられたる國が世



界の競争に勝を制すべき故に、天皇の御製にも

千萬の民のちからを集めてぞ國はゆたかになすべかりける

とある。此の大任は國民の凡ての者が共に身に負ふべきもので、或る階級の人にのみ任せて置くべきでは断じてない。論語の中に曾子が其の志を述べた語がある。

士以て弘毅ならずんばあるべからず、任重くして道遠し。仁以て己が任と爲す、亦た重からずや。死して後に已む、亦た遠からずや。

吾等は共に士たる心を持たなければならぬ。吾が力の限りを盡して國の爲にし、君の爲にし、吾が同胞の爲にするは即ち「仁以て己が任と爲す」ものではないか。斯くて一生を一貫するならば實に「死して後己む」ものではないか。吾等の眼の前には種々の困難があるけれども、吾等の祖先は多くの困難に堪へて此の尊い國を護つて來たのである。其の子孫たる吾等に、此の困難に打克つ力の無い筈はあるまい。吾等はたゞ奮はんのみである。

## 六 愛國心と云ふこと

國民としてその國を愛せぬものはあるまい。しかし其國が愛するだけの價値のない國ならば、強いて愛國心を奨励しても、その効果は殆んど無いであらう。英國の政治家にして且文士たるエドモンド・バークが「吾等をして愛國者たらしめんと欲せば、先づ吾が國が愛すべき國でなければならぬ」といつたのは道理のある語である。吾等は日本といふ、眞に愛するに値する國に生れたことを深く感謝しなければならぬ。今の世の中には多くの不祥の事が續出して居るが、是は人の身體に病氣が起つたやうなものである。此の病氣を醫すべき道を講じさへすれば、元來強い體力をもつた者は、健全なる状態に返ることが必ず出来るのである。今日に於ては日本國民の全體が第一に「自分の國は世界に於て最もすぐれた國である。宛も最も強壯なる體格を有する人の如きものである」といふことを自覺し、第二には「併しながら今は重い病氣に罹つ



て居るのであるから、少しも早く療養に手を盡さなければならぬ』といふことを自覺  
しなればならぬのである。

但し何れの國民でも、自分の國は世界中で殊に優れた國であるといふ自尊心をもつて居ない者はない。しかし事實に基かぬ自尊心は畢竟空想に過ぎぬ。空想に驅られて獨りで得意になつて居る國は、やがて世界競争の中の落伍者となるより外はない。されば偏狹固陋なる愛國心は極めて危険なるものである。自己の長所と短所を知り、其の長所を養つて長せしめ、其の短所を矯め直して中正を得るやうにする者が、眞によく自己の國を愛するものといふべきである。たとへ一時は榮え驕つて居ても、國民の反省力が足らずして、久しからぬ内に滅亡したる國の例は夥しくある。亞弗利加に旅行する人は彼のピラミッドが夕陽を受けて高く聳えて居るのを見て、感慨を催さぬはないといふ。むかし埃及の王が數萬の人の力を集めて此のピラミッドを建てた時には、自分の國も此の建物と共に永遠に榮ゆるであらうと信じて居たにちがひ無い。然るに



ピラミッドの景

其の國は疾くに亡びてしまつて、ピラミッドのみは昔ながらの日影を受けて聳えて居る。又昭憲皇太后の御歌に

永き世の末までのこる石垣にかけ、む民の力をぞ思ふ

とあるのは支那の萬里の長城を詠ませられたものと思はれるが、あの長城が成ると間もなく秦は亡びた。爾來興亡盛衰は幾循環したが、長城のみ依然として残つて居る。

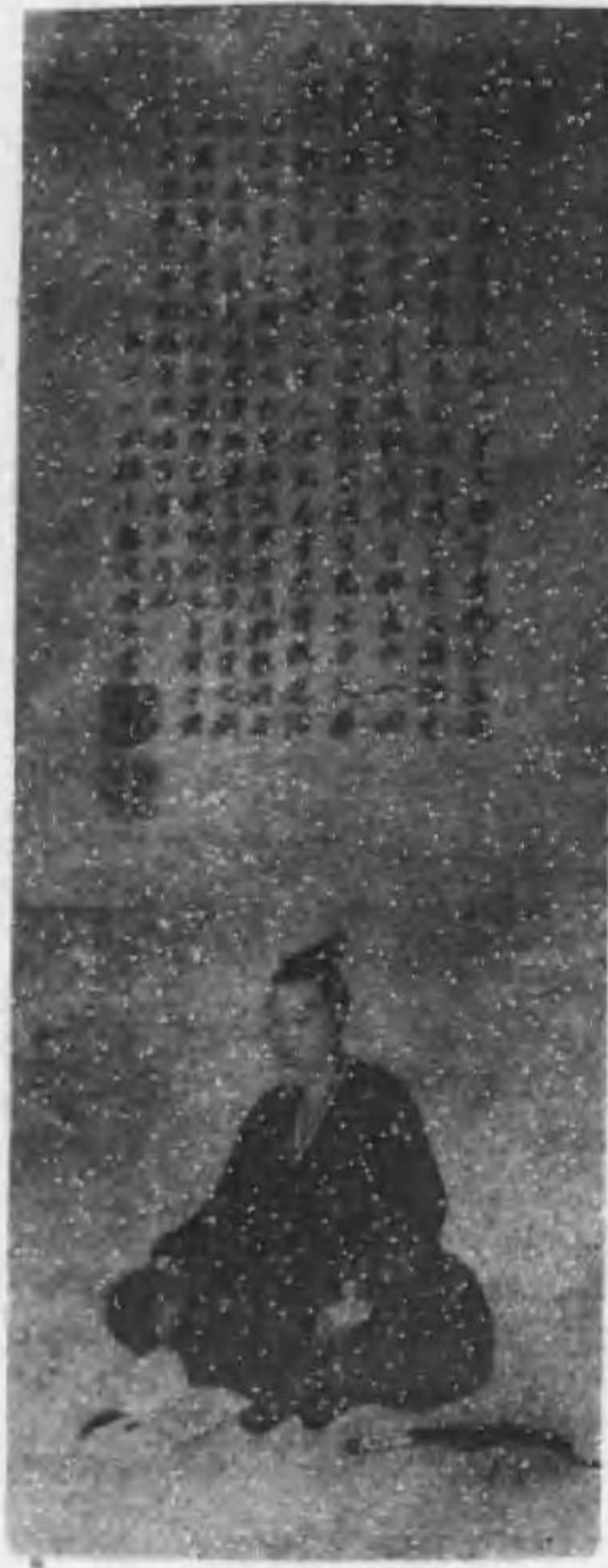
此等の事實を吾等は餘所事と思つてはならぬ。鐵筋コンクリートの家はかり多く立て並べて、それで一等國の體面が保てるものと思ふな



らば、それは大なる間違ひである。能く自己の生れた國の國民性を理解して、之を健全に開發せしむることに努めなければ、國の實力が次第に衰へて、華麗なる都會なぞを持つて餘す時が來ぬともいはれまい。外形の整ふのも望ましい事ではあるが、それは精神の充實して後のことである。彼の吉田松陰の松下村塾は今でも保存されてあるが、まことに見姿らしい建物である。彼の門人は僅か疊七八枚しか敷けぬ一室に、推しあつて坐りながら、松陰の講義を聞いたものである。其の同じ時に江戸の湯島には徳川幕府の直屬の學校があつて、之を聖堂と呼んで居た。其の建築の宏莊なる、その設備の整頓せる、彼の松下村塾とは雲泥の差であつた。けれども此の聖堂と彼の松下村塾の周圍に與へた感化、後世に及ぼした影響を比べて見ると、その外形に反比例すともいふべきである。吾等は互ひに深く此邊に心を致さなければならぬ。

日本の國體を知り、日本人の愛國心とは如何なるものなるかを知る爲に、余は茲に愛國なる語の起りに就ての一條の美談を語りたと思ふ。實をいふと、余輩の青年時

代には、萬事西洋の模倣ばかりして居たので、此の「愛國」といふ語も、英語か佛語の翻譯であらうと思つて過ぎたのである。其後に至り國史を調べて見て、愛國なる語が正しく國史の上に載つて居るのを知り、自分の淺はかであつたのを深く耻ぢ入つた次第である。此の「愛國」なる語は持統天皇の詔の中に



吉田松陰

出て居る。此の詔に就て語る爲に、それより三十年の昔に遡らなければならぬ。

前にもいつた通り吾が推古天皇の御宇に隋と交通があつたのであるが、此の御宇の末には隋が既に亡びて唐の代となつて居た。唐が盛んになつて其の勢力が四方に伸びるやうになると、其の隣國の朝鮮はどうしても壓迫を受けることを免れぬ。隨て朝鮮



に於て唐と吾が國との衝突の起つたのも亦た己むを得ぬ事である。之が爲に帝明天皇は中大兄皇子と共に九州へ行幸になり、筑紫の朝倉宮に御止りになつた。其際に中大兄皇子の御詠みになつた歌に、

朝倉や木の丸殿に我が居れば名乗りをしつゝ行くは誰が子ぞ

といふのがある。木の丸殿といへば至て質素なる御所のさまが想像される。その御所の前を通る者が一々御挨拶をして行くのを、御所の中から御覧になつて「彼は何れの家の子であるか」と御尋ねになるさまである。此の君臣の間が宛も父子の如き情を以て結ばれて居るさまは、吾等日本國民の世界に對して誇るべき事と申すべきであらう。

斯くて齊明天皇は朝倉宮に在らせらるゝ間に崩御になつたので、中大兄皇子が帝位を嗣がせられた。即ち天智天皇である。天智天皇の第二年八月に至り愈々日本の水軍と唐の水軍とが朝鮮の白村江に於て開戦した。彼の水軍は充分に訓練の届いて居たも



筑前海岸の風景

のであるから、吾が軍は非常なる敗を取つた。日本書紀には、此時水に溺れて死んだ者が多かつた爲に船を廻らすことが出来なかつたと書いてある。此の敗軍の時に當つて、日本國民の最も美しい特性が發揮されたのである。此時筑紫國から出た軍丁に大伴部博麻といふ者があつた。彼は學問も教育もない一士民で、徵發されて軍に加はつた者に過ぎぬ。此の博麻は捕虜となつて唐の都なる長安に連れて行かれた。其時長安に於ては士師連富杼、氷連老等凡て四人が囚はれの身となつて居た。此の四人は兼て吾が國から派遣せられて



唐へ行つて居た者であるが、國交斷絶となつたので囚はれたものである。博麻は折々此の四人に逢つて慰めあつて居た。然るに暫くすると、唐で大軍を起して日本を討つといふ計畫があるとの噂が彼等の耳に入つた。「それは大變である。若し吾が本國に於て此事を知らずに、充分の防備が出来て居なければ大敗するに極つて居る。何とかして一日も早く此事を本國へ知らせたいものである」と五人頭を集めて相談した。

此の五人の中の一人でも二人でも、何とかして身を脱して日本へ歸るより外に道はないのであるが、それには先立つものは金である。

今の身では何とも致し方がない。如何に思案して見ても金を得べき道はない。と土師連等は頻りに歎息した。博麻は之を聞いて、

金さへあれば道が立ちますか。

と意氣込んで尋ねた。土師連の考へによれば、金さへあれば國へ歸る方法は立つのである。番人に賄賂をやつて脱れ出ることも出来る。脱れ出た上は姿を商人にでもかへ



朝鮮南方海邊の景

て船に乗り込み、本國へ歸ることも出来るのである。博麻は之を聞いて、

それでは其の金を私がこしらへませう。

と勇ましくいつた。其頃唐には奴隸の制度が存して居た。身を奴隸に賣れば相當の金は得られるのである。博麻は自ら奴隸となつて、金をこしらへる決心をしたのである。彼は慨然としていつた。

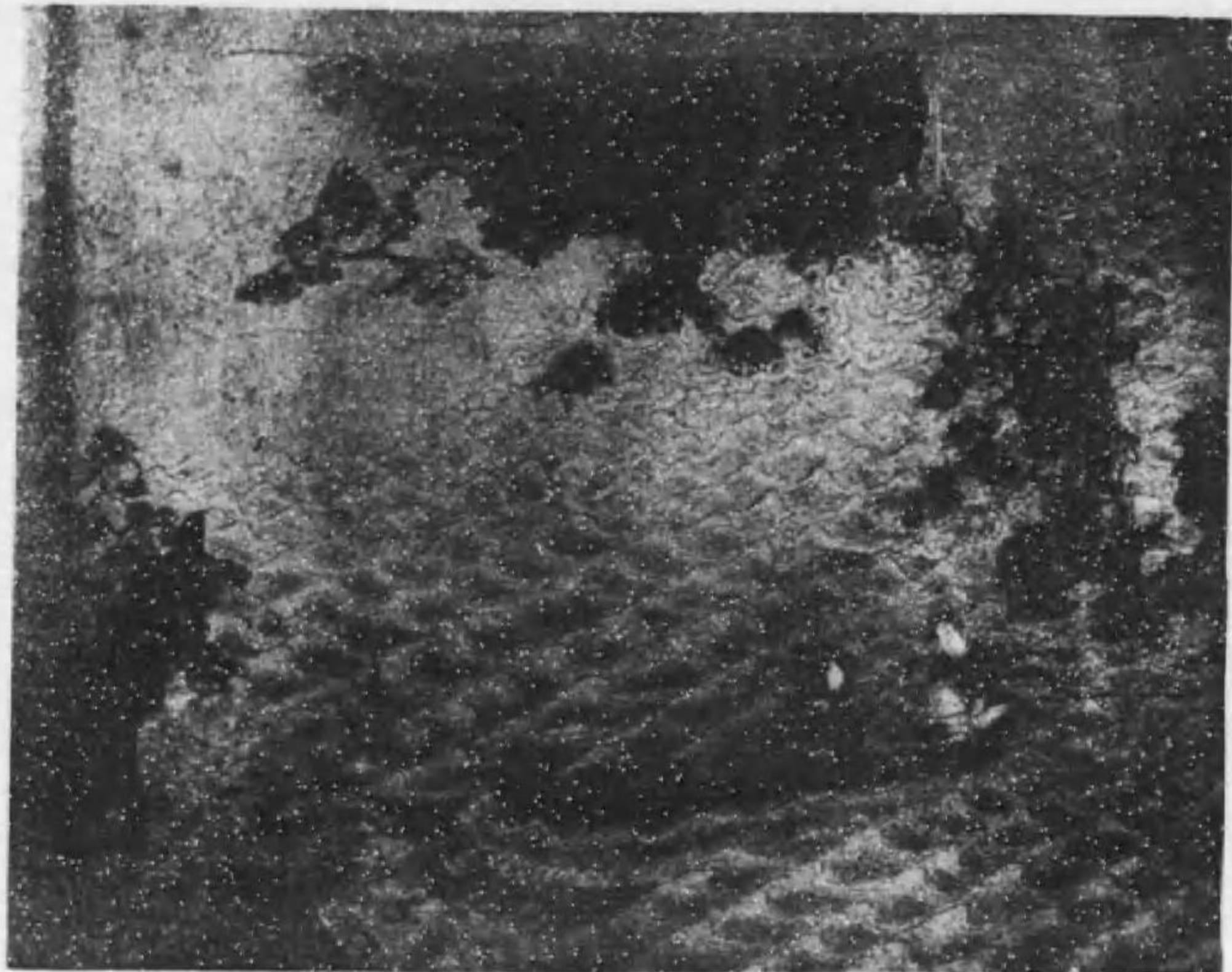
私は微賤の者では御坐りますが、皇國の御恩は知つて居ります。今度こそは私の身を以て御恩に報すべき時が來ました。私の身を賣つた金が御役に立つて、此の大事を朝



廷へ御知らせ申すことが出来さへすれば、たとへ私は生涯を他國で終つても、本望で御坐ります。生きて居ても用に立たぬ身が皇國の御役に立つなら、斯んな有難いことは御坐りませぬ。

彼の健氣なる決心には人々何れも感激して何とも答へやうもなかつた。

博麻は其の言葉を違へず、身を賣つた金を彼の四人の所へ届けた。凡ては計畫通りに運んで四人は無事に日本へ歸ることが出来た。天智天皇は彼等の奏する所に基いて、速かに防備を整ふべきことを命じたまひ、將士等は前の敗軍の名譽を回復すべく意氣込んで居たのであるが、唐でも吾が國の侮るべからざるを知つたと見えて來襲の計畫は止めになつた。博麻は四人に別れてから唯一人で寂しく唐に止まり、生涯を奴隸として終る覺悟であつた。斯くして三十年の間彼の地に住み、年老い身衰へてから其の主人の情によつて國へ歸ることを許された。三十年振りで故郷へ歸つて見ると、何もかも皆變つて居る。彼の浦島の子が龍宮から歸つた時の感にも似た有様で、嬉しいと



浦島太郎の圖

も悲しいとも自ら思ひ別き難くして、茫然と日を送つて居た。然るに此事が筑紫の國司の知る所となり、國司よりして時に朝廷へ奏上した。此時は既に持統天皇の御宇である。持統天皇は即ち天智天皇の第二女である。天皇は深く博麻の忠烈の行ひに感じたまひ、特に之に位を賜ひ、又種々の賞賜もあり、水田四町は之を子孫に傳へしめよとの御沙汰があつた。其上に最も優渥なる詔を博麻に下された。天皇よりして一の微賤の民へ直接に詔を下された



のは真に例の無いことである。其の詔は漢文で百八十字程の頗る長いもので、以上の事實を委しく述べられ、その末に

朕その朝を尊び國を愛し、己を賣りて忠を顯せることを嘉す。

とある。是れ實に吾が國史の上に「愛國」といふ二字の見えたる始めである。

所謂「國體の精華」は此處に在る。地位もなく身分もなく、教育も學問もない博麻は、國恩の重いことを知つて居た。而して國恩に報ずる爲には自ら進んで其身を奴隸に賣り、唯一人異國に三十年の歲月を送つた。而して其事の天聽に達するに及んでは、天皇よりして此の如き微賤の民に對して優渥なる詔を賜はり、その愛國心を嘉賞せられた。此の如き君臣の關係は決して吾が日本以外の國に於て見るを得べからざる所である。日本國民は此國を以て「吾が天皇の國」であると考ふると共に「吾が國」であると考え、考へて來たので、君に盡すと國に盡すとは全く同意義である。國君を殺戮して愛國心を全ふしたといふやうな國の人には、此の日本の國體は到底分らぬのである。此の如

き國にして始めて忠と孝とが同意義になるので、



持統天皇

人君は民を養ひて以て祖業を續ぎ、臣民は君に忠にして以て父の志を繼ぐ、君臣一體にして忠孝一致なるは、唯だ吾が國を然りと爲す。(士規七則の第二)と吉田松陰のいつたのは、よく之を悉して居



此の君臣一體、忠孝一致の理想を全く遺憾なく實現して、國の爲に力を盡したる模範として、楠氏一家を擧ぐることは、誰にも異議のない所であらうが、『太平記』に出たる、楠木正行が四條畷に出陣するに先ち、吉野の皇居へ參つて奏聞したる所は、幾度讀み返して見ても新なる感激を覺える。

父正成庇弱の身を以て大敵の威を倅き、先朝の宸襟を休め進せ候ひし後、天下程なく亂れて逆臣西國より攻上り候間、危きを見て命を致す所、兼て思ひ定め候ひける歟によつて、遂に攝州淡河にして討死仕り候ひ了ぬ。其時正行十三歳に罷成り候ひしを、合戦の場へは伴はで河内へ歸し、死残り候はんする一族を扶持し、朝敵を亡し君を御代に即け進せよと申置きて死して候。然るに正行正時己に壯年に及び候ひぬ。此度我と手を倅き合戦仕り候はずは、且は亡父の申し、遺言に違ひ、且は武略の云ふ甲斐なき誇りに落つべく覺え候。有待の身思ふに任せぬ習にて、病に侵され早世仕る事候ひなば、唯君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不孝の



(吉野の國) 如意輪堂

子となるべきに候間、今度師直師泰にかけ合ひ、身命を盡し合戦仕りて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候か、正行正時が首を彼等に取られ候か、其二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顔を拜し奉らん爲に參内仕て候。

時に治亂あり世に盛衰はあるが、此の正行の心を以て心と爲す者こそ、眞に此國を托するに足るべき者と稱すべきである。

吾等の祖先は何れも君のためと、國のためとを同じ意義に解して、忠誠の心を盡したのであるが、封建制度が久しく續き、且又外國からの刺激が全



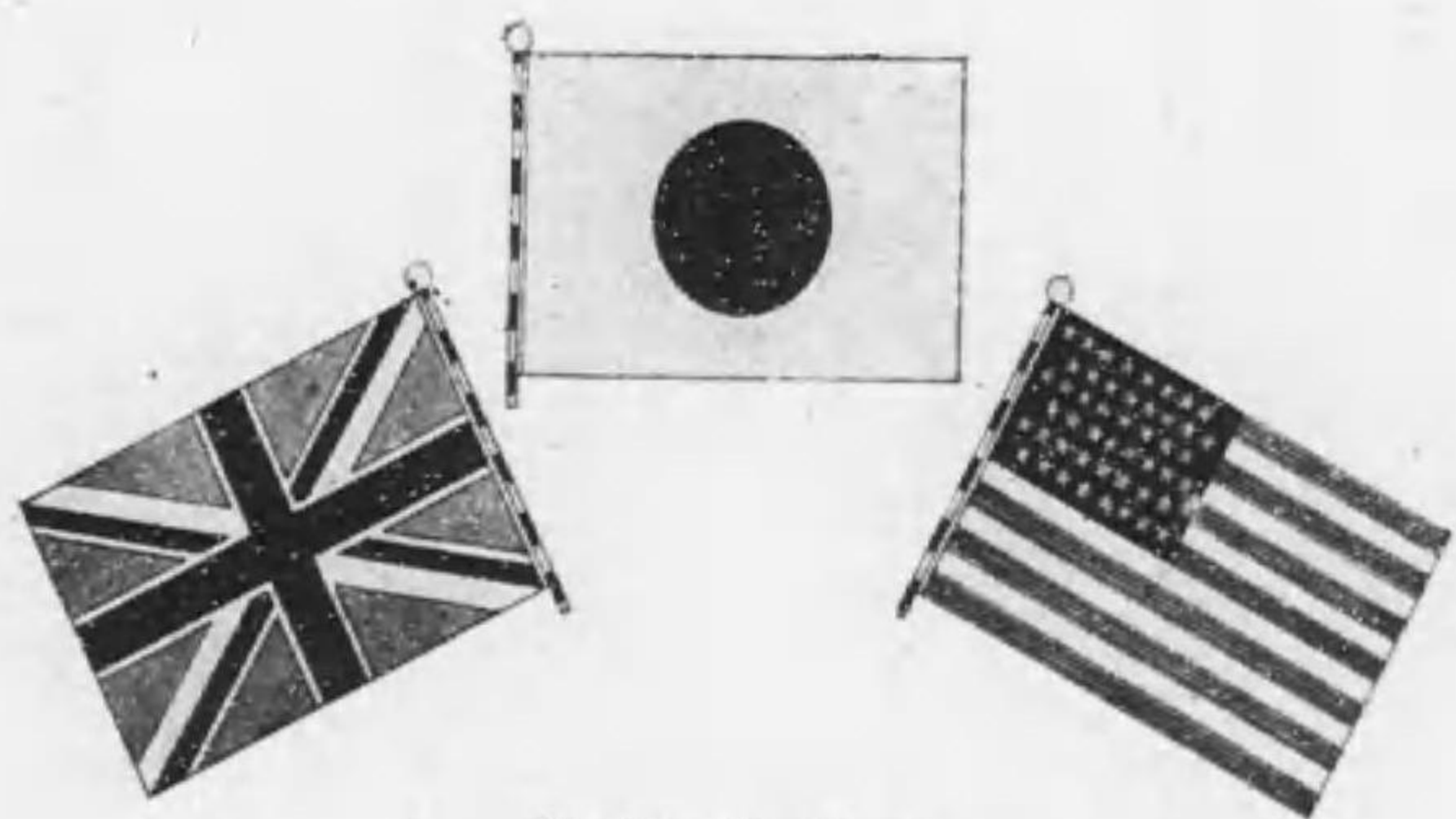
く無くなり、また直接に皇室の御模様が庶民一般に知れ渡らぬやうになつた爲に、愛國といふ觀念が暫くの間はやゝ弱くなつて居た観がある。是は返す返すも遺憾の至であつた。今や幸にして吾等一般が皇室の御模様の委しく承る機會も屢々與へられ、又上の有難い思召も折にふれては傳へられるやうになつて居る。吾等は共に限りなく尊い大御心を身に體して國の爲に力を盡さなければならぬ。惟ふに明治天皇の鴻業は大正の聖代に於て大成せられなければならぬ。今上陛下御踐祚の式を擧げさせらるゝに當り、

有司須らく先帝に盡したる所を以て朕に事へ、臣民亦和衷協同して忠誠を致すべし。

と仰せられ、又御即位の式に際しての勅語には、

祖宗の神靈照鑑上に在り、朕夙夜兢業天職を全くせむことを期す。

とある。吾等は共に力を協せて此の聖旨に副ひ奉らんことを期せなければならぬ。



日 英 米 國 旗

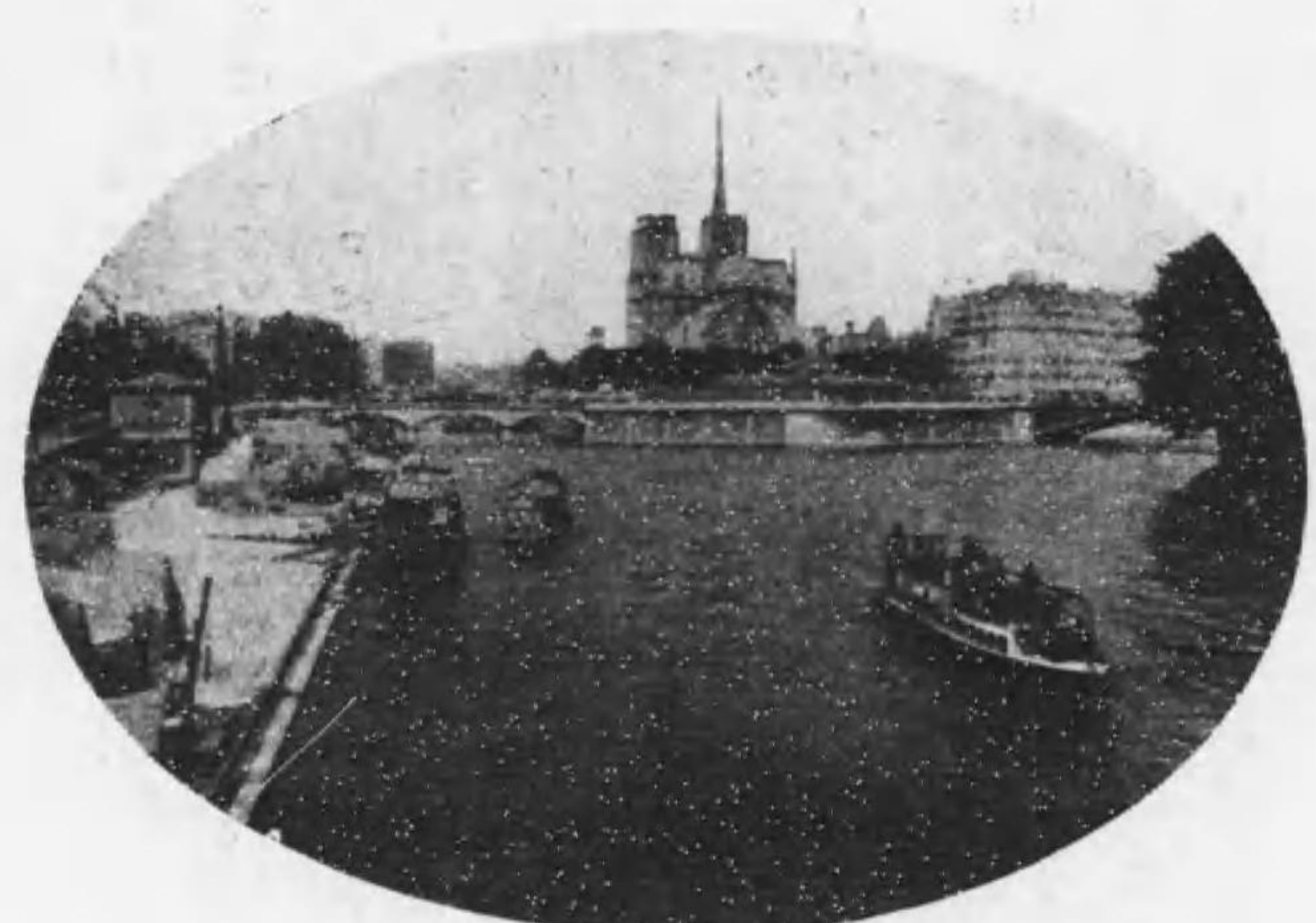
歐洲大戰以後に於て、各國共に大に覺醒し、何れも國民的協力一致の必要を痛感して、種々なる方法を用ひて愛國心を鼓舞するに努めて居る。然るに各國共に吾が皇室の如く、眞に國民の思想を統一する中心となるべきものが無い爲に、或は其の國民の特色に就て力説するとか、或は國旗を中心として愛國心の涵養を謀るとか、いろ／＼に苦心して居る有様である。米國などでは活動寫眞の終りにも、國旗をフィルムの上に現はして、人々に米國民たる自覺を興へやうと努めて居るとの事である。その中に在つて吾が日本國民は何の幸か、此の尊い皇室を上に戴き、國民思想が自ら統一せらるべき本性を具へて居るのである。各自に此の



如き國に生れた者の幸福を自覺するならば、世上に幾多の不祥の出來事があつても、やがて一掃せらるべきは疑ふに及ばぬことである。

### 七 民が本か君が本か

國は君と民とより成るものであるが、君を以て本とすべきであるか。但しは民を以て本とすべきであるか。佛國のルキ十四世が「朕は佛國なり」といつたのは有名な話である。是は國君自ら「君が本である」と宣言したものである。又獨逸のフレデリック大王が「朕は國民の公僕なり」といつたのも有名であるが、是は「民が本である」といふことを國君が明言したる例である。斯く兩極端の例はあるが、彼等の國々に於ては、前にもいふ通り元來國民の心が元になつて君主といふものが出來たので、君主は畢竟其國の發展を圖る必要上作り出されたものに過ぎぬから、民を本とするのが本義に相違ない。自ら「君が本である」と宣言したルキ十四世は非凡の人物であつた爲に、其の勢



佛國巴黎の景

力を維持することが出來たけれども二代後のルキ十六世の時に至り大革命が起り王は無殘にも死刑に處せられた。民が本であるといふことは、理論として歐洲の何れの國に於ても認められて居る。それにも拘はらず、國王や貴族などが兎角其の勢力を濫用して勝手なことをする。そこで之に反抗して「自由を與へよ」といふ叫びが上り、革命となるのである。吾が國の君臣の關係の如き情誼が無いのであるから、勢力を得ると共に、我儘な事をするやうになるのも亦た己む



を得ぬ次第であらう。其の我儘な者を排斥しやうとして起つた者も、自分が勢力を得るに随つて又我儘をやるのである。其の最も露骨なる實例は佛蘭西革命に於て見られる。彼のロベスピエールやマラー等は皆佛國民の自由の爲と稱して革命を起したのである。然るに後日に至りマラーは一少女の爲に殺された。それは彼が勢力を得て後餘りに構暴の事が多かつた爲に、此の少女は同じく佛國民の「自由の爲に」と稱して彼を殺したのである。ローラン夫人が暴徒の手によつて處刑せらるゝ時に天を仰いで、

オ、自由よ。汝の名によつて行はるゝ罪惡のいかに多きや。

といつたのは最も悲痛なる、而も最も眞實なる語である。

吾が國に於ても歴代の聖帝は皆民のために御心を盡させられたのであるが、それは歐洲諸國の帝王が民を以て本とするといふ思想と決して同一でない。彼の諸帝王は民の力によつて立つものであるが故に、若し民を本として物事を處理しなければ其の地位を失ふのである。吾が國の天皇は如何なる場合に於ても天皇たることを失はせらる

ゝ事はないが、常に民を以て子としたまふが故に、親の子の爲に心を碎くが如くに御心を勞せらるゝのである。「日本實訓」といふ書には諸天皇の勅を載せてあるが、天智天皇は

朕常に萬人の爲に心を苦め、よむ言葉の末までも皆苦みの萬人を思ふ外なし。國の父母として何ぞ國土の子を思はざるべき。子として父母の教に違ふことなかれ。

とある。前に出した仁徳天皇の仰せに「民を以て本と爲す」とあるも、畢竟同じ御心より出たるものと察せらるゝのである。又嵯峨天皇の勅に、

朕より後の人主に示すなり。國土の邪氣の者を罪せんより、萬人の貧しきことを計らひて苦みを救へ。惡人は消へうせなん。もろくの人の惡きふるまひをなすはあまねく今日を送りかねたるより起るなり。國家に惡人として源なく、たゞ天地の養を

して空しく世を渡るにあるものなり。愚かにいやしき者の直き心のなきは道理なり。直かるべき人主の直からぬなるべし。



とあるは、聖天子の海山の如き御心を遺憾なく現はされたものと申すべきである。此の御心は歴代の天皇の御心である。斯る洪大なる御心の下に育せられたる臣民等が、皇室に對して決して二心なく、此の美はしき二千數百年の歴史を成したのも不思議ではない。

國民は一つ心に守りけり遠つみおやの神の教へを  
と明治天皇は御詠みになつたが、子たる臣民の忠實なるは親たる皇室の御徳の然らしむるものに外ならぬのである。

米國初代の大統領ワシントンの如きは才も徳も共に具はつた人で、米國民の父として永く仰ぎ慕はれて居る。彼は其の最期の時に、

吾が生涯をかへりみて多く悔ゆる所無きを神に謝す。

といつて居る通り、眞に清らかなる一生であつたと思はれる。しかし彼が大統領の任に在つた間には随分反對の意見を有する者もあり、可なり辛辣なる非難攻撃を加へ



米國大統領白宮

た者もあつた様子である。彼の親友なるフランクリンが歐洲大陸漫遊中にワシントンへ送つた書面には、暫く煩はしい米國を去つて、大陸へ漫遊に來ては如何であるかと懇ろに勸めて居る。以て其當時のワシントンの境遇を想像すべきである。此の如きは畢竟國體の差異によるものであらう。ワシントンが如何に立派な人物でも「國を肇むること宏遠に徳を樹つること深厚なる」吾が皇室とは到底比すべくもない。されば其の生前に於て反對者を持つて居たのも亦た已むを得ぬ所であらう。支那の如きも古來から随分名君が出て居



る。又名君の出た時には、人民もよく之に歸服して居たやうである。しかし吾が國の如くに君臣の心の相照し相許したる國ではないから、君たる者は民心を失はんことを恐れて、常に戒めて居るのである。昔の聖天子といはれた舜の言つた事にも、愛す可きは君にあらすや、畏る可きは民にあらすや。衆は元后に非んば何をか戴かん。后は衆に非ずんば與に邦を守るなからん。

とある。斯く民心を收攬することに心を勞すると共に、帝王としての品位を保つのに種々なる苦心があつた。天子と雖も元は匹夫から成り上つたものがあるから、此の如き者は威儀體裁を整へて侮りを防ぐ必要もあるわけである。漢の高祖は民間から起つて秦を亡ぼし楚に勝つて天子となつたのであるが、其の臣下といふ者も元は同輩であつた者であるから、頗る無作法で、君臣の禮などを守らぬ輩も少くなかつた。因て崩通といふ臣の説に従ひ、大に宮殿を作り、禮儀を定めて盛なる朝賀の式を行つた。その時に高祖は、



支 那 宮 殿

吾乃ち今日にして皇帝たるの貴きことを知る。

といつて喜んだと傳へられる。宮殿が出来て初めて皇帝たるの貴き事を知つたとは、實に氣の毒な次第ではないか。前にいつた仁徳天皇の御所が崩れても修繕をなさらなかつた事と比べ合せて、いかに彼我國體の相異なるかを知るべきである。

吾が國に於ては、庶民は皆天皇の愛子である。されば國政に與るものは皆此事を以て念とし、天皇の愛子を損はぬことを第一の務めとしなければならぬ。聖徳太子の憲



法の中に、

君は則ち之を天とし、臣は則ち之を地とす。天覆ひ地載せ、四時順行し萬氣通ずるを得。地にして天を覆さんと欲すれば則ち壞るゝを致さんのみ。

とあるが、又それと同時に、

國司國造は百姓を斂する勿れ。國に二君なく民に兩主無し。率士の兆民は王を以て主と爲す。任ずる所の官司は皆是れ王臣なり。何ぞ敢て公の與に百姓に賦斂せんと戒めてある。斂するとは重い負擔をかけることである。君のためを思ふならば、人民を苦めぬやうにしなければならぬとの戒めである。

聖德太子の此の御精神は、其の御一族にもよく行き渡つて居たものと思はれる。太子の御子たる山背大兄王の御最期は最も壯烈なるものであつて、太子の御家訓の如何に深いものであつたかを證すべきである。彼の蘇我氏の一族は久しく政權を擅にして我儘を働いて居たが、聖德太子が攝政となつて居たまふ間は流石に恐れ憚つて、專

横な事は殆んどしなかつた。之によつて彼等は心竊かに太子に對して怨みを懷きながら如何ともすることが出来なかつた。されば太子の薨去になつた後に至り、急に其の



大和生駒山附近の景

御遺族に對して種々なる壓迫を加へ、終に太子薨去後二十一年を経たる皇極天皇二年に至り、蘇我入鹿は兵を發して、山背大兄王を攻めた。王は暫く膽駒山の中に隠れて居られたが、其時に臣下の者が「暫く東國へ赴いて御身を隠され、兵を興して蘇

我の者共を御討ちになつたならば、必ず勝利を得させられませう。私共が此處へ殘つて死にませうから、君には御逃れになるやうに」と御勸め申した。其時の王の御答へ



は、

一身の故を以て豈に煩はしく萬民を勞せんや。又後世に於て、民の吾が故に由りて己が父母を喪へりと言ふを欲せず。豈に其れ戦勝て後、方に丈夫といはんや。夫れ身を捐て國を固くせんも亦た丈夫なる者にあらずや。

とある。戦つて勝つばかりが男ではない、一身をすて、國の爲にするのが眞の男だとの御言葉は眞に貴いものである。斯くして王は御一族と共に山を下つて班鳩寺に入られた。入鹿の兵は直ちに之を圍んだ。王は入鹿の陣に使を遣はされて、

吾兵を起して入鹿を伐たば其の勝たんこと定まれり。然れども一身の故によりて百姓を傷殘せんことを欲せず。是を以て吾が一身を入鹿に賜ふなり。

と仰せられ、御一族と共に縊れて死なれたのである。

王の此の最期の御言葉には民を憐まるゝ最も深い御仁慈の情が籠つて居ると共に、又蘇我氏一門の不正不義の行ひを決して赦さぬといふ凜乎たる意氣も現はれて居る。

斯くして聖徳太子の御家は亡びたのであるが、之によつて蘇我氏の横暴は愈々明に天下に知られ、其の滅亡の期を早めた。此より二年の後に至り、中大兄皇子は鎌足と謀つて入鹿を大極殿に誅せられ、蘇我氏はこゝに亡びたのである。山背大兄王子の御最期は間接に蘇我氏を亡す力となつたもので、即ち國の爲に禍の本を絶たれたのである。「身を捐て國を固くせんも亦た丈夫なる者にあらずや」の一語は、空しからずと申すべきである。

此等の例によつても明なる如く、民をいたはるといふ事が天皇を始め奉り、皇族方に於ては何れも第一に肝要な義と御考へになつてあらせられたから、民も亦た如何なる艱難の中に於ても、背くに忍びぬといふ至情を以て上に對し來つたのである。歴史を按ずるに、國歩艱難の時に於て、却て聖恩の辱さに感泣すべき出来事が多いやうである。後花園天皇の御時には、天變地天が打續いた上に諸國に戦亂多く、庶民の家を失ひて流浪するもの多く、京都だけでも一日に餓死する者が七八百人に及んだとい



一五〇  
ふ。然るに將軍足利義政は平氣で驕りを極めて居た。時に天皇は一首の詩を詠じて義政に賜はり、その反省を促された。

殘民争ひ採る首陽の微。處々に廬を閉ちて竹扉を鎖す。詩興寒酸す春二月。滿城の紅綠誰が爲にか肥えたる。

之を見て流石の義政も暫くは贅澤な生活をやめたといふ事である。

此より打續いて内亂が甚しくなり、御所の修繕等も全く行はれず、垣なども盡く破れて内侍所の燈の光りを三條の橋の上から拜し得るまでになつた。それから神仙苑も耕作地となり、紫宸殿の前に市人が茶店を出して居たことさへあつた。此の如き時に際しても天皇は常に民の艱苦をのみ御思ひになつたものと見え、後柏原院の御製には、

あぢきなく世を思ふ故の言の葉は及ばぬものゝおなじ心を  
おさめ知る我が世いかにと浪風の八十島かけて行く心かな



京 都 御 所

とある。まことに畏き次第と申さなければならぬ。又天文九年といへば、毛利元就や武田信玄の活動し始めた頃であるが、此年諸國に疫病が大に流行して、死する者が夥しかつたので、後奈良天皇は醍醐の義堯大僧正に命じて五日の間災難を攘ふ爲の修法を行はせ、御自ら般若心經を書寫せられた。その奥書に

今茲天下大に疫し萬民多く死亡す。朕民の父母と爲りて徳覆ふこと能はず、甚だ自ら痛む。云々とある。時勢には盛衰治亂の變があつても、大御心の有難さは斯く一貫して變る所がないのである。日の光りは至て明なものであるが時には雲に蔽



はるゝを免れぬ。しかし雲が如何に懸つても日の光りを失はしむることは出来ず、雲が霽れて後は元の通りの光りを仰ぐのである。吾が國の歴史の上にも治亂の變は免れぬ所で、時としては専横なる者が上下の間を隔てたこともある。けれども此の如きは一時の曇りに過ぎず、日の光りには變化がないのである。南朝の忠臣たる北畠親房卿の著した『神皇正統記』の劈頭に、

大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我國のみ此事あり、異朝には其類なし。

とあるは動すべからざる言である。而して親房卿は此書の末段に於て、神は人を安くするを本誓とす。天下の萬民は皆神物なり。君は尊くましますと、一人を樂しましめ萬民を苦しむる事は天許さず、神もさいはひせぬいはれなれば、政の可否に隨ひて御運の通塞あるべしとぞ覺え侍る。と論じて居る。天下の民を皆神物として愛育したまへるもの、實に歴代の御心である。



北畠親房筆蹟

る。

明治天皇の御聖徳は誰も共に仰ぐ所であるが、陛下には絶えず國事に御心を勞せられて、名所舊跡等の御遊覧の暇とてもなく、

年々に思ひやれども山水をくみて遊ばむ夏なかりけり

との御製もある程である。斯く御暇もない間に於ても常に下民の勞を思ひやらせられて、同じく夏の日の御製に、

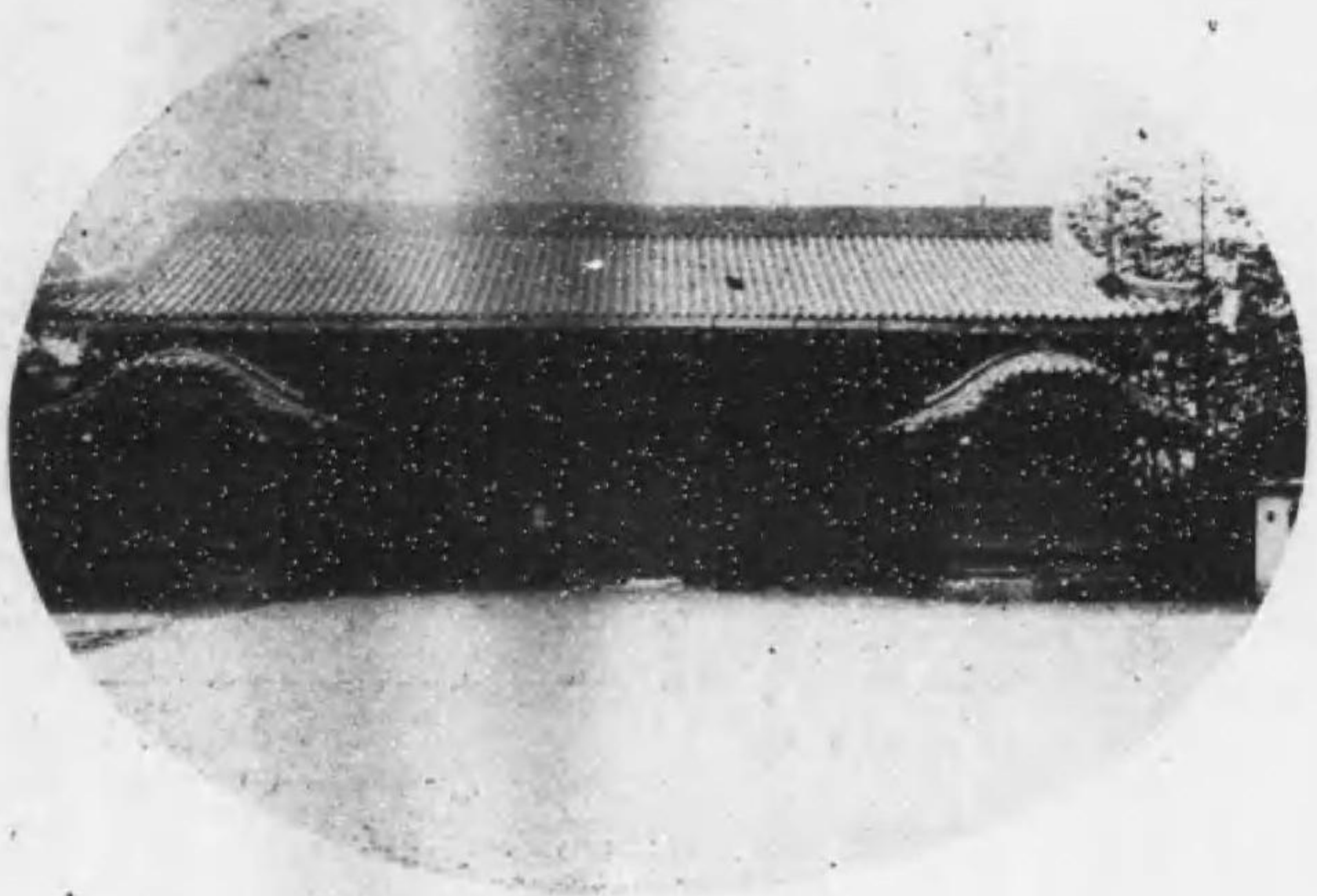
あつしともいはれざりけりにゑかへる水田に立てる賤をおもへば

と申すのがある。又誰もよく知る所の



罪あらば我をとがめよ天つ神民はわが身のうめる子なれば  
と申す御製は、彼の大逆事件の起つた際に詠ませられたと承つて居る。彼の大逆の  
徒をも咎めたまはず、却て我を罪せよと、祖宗の神靈に對して仰せられたと承つて  
は、たゞ感泣の外はない次第である。

猶ほ承る所によれば、高輪御殿に姫宮様方が入らせられた頃の事であるが、或時  
御傳の佐々木高行伯に向つて「いつ參内をしても父陛下から打解けた御優しい御言葉  
を伺つたことはない。これが何より寂しい」と仰せられた。佐々木伯は之を承つて  
大に心を悩ました。御年の若い姫宮様としてはまことに御尤の御言葉であるが、左様  
の事を自分から差出て兎や角申上ぐるのも如何であらうか。彼此と思案した末に、佐  
佐木伯は「たとへ御叱りを受けやうとも、自分から陛下に御願ひをして見やう」と決  
心した。さうして他日陛下に拜謁した時に「何卒姫宮様方へ少しなりとも御優しい御  
言葉を賜はりまするやうに」と恐縮しながら申上げた。陛下は暫く御言葉もなかつた



高 輪 御 殿

が、やがて嚴かに

自分は日本國民を皆吾が子として居る  
身である。生の子にはかり左様の事は  
出来ぬ。是のみは許せよ。

と仰せられた。佐々木伯は此の洪大なる  
聖慮に對して何と申上ぐべきかを知ら  
ず、唯だ感涙を掩うて退出したといふこ  
とである。

此の如き陛下を上にかいたる吾等日本  
國民は實に幸福なものではないか。陛下  
の此の御心は今上陛下より攝政宮へと、  
全く御同様に傳はり、なほ御位を嗣ぎた



まふ將來の御歴代の陛下へ限りなく傳はるものと拜察する。此の如き皇室を上に戴く國が隆興せぬ筈は決してない。若し此國に衰運が來るならば、それは斯る聖意に副ひ奉ることの出來ぬ國民等の罪といはなければならぬ。如何に學問や技藝が進歩しても、此の如き洪恩に報じ奉らんとする至誠の念の缺けたものが多くなれば、此國の健實なる發達は出來ぬに定まつて居る。

心誠ならざれば、如何なる嘉言も皆うはへの裝飾にて、何の用にかは立つべき。心だに誠あれば何事も成るものぞかし。

と軍人に對して諭させられた所は、軍人ならぬ者も共に遵奉すべきものである。此國に生れたるものは皆誠心を以て君と國とに盡すべきである。君に盡すは即ち國に盡す所以である。

### 八 大國民の自覺

神武天皇の詔に「皇孫正を養ふの心を弘めん」とある通り、遠く天孫降臨のむかしから吾が日本國は正義の上に立つて居る國である。曾て一たびも暴力を以て他の國に臨んだこともなく、一たびも吾が領土を擴張せんといふが如き野心を以て他に對したことも無い。

久堅の空はへだてもなかりけり土なる國は境あれども

といひ、若くは

四方の海皆はらからと思ふ世になど浪風の立ちさわぐらむ

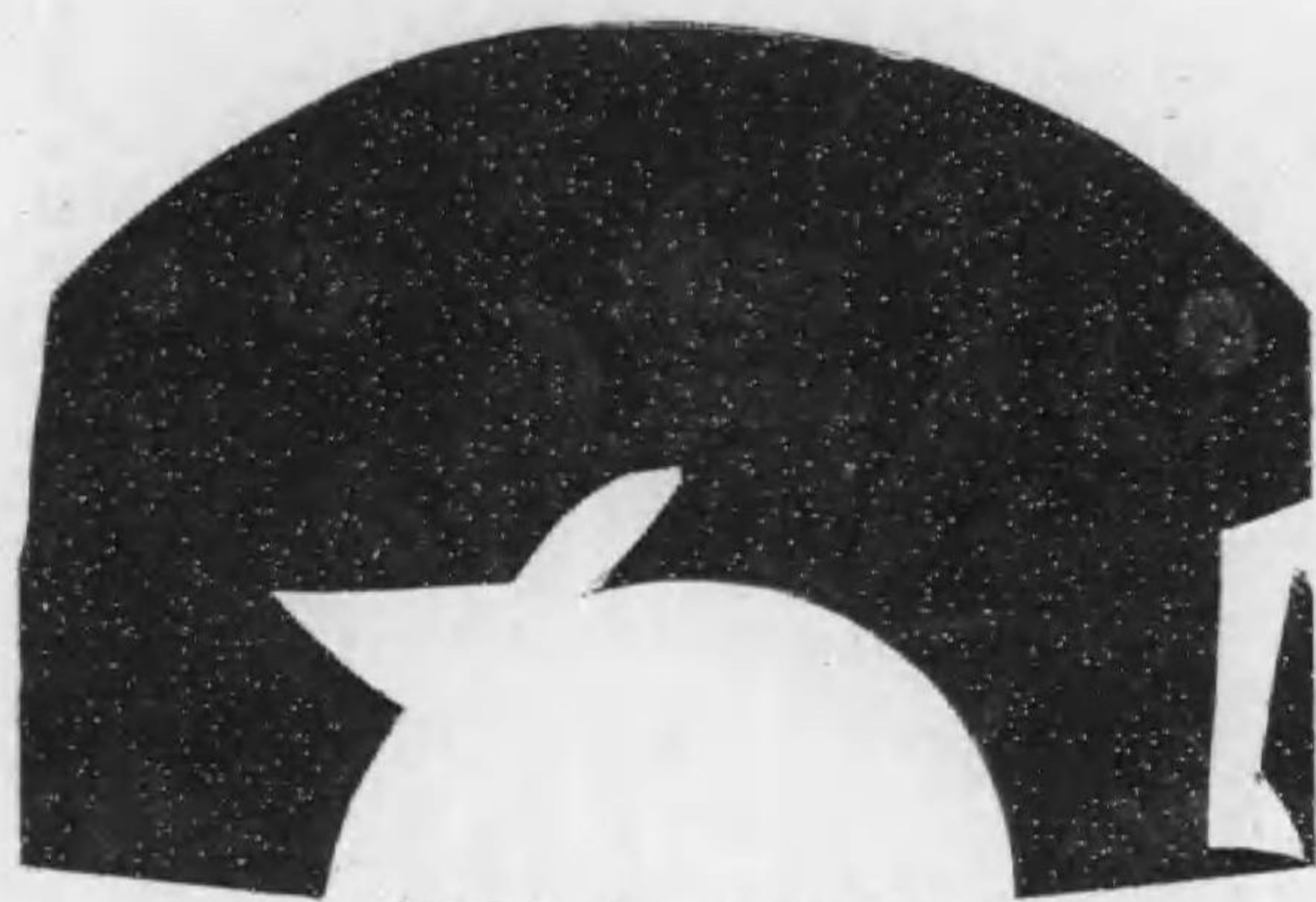
といふが如き御製は、日本國の天皇にして初めて世に示したまふことを得べきである。他の國の君主の如きは、たとへ此の如き事を公言しても、其國の既往の歴史を回顧したならば、心に耻ぢずには居られぬであらう。

彼の白人の國々に於て頻りに正義人道が唱へられて居るにも拘はらず、彼等が人種的偏見を脱し得ぬのは明なる事實である。これは一朝一夕にして生じたる事ではなく、



一五八  
彼等の遠い祖先よりして傳へ來つたる風習である。遠い昔の希臘時代或は羅馬時代に於て、彼等は地中海のまはりに住む諸國民の中に在つて自分達に勝れるものは無いと誇つて居た。事實その通りであつたに相違ないが、彼等は他の彼等よりも劣等の人種を教へ導いてやらうといふ考へは無く、其等の人々を奴隸として使ひ、獨り自國の文明に誇つて居たのである。希臘の哲人として知られたアリストテレスの如きも「奴隸を使ふのは已むを得ぬことである」といつて居る。實際耶穌教が羅馬に傳播するまでは、凡ての人類を平等に愛するといふことは全く彼等の間に教へられなかつたのである。其の耶穌教なるものはイスラエルの國民の中から起つたもので、即ち東洋人の中から出た教へである。佛教といひ儒教といひ、道教といひ乃至耶穌教といひ、凡ての高尙なる教へは皆東洋から出たのである。吾等東洋人たるものは決して此事を忘れてはならぬ。

最近の數十年間、吾が日本をはじめ東洋諸國は皆西洋の學問や技術を學ぶことに熱



古代ギリシヤの風俗

中して居るために、何事にも彼等を仰いで先輩とする習はしとなつて居るが、彼にも我にも各長する所がある。自然界の現象を研究するとか、其の研究したる結果を應用して發明をするとか、いふ事は彼等の長する所であるから、之を學ぶに如くは無い。しかし人の心を正しくする所の教へは何れも東洋よりして出たるものである。吾等は他の長所を學ぶことに力を用ふると共に、我が長する所を忘るゝの愚を思はなければならぬ。耶穌教が西洋へ傳はつて後、なほ彼等は他の人種を劣等のものとして蔑視するの習はしを改めることが出來ず、奴隸制度の如きは



今よりツイ數十年前まで存して居た。彼等は耶蘇教徒たることを誇りとしながら、耶蘇の教へとは根柢から相容れぬ奴隸制度を廢止せずして千年以上も送り來つたのである。西郷南洲が之を評して、

文明とは道の普く行はるゝを言へるものにして、宮室の莊嚴、衣服の美麗、外觀の浮華をいふに非ず。世人の西洋を評する所を聞くに、何をか文明と云ひ、何をか野蠻と云ふや、少しも了解するを得ず。眞に文明ならば未開の國に對しては慈愛を本とし、懇々説諭して開明に導くべきに、然らずして殘忍酷薄を事として己を利するは野蠻なりといふべし。

といつたのは最も適切なる批評である。

されば彼等白人の國々の海外發展の跡を見ると、殆んど正義人道を顧みず、所謂力づく腕づくの觀がある。羅馬帝國が亡び、續いて封建制度が倒れ、歐洲に於て多くの對立したる國々が各その實力を以て競争するやうになつたのは先づ十三世紀の頃から



コロンブスの上陸の圖

といつて宜からう。各自に其の國を盛にするためには、何とかして其の實力を養ふべき道を講じなければならぬ。此際に當つて東洋諸國の事が彼等の間に知れ渡つたのは、彼等に取つて大なる福音であつた。印度のこと、支那のこと、其他亞細亞の諸地方のことが漸次に彼等の間に知れ渡つたのを、彼等は耳を敬て眼を丸くして聽いて居た。因より東洋地方の真相が彼等の間に傳へられたわけではないが、兎に角今までのやうに茫漠たる智識でなく、やゝ具體的の事が彼等に知られ



たのである。其時に彼等の胸中に書き出されたる東洋といふものは『非常に廣くて地味もよく物産も多く、地下には金銀寶石の無盡蔵あり、而も智識の程度の至て低い人の住んで居る處』であつた。何れにか發展の場所を求めて居た彼等が此の如きことを聞き込んだのであるから、其の喜びは察すべきである。彼等の中の野心ある者は早く東洋へ押し渡り、一舉して巨萬の富を掴まうと考へた。此より東洋熱は次第に彼等の間に盛になつて來た。彼等が東洋へ來たいといふのは、何事を學ばん爲でもなく、何事を研究せんが爲でもなく、唯だ自由に活動して大なる利益を掴みたい爲のみであつた。

東洋へといつても陸地から來るのは極めて困難である。さりとして未だスエズの運河の出來なかつた頃であるから、地中海より印度洋へ出るわけには行かぬ。さすれば亞弗利加の西岸に沿うて來るより外に途はない。ところが此の航海には最も多くの困難が伴つて居る。それで彼等の東洋發展の夢も容易には實現されなかつた。彼此して多

くの歲月を経るうちに、ジェノバの人コロンブスは印度へ來るために新しい航路を取ること考へつた。彼は地球が圓いものであることを信じて居た。勿論亞米利加の大陸などのあることを知らなかつたのであるから、彼はスペインの海岸から船出して、何處までも西へ西へと行きさへすれば必ず印度へ着けるものと確信し、その實行に就て援助者を求めたが誰も容易に之に應ずる者はなかつた。漸くにしてスペインの海岸から船出することの出來たのは紀元一四九二年八月のこと、同じ十月に至り嗣らずも亞米利加發見といふ大功業を樹てたのである。其の結果からいへば彼の功績は實に莫大なるものであるけれども、彼の航海は世界の爲にとか、人類の爲にとかいふ高い理想によつて思ひ立たれたのではなく、印度へ行つて巨萬の富を得たいといふ動機からである。

葡萄牙の人ヴァスコ・ダ・ガマが亞弗利加の南端なる喜望峯を廻つて、初めて印度洋を眼の前に見ることが得たのは此より少し後れて、一四九七年の事である。此より後



は西洋人の東洋地方及び亞米利加方面に向つての發展が非常なる速度を以て進んだ。亞米利加方面のことは暫く措いて、東洋の方だけを見ても、一五〇五年には印度へ葡萄牙の總督が根據を構へ、一五一七年になると葡萄牙と支那との通商が開かれて居る。其頃歐洲に於て最も強大な國といへば西班牙と葡萄牙と和蘭で、之に次ぐものは英佛の二國であつたが、東洋に發展して來た順序もやはり此の通りである。最初に吾が日本へ入込んで來た者も前に擧げた三國の人であつて、英佛等は之よりも後れて居る。彼等が東洋に發展して來るに當つては、通商の運を開き更に進んでは種々なる利源を搜し出すことが重なる目的であるが、耶蘇教宣傳の運動も之に伴つて居る。勿論彼等が宗教を利用して勢力擴張を圖るのだと一概に斷定することは出來ないが、兩者が相伴つて居たのは事實である。

其の耶蘇教宣使の中には確かに敬服すべき人も少くなかつた。唯だ神の教へを弘めたいといふ一心から、如何なる艱難にも堪へ、如何なる迫害にも屈せずして努力し



俗風の度印

たる壯烈の事蹟は確かに尊重すべき價値を有するものである。彼等が其の本國の領土擴張運動の手先となつて働いたと思ふのは間違ひである。彼等は確かに純乎たる宗教家であつた。唯だ彼等の宣敎の途が開けて來るに伴つて、其の本國の侵掠的運動が歩を進めて來たのは事實であつて、如何しても之を曲辨することは出來ぬ。吾が日本でも耶蘇教の宣傳と貿易とは相伴つて始められて居るのである。日本と西洋諸國との交通の開けた年に就ては種々の説もあるが、先づ天文十二年の頃、種子島へ葡萄牙の船が漂着したのに初まると